

# 劇壇縱橫

## 文樂座號

大阪の郷土藝術	高安月郊	本朝二十四孝	松長照夫
人形よ、残れ	山本修二	操人形の沿帯	酉野四縁
人形淨瑠璃に就て	小林一三	文樂座雜感	西田眞三郎
西洋人を案内して	宮島綱男	いさゝか乍ら	白井松次郎
人形芝居が道頓堀へ	石割松太郎	東京より	大谷竹次郎
桐竹紋十郎の言葉	川尻清譚	文樂座の三巨星	八木柳緑
文樂に就て	食満南北	漫書	吉岡烏平
私見	大西利夫	伊賀越道中双六	山上貞一
人形淨瑠璃	矢澤孝子	人形芝居	成瀬無極
文樂座偶感	三島章道	笥掘の事	新谷誠水
人形芝居愚感	富田泰彦	文樂人形雜感	京極利行
文樂興振の第一步	加藤亨	木偶は語る	島江鐵也
文樂は何故振はぬ	高安吸江	我が劇場	島華水
文樂出開帳禮讚	中井浩水	大阪人の義務	三宅周太郎
文樂素描	岸本水府	文樂へのラヴ	服部嘉香
スケッチ	柴谷紫舟	民衆と接觸せよ	大江素天
回答録	百餘氏	編輯後記	

創刊號 (第一年第一號)

定價金三十錢 (送料二錢)



或る夜の  
形人部  
屋

豊竹 津太夫さ  
鶴澤 道八

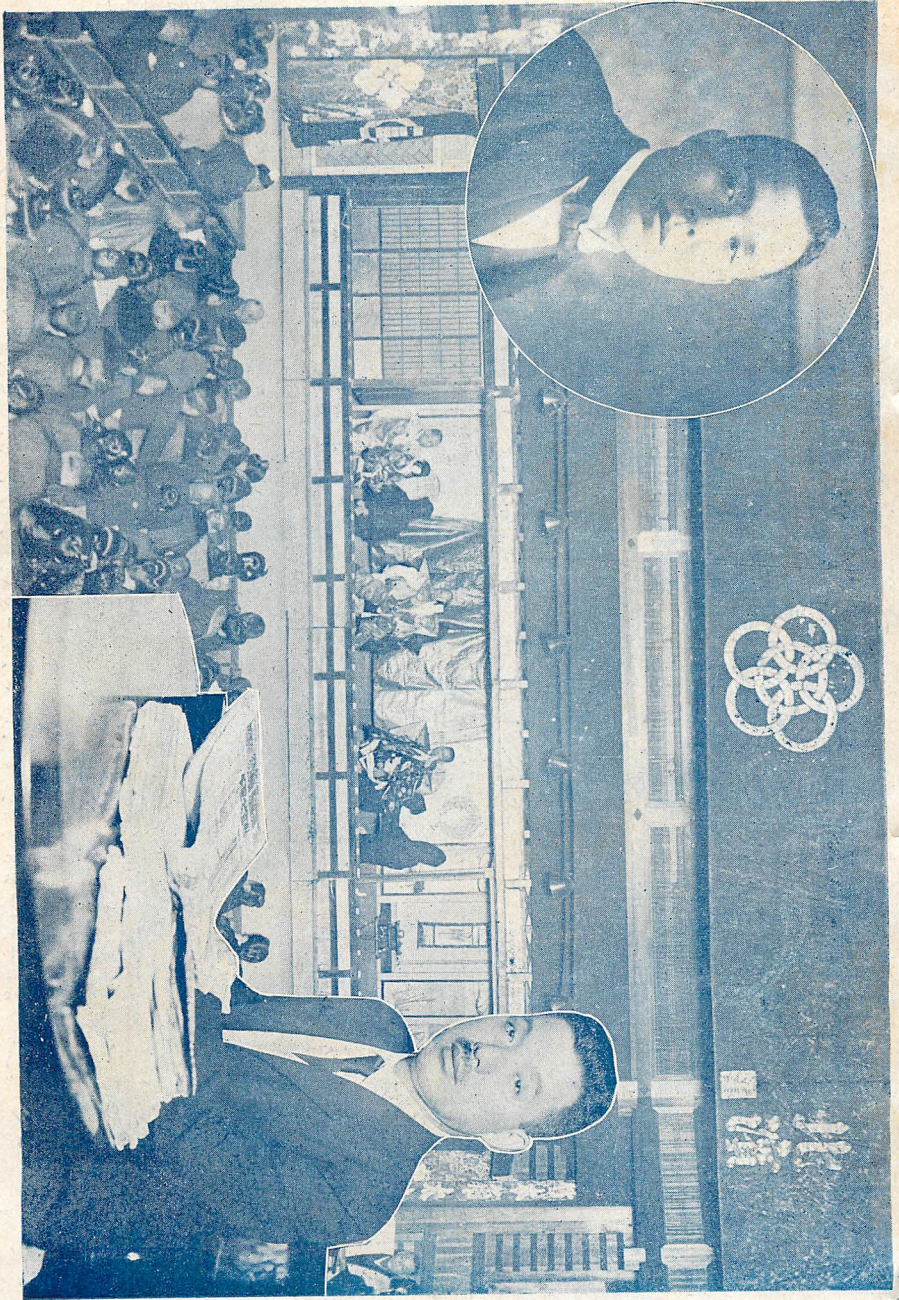


豊竹 古鞠太夫さ  
鶴澤 清六



豊竹 土佐太夫さ  
野澤 吉三郎





白井松次郎氏(下)及び大谷竹次郎氏(上)の舞台(本朝二十四回)の場

白井松次郎氏(下)

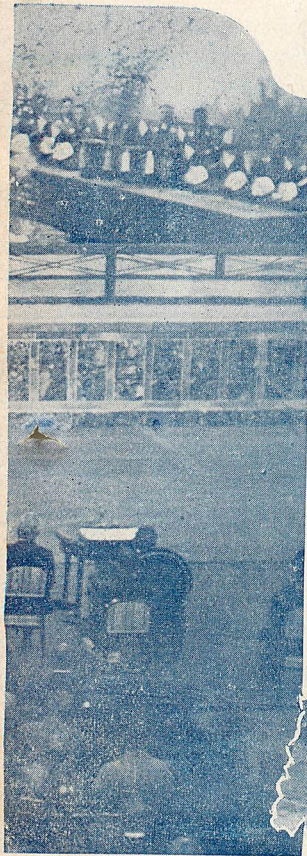
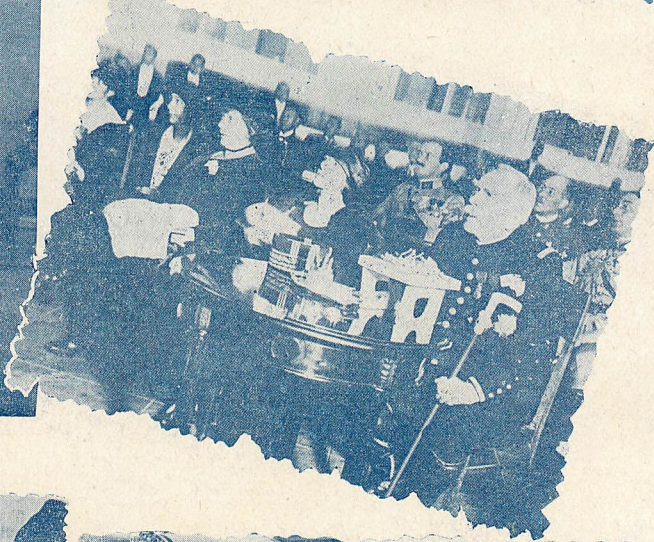
大谷竹次郎氏(上)

舞台の場

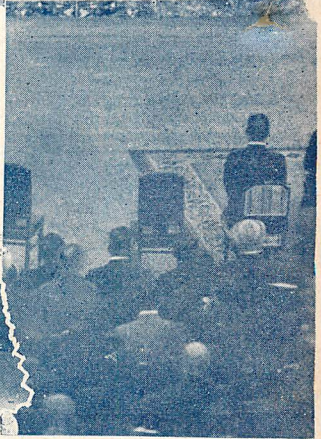
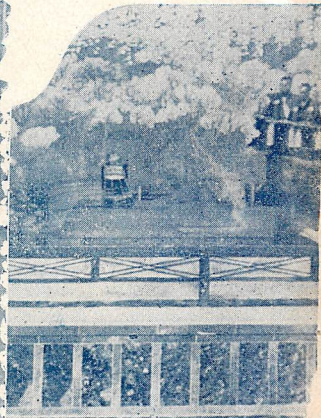
本朝二十四回

# 文樂座畫報

(右) 文樂座樂屋に於けるフランス大學教授 シルワン・レヴィー氏。(中) 舞台の人形に見されてゐるジョツフル元帥及全夫人。(下) 文樂座樂屋を訪れた故ルーズベルト氏未亡人 テオドル・ルーズベルト夫人。椅子によつたのが夫人で、後方、ハロルド・ノーアカツスル夫人。左側はルーズベルト氏の遺息ケルニスト・ルーズベルト氏。



(中上) 大阪中央公會堂に於ける文樂座の人形浄瑠璃を御台覽の秩父宮殿下。(中下) 文樂座客間に於ける佛國大使クロードル氏と  
 松竹合名社長白井松次郎氏。(左上) 全じくワシントン大學教授カヴェン博士及夫人。中央は白井社長。(左中) 全じく瑞興王妃殿  
 下が人形と握手し乍ら打興ぜられてゐる處。(左下) 八重垣姫を中央にフランス大學教授レヴィー博士及夫人の紀念撮影。





津 沼



# 劇壇縱橫

— 號 座 樂 文 —



# 大阪の郷土藝術

高安月郊

私が青春の幾年を大阪で過ごした頃、缺かさずに行つたのは文樂と稻荷座であつた。攝津大塚が越路時分の泣くにも美しく過ぎる織麗、先代津太夫の絞り出す苦しさがそれ丈味になる澁さ、呂太夫の腹の底から出る釣鐘の様な太さ、大隅太夫の虎をも吐り飛ばす強さ、先代彌太夫の枯れた節の中に言葉の活躍、先代團平の絃も覺えさせぬ微妙の調、紋十郎が役者の女形も及ばぬ女の風情恐らく人形淨瑠璃の最後の盛期では無かつたか。

最も大阪の特性を表現したのは義太夫節である。天王寺から出た竹本筑後は京の井上播磨と宇治加賀を折衷して一流を立てたが、其技巧に生命を與へたのは大阪の郷土性であつた、あの謠から出て濁つた太い所、一中より深

く腹の底から絞り出す所、長唄より沈んだ中に潜む熱、清元より野暮な代りに實意のある所、新内より落付いて徹底的の所、京、江戸とはちがふ大阪の人の特性が義太夫以來の發展につれて結晶したのである。さうば大阪を代表するものとしては先づそれを擧げねばならぬ。しかも近年泰微の氣味がある名手が乏しくなつたのも一因である、所作の出なくなつたのも一因である、根本的にも時代と疎遠になつたのである。今の大阪の人は最早あれと合致するのは餘りに過敏になつた、單に節や技巧丈味ふさは心から充實しなくなつた。歌舞伎劇の方では段々一幕二幕と選抜されてゆくのに、此方では末に通して出すのは原作に忠實であるが、それ丈冗長過ぎる、そして慣用の物に限つてゐるが、それは作意に於て多く甚だしく時代おくれになつた、そして眞の名作をすたれたまゝにしてゐる。此儘では遂に一部の年月に古藝術の片影として餘命を保つてであらう。

しかしそれは餘り惜しいものである。折角大阪の郷土性を表現したものを、せめてそれ以上發展せぬまでも生氣をもたせたいものである。それには先づ作物の選擇が第一である。時代物の九分までは到底全部やつては今後に適せぬ。されば其一段を取るより外は無世話物の方が比較的今後の人情にも合ふが、それは吟味を要する。そして久しくすたれた物の中から後活させて好いのをさがすが好い。近松物でもぎれ丈出されてゐるか。其儘なのは指折るほごである。改作したものは無論原へ戻さねばならぬ、それは劇でやるより易い筈である。昔は道行丈素人まで口にして唄本を懐にしたものである。近頃は掛合で賑かにやる追出しになつたが、更に工夫して、作者が殊にそこに骨を折つた文句を聞かせる様にしたい人形の衣裳も原へ戻すが好い。繪入の淨瑠璃本を見ても今のさ大に變つてゐる。書下し當時の風でやるのが當然でまた今の目にも珍らしい興味がある。

道具が寫實的精細になつて來たのはよろしくない。成る丈單純で人形に相應した形式味を出す様に心がけぬばならぬ。出づかひは役ミ混雜して技巧を妨げる。間に下坐の合方をつかふのも芝居染みて本領に背く。芝居が淨瑠璃其儘やつて不可なる様に、人形が芝居類似でも不可、此方はさうしても淨瑠璃本位である、しかしまた西洋の人形より複雑な丈、外客にも見せて感心させる様にしたい。或種の戯曲には人間より人形の方が好いといふ話もあるからは、人形芝居の前途もある、今は先づ過去を回顧し、現在を看破して、眞生氣をつける時である。

## 人形よ、残れ

山本修二

文樂の人形を見た感激のまゝに筆を執る。

「知る」こゝは「感じる」ものにシ

つて禍ひである。歌舞伎に就いて餘りに多くを知りすぎた私はそれを感じる力を失つてしまつた。が、人形の魅力を感じる力は私にまだ残されてゐる。

私は、ちやうど日本傳來の歌舞伎から、左圍次の綺堂物や、猿之助の春秋座が派生したやうに、文樂の人形から新しい力が崩れ出さなければならぬ、あの手摺の彼方で、マアテルリンクの『タンタイルの死』や、イエイツの『まぼろしの汝』が上演される日が來なければならぬ、かういふこゝが主張したかつた。が、今の私にはさういふ心の餘裕はない。

昨夜私の目の前に展開された『沼津』や『堀川』の人形劇には、いろ／＼の夢が宿つてゐた。その夢は古びた錦畫のやうに色のあせた歌舞伎の夢ミは、まるで違つたものであつた。その夢は動く「力」を持つてゐた、飛躍する「生命」を持つてゐた、「時」の力の及ばない本當のクラシツクの燦たる美しさに輝いてゐた。

「時」に共に流れる藝術もある。『永遠』こゝにも動かない藝術もある。文樂の人形は「永遠」の藝術である。それはメロスのヴィイナス像のやうに、古い伎樂の假面のやうに、變轉極まりなき永劫の流れの中に、押し据ゑられた背の高い記念碑である。

私はあるがまゝの「文樂」に満足する。私はあの古典美の保存をのみ主張する。が、「保存」こゝこゝは、「創造」よりも困難な仕事だ。私はそれを知つてゐる。それにも拘はらず私は、この「保存」こゝいふ困難な事業を、文樂の諸君から期待する。あの人形劇の美しさは、一分増しても一分缺けてもいけないノツピキならぬ美しさである。文樂の人形劇よ。あのまゝの姿で残れ。能樂のやうに完全に残れ。狂言のやうに残るのなら、寧ろ亡びてしまつた方がいゝ。

—私は昨夜文樂の人形を見た感激のまゝに筆を執つた。

# 人形淨瑠璃に就て

小林 一二

文樂座が東京歌舞伎座及び各地方を巡業して好成績を納め、更らに十月道頓堀中座に於て開演するこいふ盛況はこの古い郷土藝術のために賀すべきことである

然し、この殆んご完璧に近い古典的藝術が、果していつまで存在するであらうか。今日の盛況なるものは、蠟燭の灯の將に消えんごする刹那に、瞬間的に明るく燃えあがる仄明りと同じやうに、一時的の現像に過ぎないことはあるまいか。

これが私の文樂座に於ける人形淨瑠璃から得るところの感想である。

そして、この感想に對する理由は、即ち第二の質問に對する答へである。

あの美しい歌舞伎劇は、現代ご調和せざる部分は惜氣もなく削り取られ、

或ひは訂正され、その夢幻境は理屈に侵蝕されて、物足らない不満足を感じる、現代劇は未成品が多くて、荒削りで、消化しきれない。歌劇はまだまだでんでお話にならない——さういふ工合にあらゆる種類の劇は、いろ／＼の缺點がある。混沌ごして頗る不統一であり、浮薄である。従つて是等の新藝術に飽き足らずして、そこに何か不満を抱いてゐる人々が、偶然にも、傳統的に培はれて來た古典的藝術ごして統一もあり、味もあり、古い浪花情緒に漲つた、實に完璧に近いまでに洗練された人形淨瑠璃を見て、反動的に魅了されたのである。

そしてたゞそれだけに過ぎない。

人形淨瑠璃は、統一された古典的藝術ごして、完成したごころに價値がある。そして山頂に辿りつけば、道は自から下り坂ごなる。

人淨瑠璃の取り扱つてゐる内容は、近代の思潮ご餘りに懸け離れてゐる。近代の空氣を呼吸した若い人々の胸に

觸れて、何らその血を躍らす程の刺激がなく、従つて文樂座の人形芝居は、現代に存在し得る資格が乏しい、能樂壬生狂言、舞樂の保存は、これを支持するに簡單なる點に於て、保存し得るやも知れないけれど、保存するものごしては、人形芝居は餘りに複雑で、費用がかゝり過ぎるから、その保存の可能性が稀薄なごこを、私は頗る惜しいご思ふ。歌舞伎劇は保存が出來ない代りに變化するから、時代に順應してそれ相應のものが存在するけれど、人形芝居は淨瑠璃が主であるから、變化するごこが破滅を意味するもので、此の郷土藝術の保存は残念ながら不可能のごこではないかご思ふ。

尤も淨瑠璃だけは、清元、長唄なごご共に保存され得やうが、人形淨瑠璃ごしては、時代の趨勢ごして、結局夕日の薄れる如く、衰微凋落の悲運にあるご思ふのである。

附記：右の原稿は一、あなたは文樂座から何を得られましたか、二、如何にして今後の文樂座を保存すべきでせうか、の質問にお寄せ下すつた。

# 西洋人を案内して

## 宮島綱男

文樂に限らず芝居でもそうであるが日本で唯一である藝術は大いに世界的に發展をさすべきものだ。私は思ふ。

世界には唯一であるために誇るものは多くある。併し我國の人形淨瑠璃の如きは唯一であるばかりでなく、熟練を経て極微に達したその妙技は世界何れを探してもないのである。此の點は日本人が技に於て世界各國何れの國民にも劣らない藝術上の證據である。

而も其れは藝術上のみに止らないで科學、又機械工業に應用して、日本人の技は總ゆる方面に卓越を誇る事が可能である。云ひ得るのである。

斯の如く、世界何れにも其比類を見ない只一つの残された文樂に對しては國家が大いに之を保護すべきである。私は思ふ。最も國家が芝居等を保護す

るに當り、之に準じて他に色んな保護すべき物件が續出し、その取捨に相當の困難を生じて來るではあるが、それは適宜の處斷によつて取捨すればいい。私の考では普通の芝居ですら國家が保護すべきだと思ふ。まして世界に冠たるユニーク云ふ意見合を裏面に持つた藝術に對しては、單に芝居を保護する云ふ名目からのみでなく、國家全體の利益から云つても大いに保護すべきである。若し之をしないで放任して置く時は、すたれるより外ない。何となれば斯界の人々は、餘りに報ひられて居ない。血みごろな練習の結晶であるのにも拘らず、一般人は普通の芝居の方を面白がる。従つて斯道者は有爲の方へ走る、落ちついてやれないのである。妙技が異なるから云ふ事は、個人的に選んだ云ふ理由にはならない。だから此儘で行けば文樂が亡びて行くであらう云ふ事も想像に難くない。こうした心配は大いに國家がしなければならぬと思ふ。

私は多くの外人に接し、よく國有の芝居、藝者の踊り、等へ案内をしたがその時その外人の所感を藝術を見乍ら直接きくに、文樂などには大方が非常に感服してゐる。藝者の踊り等は成程美しい、が併しそれは單に顔が美しいのであり、かんざしが美しいのであり、服裝が美しいだけであつて、踊りそのもの、技には少しも感心出來ない。眞に驚ろく程の感動を觀者に與へない。普通一般の芝居に於ても而り。さすれば文樂の保存は眞に考ふべき問題ではないか。

外國には文樂に似たものが無いではない。コリネット人形を稱して、文樂に似通つたものが現今でもある。しかしこれは我國の如く指先の技によつて働くのでなく、機械力で操るのである。きれいだ云ふ點は實際人間の術に敬服する點に於ては我國の人形等は他のものより異なる、文樂を觀た外人がよくあの素晴らしい手先の藝術が、機械工業に應用されたら日本の機械工業は驚

ろくべき進歩を見るだらうと云つてゐるが、こんな意味から西洋人に誇るべきものゝ一つとして、この報ひられない割の悪い、斯道者のためには是非共待遇の道を講ずべきである。その待遇は勿論前に云つた如く國家がすべきである。多少の税金を使つてもやるべきである。西洋では、ユニークでなくとも國家の保護を受けてゐるものが随分ある。我國でも文展、帝展等が多少の保護を受けてゐる様である。文、帝展が保護を受ける以上、我國々々の國粹藝術に對しては當然國費を投じて保護すべきではないか。

今日の日本は、現實に促はれ、こもすれば、クラシカルを忘れたり、輕んじたりする様だが、非常にいけない事である。國家の活動は何事によらず歴史である、歴史の無い處には何の尊さもない。文樂は長い歴史、殊に美の歴史を持つてゐる藝術である。之が保護されないこと云ふ譯はない。歴史を尊はれない人間は歴史を知らない人間である

歴史を知らない國民は、その場限りの永續しない國民である、何れから云つても、又經濟上の利益に應用する點から云つても、文樂の保護は是非必要である、西洋人は藝者の踊りはほめないが、文樂の藝術には口を極めてほめる西洋人がほんじうに感心する處に、我々の強味があり、誇りがあるのでないか。現在日本の文明は事實上後れて居るのである。日本は今世界の文明を追つて居るのである。文明を追ふことは止むを得ないとして、誇りは、どこまでも一つの歴史として尊びたい、大切にして置きたい。その上で文明を追ふ現狀から脱したい。西洋の文明を追へばそれだけ後れることになる。後れてゐるべき時でない、どこかで追ひ越さなければならぬ。追ひ越すには是非共日本獨特の文明が必要になつて來る、この意味で種馬は何かの爲に、大切にして置きたいと思ふのである。

昔は「光東方より發す」と云つた、が、この意氣で今度は東洋文明を以つ

て再び西洋を照らしたいと思ふ。戰爭に勝てば、不景氣が直ればと云つた處でそれは要するに枝葉の問題である、世界に貢獻し、覇を稱へるものは日本獨特の文明でなければならぬ。それには個人國家が共に力を協さなければならぬ、若し個人が出來なければ國家が之をすべきである。即ち文明を取り返す原動力となるものは、躊躇する處なく、國家が保護すべきである。

## 人形芝居が道頓堀へ

石割松太郎

◇  
文樂座が、御靈境内の古巢から出て道頓堀の中座で十月興行を打つと云つた。これは文樂座の常興行が不振つゞきである、古いこの藝術の香りの高い操りが、御靈といふ古い殼に入つてゐたのでは、世間との交渉が杜絶えた形になる、操り芝居を民衆への紹介興

行であるといふのが主旨であるらしい

◇ この主旨の割出されたのは、この夏文樂一座が、いつものやうな人形を除いた素淨瑠璃でなく、堂々東上してあつたやうに、歌舞伎座で興行するに、大入満員をつづけた、九州博多の興行も大入満員をつづけた、神戸もさうだ、京都もださう有様、この潮先に乗つて、道頓堀へ遊び出し、まだ人形淨瑠璃を知らぬ民衆への紹介興行、新しい操最負、淨瑠璃に親しみを持たす看客を引つけようとするのが、その策戦の一般方畧であるらしい。

◇ こゝで考へねばならぬ事は、文樂の世間化——いふ熱さぬ言葉を使ふとを許していただきたい——が、果して年幾度かの道頓堀興行で、實行されるだらうが、幾方の効果があるだらうか私は疑問とする。今日の東京、博多その他の人形淨瑠璃に對する人氣は、その藝の力といふよりは、「珍しき」

いふ一點に存してはしないか、尤も私は、だから今度の中座での紹介興行が悪いといふのではない。餘りに御靈境内に引込んで世間との交渉が少いだけに、刺戟のない文樂内部の人達の世間化は望ましいが、一面から考へるに文樂座の世間化は、より早くその滅亡を急ぐ形をとりはしまいか、「滅亡」いふ辭が悪ければ、その衰退を急ぐことになりはしまいか、考ふべきとはこゝだ。

◇ 大體において、今の三味線樂が、清元にしろ、常磐津にしろ、長唄でも今後ぞれだけの壽命があるか實は心細いわけであるが、これらの江戸音曲が素人の好き者や、花柳界にその餘命を保つてゆくが如く、淨瑠璃も人形を離れては、可なりに上方に残るとだらうが、問題は操りである、今のやうな状態に「人形遣ひ」を捨て、おくことは「操芝居」に致命症を與へるものだと思ふ。

◇ 斷つておきたいとは、私は三味線樂が、或る一部の好き者、花柳界にのみ残るこいつたが、これは今の常磐津、清元、長唄をさしていつたので、「三味線樂」そのものをいふのでなく、三味線を基調とする新しい音樂の將來を否定するのではない。

◇ こゝで當然起る問題は、操芝居の保存問題、保護問題である。

或る一部の人々は、帝室の保護をいひ、或る者は、この土の産んだ立派な郷土藝術であるだけに「大阪市」の保護を云ふする人があるが、私はこれ等は迂遠極まることだと思ふ、今のところは迂遠極まることだと思ふ、今のところ帝室なり大阪市なりが、文樂座の操芝居を保護しさうな機運も時期も仄の見えぬ、ある遠い將來において、そんな機運が熟するとがありさするも、もう遅い、死兒の年を數へるやうな結果を齎らさう、それ故に私は操芝居の危機が目捷の間に迫つて來てゐると思ふ。

大阪市や帝室の保護をアテにしてゐる間に操はなくなつてしまはう。そんなまぎろろしい事をいつてゐる暇に、「人形遣ひ」の養成に「人形遣ひ」の保護が目下の急務、恐らく目捷の間に追つてゐる急務はこれだと思ふ。

◆ 文樂座の三味線彈はまだ素人の稽古や何やからで收入の道はあらう、太夫もまだ最負の保護が加へられてゐるが、獨り人形遣ひの生活状態は、これらの人々とは違つた境地におかれてゐる、今までの人は或はこれでもすんでゆくだらうか、これから出ようとする若手の人形遣ひが、この生活状態、あの周圍では、人形遣への道が全くはとまれてしまはう。

◆ 若い太夫も、若い三味線彈の養成も必要だらうが、問題は——眞先きの問題は「人形遣ひ」の養成である。

◆ 一富豪の寄附、郷土藝術のための保

護團體の組織なご案は數多く出ようがさし詰めの問題は、松竹合名社が文樂座に限つてその商賣主義から離れるとだ、よくとも文樂座の元の持主が、永年の不入を意に介せずして、文樂はお客が來なければ仕方がない、俺一人聽いてゐるさいつて、不入の土間の中央にドツかミ座つて熱心に聽いてゐたさいふ、その意氣が欲しい、この「操芝居」を愛するその熱が欲しい。

◆ すべてが、之から生れはすまいか。今が危機だ、寸時を諸忽に付すとが出来ない

## 桐竹紋十郎の言葉

川尻清譚

回顧すれば明治廿六年八月、東京の歌舞伎座へ大阪文樂の人形淨瑠璃が乗込んで寂寥たる梨園を賑はした事がありました。一座は故竹本大隅太夫、三味線鶴澤叶、人形遣ひには吉田玉造、桐竹紋十郎等の

顔觸が出演して大好評を博しました、此興行中私は雑誌「歌舞伎」誌上へ人形の型を書く仕事の上から、木挽町の扶桑館に宿泊して居た桐竹紋十郎氏を訪ふた時それからそれと盡きない藝談に話が合つて、二度も三度も遊びに行く度毎に、いろ／＼の苦心を聞いた。その一節を爰に再録し、故人が如何に藝道に熱心であつたかを偲ぶと共に、今日の斯界に取つて此言葉が頂門の一針ともなれば幸ひである。

桐竹紋十郎曰く

人形を遣ふ形ちの中に、斯の道で云ふ所の『うしろ』と申す手がありまして、これが中々やかましい型なので御座います、『うしろ』とは、右の手を離して左一手で人形を後向きに立たせる形で、随分受ける型で御座います。此『うしろ』遣ひは一ト場に一ヶ所以上は用ゐられないものなので、取分けむづかしい物に成つて居りますのですが、當今ではやたらに遣ふやうに成つて仕舞ひました、『うしろ』を遣ひ初

めたのは、吉田辰五郎云ふ人で御座います。私共が江戸で修行を仕て居る時分には、先代の伊三郎が『うしろ』を熱心に遣ひまして、私は此人から取つて覚えましてので御座います。私は其頃伊三郎の左を遣つて居りました爲さうかして此『うしろ』の遣ひ方を覚えたいと思つて、毎日氣を付ては、覗くやうに仕て居りましたけれど、さうしても分りませんので、或日の事いろ／＼考へて、私は左を遣ふ役ですから始終自分の左の手の明いて居ります所から、伊三郎が『うしろ』を遣ふ時に私は人形の手を左へ持替て、右の手を其中へ突込んで見たのです。これで始めて氣の付いた事があつて、それからいろいろに工夫を凝した上、暇さへあれば自宅で人形を持出して『うしろ』を遣つて練習を重ねましたのです。始のうちはさかく首が廻つたり、體が捻れたり、形がくづれたり、思ふやうに行きませんでした。物の二年も稽古を致して、それで漸く自分だけに發明

をして今日まで其行方で遣つて居りますので、此持方は斯の道でも秘傳に成つて居りますので御座います。夫はさもなく、人形を遣ふに云ふ事が決してやさしい事ではないので、一個の人形を三人掛りで動かすので御座いますから、馬鹿げて居るに仰ればそれに違ひ御座いせんが、此三人が一つに成つて仕舞つて、三尺の人形の中へ五尺の人間が三人共這入つて仕舞へば、それでよいので御座います。所が扱それが出来ません、手は手、足は足、自分で勝手に動かされた日には、逆も見られた物では御座いせん。是が人形計りではなく、たゞば一家の事に仕て見ても、私なら私が主人に致せば左を遣ふ者が女房で、足を遣ふ者は番頭さか、又は女中さか云ふ事に當るだらうか存じます。一軒の家でも主人が眞に成つて、女房がそれを助け、番頭が力を添へるので、始めて一家和合が出来ると云つた理屈で人形も其通りで御座います。されば何事をするのも一致仕

て氣を描へてやらなければなりません。い、なごみ大層高慢らしく成ますが、私共の致します事は足りないだらけで御座いますから、御見物の御評判に御小言の多いのはこちらの勉強が至らないので、一生を修行に心得て藝道を勵む心得で御座います。しかし此頃の人形遣ひは中々器用で御座いますから、年寄の云ふ事などは聞いては居りません。聞かない人には云つても直りませんですから、私は餘り小言を申しませんやう方で御座います。又名人に成る人は云はないでも一生懸命に覺えますので、つまり常々の心懸が違ふので御座います。しかし上手に下手は何の道でもすぐに分りますもので、此人形遣ひなども、一寸した振事を遣ふに仕ても、疊の上で踊つて居るかと思へば天井へ附くかと思ふ程上の方で踊つたり、又下の方へ下つたり、丸で風船の様で、是では逆も人情が移りません、人形でも矢張自身が其役の精神をのみ込んで人形の中へ這入つて仕舞はなけ



ればならないので、それでないご見せる爲に遣ふ事に氣が入つて、餘計な動きやケレンを用ふる事に成りますから本當のやり方では御座いません、只人形を持つにも、二の腕を自分の體へ附けて持つ人が御座います。さうするご大變に人形は輕いのですが、其替り人形が必ず前へかどみます。私なごは幼少の時からやかましく云はれましたので、必ず手は體へ附けないやうに仕て少し反る心持で、腕を離して遣ふやうに心懸けて居ります。さうするご、人形はいつでもピンままつすぐに立つて居ますから、自然形もよい譯に成ますのですが、それでも手ご足ごが一致しませんご、腰が浮いたり呼吸が合はなんだり、ちよい／＼おまな事が御座いますして、さうしても人間のやうに自由に動く譯には參りません。たごへば手拭を遣つて涙を拭いて、頬冠をする役にしても、歌舞伎の役者衆ならば雜作もない仕料ですけれども、是が人形の方に成ますご、眞に成る遣手が工夫を

付て、左を遣ふ者に教へて、足を遣ふ者にも教へて、つまり二人で稽古をして、其上三味線ごも、太夫ごも、相談をする事に成ます、ご都合五人の手が掛つて、一人が二日づつ稽古をして十日間は掛る勘定で御座いますから、すべての事が大げさで御座います。しかし人形の話を斯うして委しく覺えて置て戴きますご、のちの者はごの位助かれますか知れませんが御座います。但し役者衆のなさる人形振は人形のギクシヤクする所を移さなければ人形には見えないご云ふお説は、それは全く左様で御座いませう。又人形遣ひの方では出来るだけ人形らしくしてなく、人間に見えるやうに致したいので、現に女形の人形を遣ひます私にも、女形にはクリズ、大クリズご云ふ首の遣ひ方ごそれから、三ツ指しご申して、向ふを三度指す形、また帯ご云つて、帯の所へ手を掛ける形が御座いまして、女形は大概此三つを應用して遣ひますのですから、この三手を封じて仕舞ひまし

たらば、恐らくは手も足も出ませんので、テンで動く道がなくなるのですが私は態ご此三手を封じて仕舞つて、扱外に動きやうは無いかしらご思つて、工夫を致しますご、さうしても人間の動き方へ目を付けるより外は御座いませんから、斯ういふ時にはあゝ動く、あゝ云ふ時には斯う動くご云つたやうに、それを用ひますので御座いますから、自然ご無理な形がなくなる勘定であらうかご存じまして、そんな事もほつ／＼やつて見て居ります、しかし御目に留るやうな事は中々仕出来しませぬのに、ましてやお書き下さるやうなお話も御座いせんので、只々老人の理屈で御座いますから、左様御聞流しを願ます。云々

## 文樂に就て

### 食満南北

△文樂に就て、郷土藝術の、傳説的の

こ、さうしたむつかしい話はしたくない。私はあの『津太夫サーマートーザイ〜』こいふ勢し現代から遠ざかつたやうな呼聲に頗る興味をもつてゐるものである。

△夢のやうに『唯今の奥語りまするは竹本古鞞太夫三味線……………』こ呼ぶあのアクセントも亦言はれぬなつかしいものである。

△三味線がゆつくり響いてくる、さうして太夫がウーさうなり出す、これから大變な事件がおこつてくる、さうした用意にも尠なからず興味をもつてゐる。

△一人づかひの人形。それがまた不思議に私の心をひきつける、ヒョクリ〜こ動くあの不様さに丸で魂が這入つたやうに……………皮肉に人間の動作を嘲笑らふやうに……………

△私はよく鑑太夫と間違はれる、これは鑑太夫の幸榮か、私の幸榮か、そのいづれかはしらない新橋の妓に肩をたたくかれて『南北ひん』こ呼ばれ

たのは鑑太夫であつた。梅月の前で『オツ師匠これから御出勤ですか』こ呼ばれたのは私であつた。

△さうして私はあの魂の這入つた一人づかひの人形にも似てゐる。又私によく似た人形が出るたびに私は何さやら百年の知己に會ふたやうに嬉しい。私の顔は人形さしても二枚目ではない。

△故人紋十郎のつかつた女形さ、今の榮三や文五郎のつかふ女形との間には、かたちの變化がある、さうして心持の變化がある、心持の上もかたちの上も頗る現代化して來た事が見える。ある時お姫様が今の女學生ではないかと思はれるまでに進歩(〜)してゐる。

△大隅太夫は心持を語らふこした人である、染太夫は意味を語らふこした人である、津太夫は淨瑠璃を語らふこした人である、攝津の大様は語物を語らふこした人である、越路太夫は人を語らふこした人である、これ

は皆故人の話である。

△淨瑠璃は太夫が語る物である、人形は太夫の言葉によつて動くべき物である、人形つかひが『サア來い』さか『みんなものぢやい』さか『さて〜』さかいふ言葉をさしはさむのは頗る太夫を侮辱したものである。私は絶対にこらない。

△假に今淨瑠璃の新作が出来たさしても、果して在來の如き節が附け得られるであらふか。たゞ節も人形も在來のごこかをこつてつなぎ合したのならば、新作であつて新作でない乃木將軍の如きは別である。

△若し古鞞太夫の如き若さをもつて文樂の現代化を謀つたならば果してどんなものが出来るであらうか、何さやら期待されるやうにも思ふが、又一面何さやら杞憂に絶えないやうにも思はれる。

△大阪の芝居は多く人形の型から來てゐる、さうして近頃は芝居から人形へ逆に型を贈つてゐるかたちがある

殊に河庄の治兵衛に於てそれがよくあらはれてゐる。

△人形淨瑠璃の一場を映畫化したら面白いと思ふ、淨瑠璃は語らなくつてもよい、其文句を現代の人に解るやうにしてタイトルにしてたゞ人形の動きだけを映して置きたいと思ふ、興行價値の問題ではない。

△文樂の進歩は文樂の退歩だとも言へる、今の世の中に最あつかひ憎しいものは文樂の人形淨瑠璃である、民衆さか言ひ、文化さかいひ、又一面ダンスを演じ、ソプラノさか、オーケストラさか私には解らない音樂の最盛んになりつゝある世の中に於て：△所謂私は何を描いたのであらう？初めてさうしたむつかしい話はしない筈の郷土藝術の、傳統的のさいふ問題に内々ふれてゐるのではあるまいか、マアもう一遍考へて置く。

## 私見

### 大西利夫

文樂を保存して置きたいとは誰もがいふ事で、それに異論のあるべき筈もない、保存の聲がやかましいといふのは義太夫淨瑠璃が次第に過去の藝術として凋落して行つてゐる半面を物語るものである。凋落してゆくものをさうすれば保存が出来るかといふやうな事を證據だてするのはいけない事だと思ふ。何さなれば今日義太夫節そのものが既に現代の藝術を根本に於てかけ離れてゐるからである。これを凋落させまいとするには義太夫節を時勢にあふやうに改造するさか變化させるさかしなければならぬ、それは決して保存にはならない。無残な破壊である。私は凋落するものは凋落してゆくがよいと思つてゐる。凋落するもの必ずしも滅亡するわけではない、淨瑠璃よりもつゞ古い能狂言が今日依然として存続し

てゐるやうに、義太夫節も亦永く存続するこゝを疑はぬ、いゝものはいつまでたつともいゝものである。

### 人形淨瑠璃

#### 矢澤孝子

浪華のや文樂ちふ名はあまさかる鄙のおうなも知る云はすや

文樂の人形淨るり名に負ひてあづまびこにもほこり來にしを

さつ國の樂の音に馴れ已がくにの尊きものに耳しふる世や

ものゝふのつよき心もたわやめのあはれふかきもあやに織るいこ

生けらくのわざをぎがするふりよりもうましこまかしこれの人形は

今の世に黙もくにし**のびて**人形を使へるひこはさもしきろかも

# 文樂座小感 一一三

## 三嶋章道

私は今迄、「文樂」について、感激的の賞賛をかけた事は二三度ではなかつたつもりである。今度「文樂座號」が出されるについて、何かかけ云ふ事なので、もう一度それらをよんでみたい。古い雜誌などを今朝からひつくりかへして見たが、探す時はみあたらないもので、思ふように出なかつた。こにかく私は文樂座のファン——大阪にゆく度にこれを見ないでゐない——云ふよりも、文樂座賛美崇拜論者云つたほうがいゝ位である。私はこれを觀てあの藝術的恍惚境に入るありがたさはまつたく、最高藝術のみが與へてくれる所のもので私はそれに對して私の最大級の賛辭を惜しみたくないものである。

こんな短かい限りある紙面にこれを充分論じる事は出来ない、私はほんの

その感想の片端を與へられた紙にかいてみるにすぎない。

いつでも見るはじめのうちは、後ろの黒ん坊の人間が、いやに大きく、人形が小さくこちや／＼動いてゐる感じがある。それがしばらくするうちに、まつたく人形が人間に見える後ろのほんものゝ人間はみえなくなる。少くとも大きなぼつとした影法師のようなものになる。それは全く不思議な藝術的力である。これこそ藝術の國に觀る者が眞に引き入れられてゆく神秘的な力である。

三人の人が一個の人形を動かす、それがさうしてあんな立派な表現になるか、それは全く驚ろくべき技巧的力である。それは全く音楽に於けるトリヲ（三部奏）なぞと違ふ。一人は片手、一人は脚を動かす、その片手が片手さまるで生きた一個人の間の生命のリズムの中にさけて人で表現してゆく力に對しては、全く驚ろくべき訓練云ふより他に考へられない事である。世界

にある他の藝術の中で、これに匹敵すべき、かゝる藝術があるであらうか。

それは丁度、一人がヴァイオリンの弓をひき、一人がおさへて音を出して何かを演奏するより以上にむつかしい事を、あたりまへさしてやりつゝ藝術的表現をしてゆくのである。しかもそれがまあ如何に美しき形をつくり、如何に美しき科を描くか。永年の訓練は云へ我々は只感歎せざるを得ないのみである。

人形は顔の表情がないところからすべては體の表情でゆく。

文樂座の人形の體の表情は、人間の體の表情を眞に美化し、その粹を誇張してゆく、驚ろくべき體の運動の表現である。しかもその瞬間をバツミマダネシユムをたいて寫眞にさつても、それが立派なポーズで、美しき繪であり彫刻である。

その人形の體の美しき表現は恐らく世界のどの役者も出来ない美しいものである。

小さな人形に、魂が吹き込まれて美しく動く、それが人間の體の動きの最も美しい形をして動く、そして日本人の持つ美しい型——云ひかへれば日本人の肉體と衣裳を材料として表現出来る最も美しい形にうごき變ずる、その不思議の力には、まつたく我々は只恍惚として了ふ。

日本の男はさうゆう形をすれば一番美しく立派にみえるか。

日本の女はさうゆう動きが、日本の衣裳を着た日本の女のさして、最も美しく情緒深いか、云ふようなこともその最高のものをみせられることさしばしば次から次へである。

淨瑠璃と人形の動きの渾然とこけ合つた総合藝術 これも文藝獨特のもつ藝術境である。

歌舞伎劇はさにかくこれから出發してゐる。だから歌舞伎劇の眞の味は、この人形淨瑠璃の味が眞にわかる人でなくては眞にわからない。

外國にはこれに匹敵するような人形

芝居は一寸ない。マリオネットなどは又別の味のものだし、そして藝術としても、その洗練もよほど劣る。巴里などの公園などで、子供などにみせるグランギニオルさかいてある人形芝居などもすつとくたわいもない幼稚なもの（その幼稚なところに又別の童話的の味はあるにはあるが）——である。

淨瑠璃の味が外國人にはわからぬから残念であるが、さにかくこの文藝は日本の持つ、世界に誇るべき洗練され完成された大藝術の一つであると思ふ私は永久に文藝の保存を渴望する。

なほつけ加へれば、文藝は單に「人形芝居」としての藝術の最高級であるばかりでなく、その淨瑠璃のもつ文藝的の價値も又、さにかく偉大なものがあることも忘れてはいけまい。

歌舞伎劇のもつ文藝的内容の立派なもの、實はこゝのものであるのだ。

世界に誇れるであらう我が偉大なる近松は、こゝでかいたのである。

さにかく私は文藝座崇拜の一人であ

り、何かしてこの亡びゆく偉大なものが失はれぬように熱望するものである事を一言して今度はこれだけでこめてをく。

## 人形芝居偶感

富田泰彦

如何に有難い善光寺如来だつて、ぢつと信州の山奥に引ッ込んでゐては、その有難さは、わからない。そこで往昔から出開帳云ふやつを行ふ。是れが一種の宣傳行為であり、民衆教化の手段でもあつた。「牛に牽かれて善光寺参り」にて信仰心のない度し難い衆生を救ふ一つの傳説さへ残つて居る。

——が、大阪唯一の郷土藝術で、世界に誇るべきものだ、一部の識者間に説かれながら、肝腎の大阪人自身は「あゝさうだつかなア」に頗る無關心な顔をしてゐる。御靈の一隅にある文藝へは、まさか操りの「糸にひかれて文藝

見物」云ふ俚言も生まれて來まい、今度の道頓堀出開張に依つて、ざれだけの文樂信者を得られるかは、勿論未知數だが、それでも儘に新時代に迎合させた一種の宣傳方法だつた云へる

× × × ×

——だが、いかに新時代に迎合しようとして、藝術的に墮落をさして貰つては困まる、人形淨瑠璃は、人形淨瑠璃としての生命を充分尊重して貰い度い慥塵ここは、自體云はずもがなのことだが、人形芝居には、逆も今の歌舞伎劇に見られぬ情緒を懐しみたいのである。人形芝居そのものが、既にリアリズムであり得ない一つの約束に依つて築き上げられた藝術である。繪畫や彫刻のモダニズムの觀照を許さない一つの感覺の世界を領域として居る處に貴さがあるのである。

× × × ×

演劇は綜合藝術のなんのこ、論議される以上に、更に渾然たる藝術である當の人形淨瑠璃の統一されたその舞臺

に學ぶ處の多いことは云ふまでもない歌舞伎劇や舞踊の姿態の美ミ、人形によつて演出さるゝ様々の型の美しさとの間には、おのづこ違つた象徴化されたものがあるだけに、ずつこ複雑なテクニクや演出者（太夫も三味線も手摺りも合致した）の感情の流れが味ふことが出来る。

× × × ×

人形芝居の世界には、リアリチックなここは墮落である。淨瑠璃の詠歌や小唄は、所詮淨瑠璃としての詠歌や小唄である如くに、人形の表現も、人形としての表現美に、人間には見られない自由な表現があるのである。モツアルトはピアノを弾きつけてゐるので、庖丁で肉を切る時は、いつも指を傷つけた。何かの書物に見たことがあるが人形遣ひの手も人形を放れては、全く價値なきものである。

× × × ×

斯うした人形芝居も、近代的に解釋すれば、非文化的なものだけに、日一

日こ衰滅して行くことが、當然の如くに運命づけられて居るやうな氣がした時、私は不圖斯うした云はずもがなの愚痴が、胸を衝いて來た。

## 文樂振興策の第一歩

加藤 亨

衰微しやうとする文樂を復活として日本固有の國粹藝術の發展をはからうとする計劃は時節柄眞に結構な事と思ふ。

文樂は亡びる、文樂は斷絶すべし等云ふ説が此頃可成り各方面で喧言されてゐる様であるが、之はさもあるべき筈で、現在の如き情實的にのみ拘泥せる無思慮或は何等の擁護制度の設けられてない文樂が、衰へ又は衰微に傾かうとするのは、いはゞ當然の事である。従つて文樂を救ふと思へば從來文樂そのものに纏つてゐた色々な情弊、惡習を此の機會に於て徹底的に一掃し

改造すべきである。

そこでこの改造の第一歩として云ひたいのは先づ第一に文樂に對して權威ある批評團體を創る事である。次には獎勵方法の道を講ずることである。

現在の如く批評團體の殆ど皆無き云つてもいゝ淨瑠璃界が、之をいふ發達を見せない事は敢て不思議とするに足らない。淨瑠璃に限らず少くも藝術の名のつくものに眞摯な批評が加算されないといふ事は一つの矛盾である。

批評を加へられるから反省する。反省をするから苦しむ、苦しむから其處から工夫が生れ、そして新しく尊い何ものかが生れるのではないか。相撲には木戸御免と言つて其道での相當鑑識力のある熱心な人々には自由に入場の特典を與へて、その批評督勵を待つて居る、此等の連中は相撲道の爲めには有力なる後援者であつて、相撲が國技と云ふ名の下に、今日の隆盛を來したのは實に、此の木戸御免の連中が元動力として内には之を批判督勵し外には銘

々後援團體を作りて不斷の助力を惜しまなかつた爲めに他ならぬのであらうと思ふ、相撲と義太夫とは其の性質は全く異なつたものであるが、兩者共に之を公演して興行するに云ふ事は同じである、我が淨瑠璃界にも須らく強固なる後援團體を組織し文樂の批評鞭撻には相當の權威あるものが欲しいと思ふのである、而して其の骨子となるべき團員は決して多きを望まぬので精々二三十人で足れりであるので、有名無名を問はず、實際の鑑識ある人にはぎん／＼頼んで批評をして貰ふ。そして悪い處はぎん／＼直して行くに云ふ風にした。

自分は何々太夫さか何々師匠さかの後援團體を組織して、所謂組見なる事を行ふのは、絶対にやめたいと思ふのである、之れ藝道頹廢の主因にして、藝術の眞味を忘れ徒らに人氣に媚びるの惡風を助長するの外益なき事と信ずるからである、興行主たるもの以て如何とす。

次に獎勵方法の事であるが、現在の文樂では之を云ふ獎勵方法が講ぜられてゐない様に思ふ。年功であるとか、家柄であるとか、又は師匠筋の如何によつて、太夫の階級を加減する事は愚も甚だしいもので、年輩が若からうが家柄がよくなからうが、師匠が三流であらうが、本人其者に實際力があれば躊躇する處なく、さし／＼よい處を語らせる、又成績のよい者に對しては後援會から見臺の一つも送つて褒賞をするといふ風にしたい。見臺一つ位、別に何でもなからうが、而し昨年は唯がまつた、今年は何でも自分が取らぬばならないと思ふと、お互に懸命に腕に擦りをかけて勵む、一見些少な事の様ではあるが實は見逃し難い斯道發達のためには此上ない一つの方策である。最も文樂でも數年來毎年向上會を開いて、獎勵してゐる様であるが、名は向上會でも實は幾百枚かの割當てられた切符の始末に先づ悩まされてゐるに云ふのはほんさうの處らしい。一種の組

見助長策にして一種の興行政策に他ならぬのである。

こんな事も是非止めて貰ひたい、自分の希望としては向上會は實費を控除して收益を擧げて之を文樂の振興費にあてゝ其の出演者の獎勵と後援にあてゝ貰ひたい、要するに文樂の人氣を立て直さうと思へば先づ内容から改造すべきである。改造せん爲には破壊も必要である。躊躇する處なく以上の如き情弊はぎん／＼破壊すべきである。

## 文樂は何故振げぬ

高安吸江

文樂見物は、冗漫な全曲のために、一日をつぶすことの苦痛に耐えず、主な場面の數段のみを聞かんと欲するものが、近來一般の要求であるらしい。これは多忙な現代として、尤もなる言ひ分であるが私も考へる。然し義太夫節を本位として考へるに、私は反對に昔

通り、一曲を通しにして上演して兩のしゝと思ふ。

先づ通しにするに、所謂端物でも上演せられる。是等は一段として獨立し兼ねるのであるが、引き續きあらば見て居られるし、且又そう云ふ類のうちにも、案外別種の味ある曲を見つけ出すこともある。猶ほこれは若干の演奏者に向て、好箇の練習場となるのである。通しでない場合は、相當に腕のある者の少數の外は不用となる。先づ第一に勞多くして功少き人形遣が、その影響をうけて減り出し、終には全然なくなつてしまふかも知れない。たゞさへ曲數が減じ行くべきを、素語になれば一層甚しくなり、一般に耳なれて居る最もうけの好い數段のみしか残らぬ様になるであらふ。

此れが補充として、新作は不可能である。現代人の氣に入るべき、新味を出し得る様な作者は、恐らく他の題目を撰ぶであらふから、依然舊態を脱し得ない作品のみが多く、従つて一般の

歡迎するところにならないのは當然のことである。

近松物亦必ずしも適當は云へないこれは寧ろ唄ひものであつて、語りものでないやうだ、殆んご極端とも云ふべき程劇化した今日の義太夫節は、正徳享保頃の韻文的なるものゝ大分隔りがあるのは、既に絶えんとして居る繁太夫節其他によつても多少想像せられるそこでこれを今日上演するには、相當の準備と試練を要すること勿論であるからその作全部が直ちに演奏されることは云ひ得ない。さゝのつまりは在來の語り物の全曲を眞率に演じ、傍ら近松以下の舊作を、現代に適應するやう復活することに努めるいふことになる。之れを専門家にきくに、義太夫三味線の棹はズツト昔は細く、其後漸次太くなつたのが、更らにポツ／＼細くなりつゝあるに、それかあらぬか現今の京阪（敢て關西云はずとも）人は重厚な義太夫よりも、輕妙な關東淨るりを多く好むやうになり、一般家庭の趣



味さして義太夫の勢力はよほぎ減じた又近頃の文樂では二十餘年前の如くに無條件に其の技に酔はされ陶然となつて居る見物はあまり見受けられない。

今日の人々は批判的態度で局所々々を一々科學的(?)に分解して觀察し、これを味はうごしないのが多いやうである。是等趣味の變遷、聽衆の態度は頗る一考を要すべき點である。

終りに今日の演奏者に關して一言すべきは、彼等の中に一流の人が、少なくなつたのはもごよりであるが、其少い名手にしても、其の技倆があまりに小専門的で、其範圍があまりに狭い。以前の攝津、綱、彌(先代)なぎの人々にしても各専門的ではあるがもごもごつご廣い腕の持主であつた。其上今日尤も遺憾をすべきは艶語りで、早い話がお俊、梅川、さては深雪なぎの女性を充分に現はし得る人が全然缺けて居るこごである。前述の近松復活にしても、女流を的確に描寫し得る技能を有する人が居ない現在では、其効果も亦

疑はしいご云はねばならぬ。

文樂の振はないのは右に述べたやうな種々の原因から來たものであり、そのうち大勢已むを得ない點が多いごすれば、此の儘では自然の滅亡の悲運に陥らねばならぬのである。

そこでこの貴い郷土藝術を保存さすためには損得を度外視して、ワグナーのバイロイトに於ける如く、文樂を之道の中心道場として保護し、名人の出現を待つより外はないご思ふ。

## 文樂座出開帳禮讚

### 中井浩水

◇昔は竹本、豊竹が道頓堀の西ご東に分れて錦を削つたこごもある、大正の今日に至つて竹豊手を携へて道頓堀の真中の中座へ現はれる。

◇陰氣臭い御靈さまの片隅、中日頃に行くご場内の三分の二はガランごし寂寥たる文樂座、その徽の匂ひの處

から花やかな南地へ出開帳はヒジキミ油揚で育つた大店の番頭さんが帝國ホテルの饗宴に招かれた形、古物にも風入れの必要はある。

◇大阪の名物ごあつて松竹の白井さん每興行の多少の缺損を承知で何時までも大切に保存しようごいふ有難い藝術庇護の大發心、今度の出開帳もつまりは虫入らせじの老婆親切からで前述通りの土用干、ナニ土用はもう過ぎた若いものはそれだから困る、本當の虫拂ひは秋風に限るのだ。

◇選ばれた曲目も津太夫の沼津、土佐の十種香、古靱の紙治の茶屋場、悪からう筈なしごいふ折紙つき揃ひ、それで客が來ないなら來ない方が間違つてゐる、處が世の中のこごは間違ひだらけ、ごうかそれ丈けは松竹の本願を天も感應ましまして間違ひはないやうにお願ひ申し上げて置く、いくら藝術庇護でも出るよりは入る方が好い筈。

◇淨るりの修行は何んでも並や大抵のものでもないごうだ、太夫の語場を一

粒選りにするに若手の修行が出来なくなるこいふ、若手の修行をむねにすれば矢張り現状維持になる、あらむしかりの世やである。

◇白痴が庖丁を持つて貰つた大鯛を眺めてゐるやうに文樂座の改善案を三枚におろして片身は刺身、頭はうしほ煮ミガヤム、傍らから立つて見た所で結局、鯛を早く腐らして仕舞ふかも知れず、マア成行きにまかして置くこと

◇土佐太夫は福徳な大屋さんの如し光琳の幅をかけ、秋成の額をかけ、薄茶一服、風流を談ずるに適するが如し古鞆は物識りの若隠居、机上に古書推かし、以つて故實を聴くべし、津太夫は雑貨店の主人、腰ひくゝ人をそらす、文樂座の三頭目、それでゐていづれも利口目から鼻へぬける人ばかり。

◇道八は重厚、新左衛門は絢爛、清六は精悍。文樂の三味線は手ざろひである。三味線が手ざろひなるに共に人形も亦人が多い、文三の古趣、玉藏の蒼勁、榮三の華麗、文五郎の清婉、皆珍にすべし。

◇陣容堂々、かくても寂寞、時利あらむるが爲めか、時共に移り得ぬは淨曲自然の命運か、今度の出開帳はそれをトするの一端、松竹宣傳部策士多し、せいゝゝ鉦太鼓で宣傳につこめ、もしそれでも覺束ない節は文樂座の若手を糾合して文樂座チームを作つて何處かの野球場ミ花々しい仕合ひでもやつて人氣を煽つて見るも一興であらう



……樂谷葉舟氏筆……

## 文樂座描

岸本水府

文樂の樂屋ほのく、明けかゝり出づかひの三人るりを瞬かせ落ちて行く人形遠く哀れなりさし上げて帯をふるはす文五郎玉三は素知らぬ顔で人を斬り人形の内儀小さくなつて泣き自害して左つかひは袖をのせ人形の顔大小に幕があき出遣ひに黒衣くろいが纏れ敵討てつぎやゝゝゝ黒衣二重を割つて下り繪で見れば黒衣の中に顔がありメリヤスを聞いてゐる眉じつこする切腹の人形やはり下着を着ツメ一二頭かきゝ遅れて來引こみのツメ二三人つき合ひ寒さうな姿でツメの勢ざろひ人形に太棹の融合ふ花やかさ文樂を出てうつさりに雨に濡れ文樂の素描だけで宿を立ち鳥屋ぶれに早や文樂の背ミなり

本朝二十四孝  
柴谷紫舟氏畫



勝頼玉藏

八重垣  
文五郎

柴谷紫舟



一あなたには文樂座から何をもらたされたか？  
 二如何にして今後の文樂座を保存すべきでせうか？

□ (到着順)

岡 鬼太郎

一 逐年よい藝人のなくなつて行く心細さが身に染みます。

力して欲しいと思ひます、一 例を示せば。雙生隅田川の如きもの……

□

生 田 葵

二 先づ文樂座が現在の場所から道頓堀あたりへ出るに云ふ事が必要です、文樂は今第一に地の利を得て居ぬ爲に衰へ行きつゝあります、保存問題なきは其の後の事です、云ふ事は文樂の存在を明らかにする意味に於て大變いゝと思ひます、文樂の今後の發展保存に關して、我々の希望として、近松なきのものにさしゝき節つけをする事も努

一 近松門左衛門初め諸家の文藝作品が尤も民衆的に擴まつて往くのを見て羨ましく思ひました、文章がかうして唱はれ、語られるに云ふことに就ても考えさせられましたしかし一面に内容が了然古典的になつて了つて靜止情態になつて居るのを寂しく感じました。

□

小宮 豊隆

一 文樂の人形芝居は世界無比の藝術だといふ事を感ぜました、あれを今の様に世間の人に餘り注意させず置くのは勿體ないといふ氣がします。

□

豊岡 佐一郎

一 現代生活に全々遊離状態にありながら尙ほ且つ現代人の藝術感覺に訴へる古典藝術の嚴肅な典型美——。

の忙はしい時代に副はないと思ひます、文樂の客を青年の間により廣く求め、そこから新しは刺戟を幕内に注入するなごは大變よいご考へます、云ふまでもなく今日の演劇界は過渡時代ですからその洗禮をうけて、さまざまの經驗の後、始めて「如何にして保存すべきか」を考へるべきでせう。

□ 小生 夢 坊

一 私には『人形使ひ』に愛慕の心を持つ。人形のために生きる下積の藝術家に同情する、怪しくも微細に動く彼れの手——私は彼れの手にもつご金を支拂ふ可きだと思ふ。

二 メトロポリタンが損失を算盤にかけないで興行してゐる様に、若しも松竹が『文樂』を國寶的なものご信じて

ゐるならば大いに金をつぎ込んで保護の心から興行すべきである、特別のしたしみある大阪のブルジョアにも此の心がけがあつていゝ。

□ 島道 素石

一 人形を人間以上に扱ひ是に吹き込む人情の纏綿を語り活かす聲曲の微妙ごは故人の偉大な藝術の傳統ごして常に愉悅に堪えませぬ儘に郷土永遠の誇でありましやう然し近年上手の低落は罪でしやう

二 文樂の不振に引替へ民衆淨界の旺盛なのは事實です黨派のこご云ふやうなものがあらば此險一團して大淨瑠璃の旗幟をおつ立てそして此度のやうに道頓堀の表面へも出て、又巡業なご適當の方法だご思ます、經營の事はカラ素人で分りませぬが語り人、人

形遣等の養成も最肝要事ご存じます、殊に人形遣の人々にはあまり新顔が見えぬやうで残念に思ひます、待遇其他の向上も必要ご存じます。

□ 小寺 融 吉

一 我々演劇研究の徒でなくしても文樂座の人形を見て三嘆しない者はありますまい是は能樂ご共に大事に保存しなければなりません。

二 文樂座の人形の寫眞や何かの撮影をぎんご許すごご、元は文樂を見物して人形の仕草なごをノートに取るごご叱られたさうですが、保存ごいふごを廣い意味に解せば文樂に關する文献が豊富だごいふごごはたごへ一時人形使ひが全滅しても心配のないごごですからすぐ復活できるわけですから。

□ 正宗 白鳥

一 ある程度まで興味を感じましたしかし何を得たか分りません。

二 良案なし

□ 額田 六 福

一 思想上の事は數多の答の様に、何々ご正確にお答へは出来ません、しかし、心の母ごして昔も今も變らぬ非常な愛着を持つてゐます、それはあらゆる困難に勝つて經營されてゐる松竹の人々にいつも限りない感激をさゝげてゐるものです。

二 色々あるでしよが若し出来れば義太夫愛好の紳士達の喜捨の出資で財團法人の後援會を作つて、その金を經營の基礎ごして興行による収益の損得は度外におく様にした

らしいと思ひます。

□

山崎紫紅

一 人形から芝居の出たことを今更ら知るに同時に、人形が役者に近づいたこと、それからその近づき方がイヤな感じを與えたこと、それか云つて新作(?)の良辨杉には人形つかひに敬服させられた。但しそれは良辨杉をいふ意味ではありません。

二 お能に△△でせう、お得意の割合にひろい……。

□

岡榮一郎

一、二 雜誌「歌舞伎」第三號拙文「文樂座の人形」をお読み下さい。

□

太田三郎

一 御覽でそれを見るにきには、何んとも云へずなごや

かなアトモスフェールの中にほの／＼と自分を溶けこませられます、東京の一二の劇場でそれを見るにきには「さうかしてかうしたものゝ壽命を今少し永くあらせたいものだ」云つた様な意識を心の底に生ぜさせられて、多少愛惜の情を交へて見せられます

二 發展が改良か云つたやうなことを、全く念頭に置かずにたゞ従來のものをそのまゝにそつと保存するに云ふ遣り方、きはめて小心な、そしてきはわて消極的な遣り方をこつて欲しいと思ひます

若月保治

一 義太夫といふものは芝居でよりもやはり人形でやつて始めて面白い、くだらない俳優芝居よりいゝな、だが、だら／＼とやられると思くつ

するなき、つく／＼と思ひました、その昔一度見て……。

二 つまりは、あまり營利本位にやりさえなさらねば自然に残つてゆきませうね。

伊坂梅雪

一 別に申上げる程の事も御座いませんでした。

二 今後手摺りより操りの方が宜くはありませんか、一人の人形に二人三人掛りで演るやうな事は世代遅れではありませんか——人形は能と同じ形式で保存されるであらうと思考致します。

邦枝完二

一 美しい夢を得ました。

二 一つの大きな會員組織にしたら如何か思ひます、會員は年極で會費をおさめるのです。

花岡百樹

一 技神に入るの操人形は人間以上に情を現はし得らるゝといふ事でした、それは紋十郎在世の頃其遣つたお染が店から暖簾口へ入り再び暖簾の間から首だけ出して久松を見送つた時の一セツトでした

二 人形の製作を二大別して在來の儘のもの、全然寫生物のものとして淨瑠璃を全く人形といふものから分離して(淨瑠璃は單に語り物として存在せしめ)一日中一場か二場古典的に在來の人形を登場せしめ、淨瑠璃を語り寫生人形を本位とし活動の様には詞を用ひ地を説明するのです。但し此臺詞や説明は活動とは別な行き方をする事は勿論です。

麻生路郎

一 私の亡祖母は文樂座へ  
暗いうちから起きて行つた、  
同じ語り物を三度位は行つた

私は子供のころ（明治三十一年頃）このおばあさんの護衛にいつもついて行つて人形の動きに大變な興味を持つやうになつたが後には自分一人でも越路（攝津大橡）を學校がへりに立つて聞くまでになつたこの日本独自の藝術が私の小さな心を捉へて遂に私を文藝の畑へ走らしたのである。

二 角力が野球におされたやうに文樂座は映畫におされる運命を持つてゐるやうに思はれる、文樂座の保存は文樂びいきの根強い力俵にたねばならぬ、特殊の會員制によるも一方法ならんか、文樂は特殊藝術であるから何處までも昔の型でありたい。

クラシックでありたい、ペンキ塗藝術にすることは不可である。

片山忠次郎

一 まだ短かい袴を穿いた中學生の頃に、友達を誘つて文樂を聞いたのが始めで、それから二十年近く暇のある毎に文樂だけは缺かした事がありません、郷土藝術を謂ふにはあまりに尊ぶすぎる藝術です、全く國寶と云つても過褒ではありません。

二 やはり外に宣傳し、内に精進の二つだと思ひます、即ち一は各地に巡業して現實に文樂の眞隨を理解せしめることで、二は太夫なり操り人形師なりがほんまに自己の尊い使命を會得していよく斯の道に精進することです。

深田康算

一 文樂劇は能樂と共に我民族が過去に於て創造した藝術の立派な標本として唯一無二のもの、然らく國寶にも擬すべきものでせう。しかし又新らたに生るべき舞臺藝術の諸問題に對して幾多の教派を與へる美からも尊重すべきものも考へます。

二 保存するためには民衆の興味を理解を喚起する事が必要です、之れがためには民衆に此藝術を享樂する機會を廣く與へる方法を講ずるより他ありません。

坪内士行  
一 一三口には申せません  
あまり多いからです、一寸數へても人形の超人間的形姿から學ぶ舞踊感、日本人の其の音樂觀念（特に聲樂上の日本

趣味）古典戯曲の構成法、表現派式手法、等、等。

二 能樂と同じにするべきでせう、云ふのは一般相手の興行と云ふ事は段々不可能になりますから（時々公開は別問題）第一に肝要なのは技術者連中の生活の安定をえさせる優遇法を考慮しなければなりません、でなければこれに専心従事する特志者はなくなりませう、これが第一の、そして最後の保存法と思ひます。

畑耕一  
一 演劇に於けるスタイル  
さいふものゝ眞の意義を。  
二 むしろ能樂のやうなブルジョア意識の強い後援を得ること、會員制度にして毎月會員と共に研究的態度ですゝむこと。

□ 瀬戸 英 一

一 床は兎に角、手摺りに對して幻滅を感じました、例せば下座の合方を使つたり、人形遣ひ自身が間投詞を口にしたり(文三に殊に其の甚しきを見る)自ら墓穴を掘つてゐるやうに思はれます。

二 白井さんが損を構はなければ永久に存続させよう、文樂のない東京で歌舞伎へ出るのは仕方ありませんが文樂のある大阪で中座開演などは大間違ひの素てつべんです

□ 濱村 米 藏

一 美しい追憶が得られませんが、樂しませ、慰め勵してくれます。  
二 第二の方は、大問題で一寸お答へが出来ません。

一 古い遠い過去の藝術を味ふの快を得たり。  
二 金持等が金を出し集めて保存事業を起すべし、昔時は最も民衆的だつたこの藝術も今日では生活に餘程餘裕ある者でなければ本當の味を體得し能はず、現に吾々仲間金は出して迄見聞く氣になれず、特殊の藝術として特權階級の所有物故彼等が保護すべきなり。

□ 仲木 貞 一

一 民族の、古典藝術を心ゆくまで味はされた、最も忘れ難いものです、或る種のものな

□ 津村 京 村

一 私は大阪に行く度、文樂が来るたびにきつこみずには居られない位です、これは日本の持つ立派な世界的の洗練された藝術と思ひました、實に誇ろくべきものだと思ひます。

二 無論、最善の方法を盡して保存すべきでせう、なまじつか新らしい色彩なんぞを加へて保存する事は、名物文樂の爲に採りません、あくまで舊體を完全に保存する様努むべきでせう

一 私は大阪に行く度、文樂が来るたびにきつこみずには居られない位です、これは日本の持つ立派な世界的の洗練された藝術と思ひました、實に誇ろくべきものだと思ひます。

□ 三島 章 道

一 能樂と同じ意味のそして異つた味の棄て難い印象を得ました。  
二 今日能樂を保存して居るに同様に或る特殊な階級乃至は國家が世話をやいて保存する必要あるに存じます。一般民衆の手で保存することは今後とても不可能と思ひますから……

□ 水谷 竹 紫

一 なつかしい興味。  
二 同人の精勵、養成、拔擢

□ 坪井 正 直

一 何かを得る程見て居ら

□ 藤田 草 之 助

一 何かを得る程見て居ら



す。

二 損得を度外視して。

川村花菱

一 文樂はありがたいと思ふだけです……。

二 分りません……。

西田當百

一 淨瑠璃の藝術的價値は喋々せぬ、全國的に將た外國にまで憧憬を持たれる我が文樂が、お膝元の大阪、殊に淨瑠璃の最も盛んな大阪に、次第に閑却される傾向のあるのを切に遺憾に思ふ、これ藝術家自身の罪か將又經營者の罪か。

二 船場の眞中御與に、何日までも蟄居——敢て蟄居さぬふ——するでもあるまい、宜しく道頓堀界限に活躍してバタ臭い有業無業を摺伏して

貰ひたい。

矢野きん坊

一 文樂座でなくては受入れられぬ氣分。

二 文樂座は文樂座として保存して頂きたい、他の利那喝采の演劇と同じで經營視さるゝ事を恐れる文樂座の作る氣分は矢張り興行を超越する事に應しい藝術であると思ひます、物質文化に雷同する事は絶対に不賛成であります。

山上貞一

一 人形の實に微妙なる動きから、入神の技と言ふ文字の最も相應しい用處を知つた

二 文樂があのおうす暗い御靈神社の境内を出て明るい道頓堀へ出た。その明るさが保存上の確かに除蟲濟であります。もし經濟的に經營が困難

なので保存を云々されるのなら愚案するに一年十二月をまづ春秋二ヶ月を中座に、その翌月二ヶ月を東京に、そして一ヶ月は例年の如く盆休みを置いて残る七ヶ月を四ヶ月は依然通り御靈の文樂座に、三ヶ月を素淨瑠璃の旅興行としてはさうかと思ひます。即ち此の希望は文樂が廣く公衆に接觸する機會を多くつくりたいこと、共にあの文樂座さ

一 一年に一度位ひはものを見ながら昔を偲びたい、そして現代離れた空圍氣にしたいと思ひました、そして目下の歌舞伎劇も三十年、五十年過ぎたらこんな運命になるのだなこ一層思はさせられました。

いふ古典的な小屋で、古典藝術としての人形淨瑠璃もそのまゝ保存したいといふ一舉兩得の希望なのです。それから文樂關係の太夫にしても、三味線の人にしても、人形つかひの人にしても、餘技を捨て、もつこ文樂を愛して欲しいと思ひます。

大關 柗 郎

二 私の希望としては劇場も客席も衣褒、ライトに至るまで總て昔のまゝで保存して頂きたい、それには營利業者の經營では保存が六ヶ敷しいだらうから國家、或は富豪有志等の醜金、或は補助に依つて保存して貰ひたい、だが一松竹の手に依つて保存方を繼續するさしたらば、あまたのまつておられる方法より仕方がありますまいと思ひます、そして出来るだけ宣傳をして文樂家をつくるより方ありますまい、それにはもう一つ現

代劇(新しいもの)でも時々試みられたらどうですかと思ひます。

□

藤井眞澄

一 今後の日本に於ける大衆史劇は新しい時代物劇でなくてはならないと信じてゐるものですから、其者の時代物劇の基礎を成した人形芝居からはさういふ意味で色々深い教訓を受けました。

二 之は日本の誇りミすべき「國寶」ですから、本當からすれば國家が保護すべきです。然し、繪畫や彫刻や建築物の如き靜物質でなくて、之は活動的な生き物です、其上今日の國家が保護するこいふ事には、様々な弊害が伴ひますから、自活の國民自らが、會でも作つて保存すべきでせう

□

伊原青々園

一 簡單にお答へする事出來ず。

二 後援團體により損益を超越して藝術的の演出を専らにすべし、日本政府もしくは大阪市も此れが爲めに應分の保護を與ふべきなり。

森川舟三

一 いつ聞いてもいつ見てもなつかしい日本人の、昔ながらの傳統精神が淨瑠璃さ人形ぶりのなかにあります。これはこの世が鐵筋コンクリートミラヂオミピアノミ文化住宅の世界に化しても容易に死滅いたしません、この點を有難く感じます。

二 それは至難な事業かも知れませんが、淨瑠璃文學に命脈をさにもするものですから

直接の方法としては先

若若い人達の間に淨瑠璃文學を普及すること、田舎の隅々まで文學座の顔を見せて廻ること、文學の太夫によつて生きた俳優の竹本劇(新しく考案する必要もあります)を挾んでゐること一法でせう

□

後醒院正六

一 何を?、何をつて私にそれを言ひ表はせる程の智慧も何もないのです。あの別府の砂風呂につかつたとき私は斯ううなつたこことがある「湯の砂をひつぎのごまぐ堀りこがち、いねてしあればねはんに入る」あのねはんに入るの妙諦を文學座から得たのだと思つた。

□

石割松太郎

一 浪華情趣の懐古的なつかしみは、文學以外にはあ

りますまい。そして役者よりもこの人形によつた形を見せつて貰つてゐます。——殊に女の姿△おいて。

八木柳縁

一 我國固有の古典的藝術味

二 ホントの文學座最良をウンミ拵らへる事、それには晝夜二部制とし、觀劇料の低廉さ、千變一律的な狂言を繰返さず古曲の發表なき、も一つは太夫三味線に尙ほ一層の研究を奮闘を望む事。

□

水谷幻花

一 俳優では味へない興趣を多く得られました、殊に文五郎の至藝には感服の他ありません。

二 文學の人形は亡してはならぬもの、また感じもしま

せんが後継者の養成が尤も必要だらうと思ひます。

□

### 三宅周太郎

一 文樂をさうにかしなく  
てはならぬ云ふ考、そして

文樂のためなら及ばずながら  
さうにかしてみたい云ふ考  
二 勿論保存をして中座で  
興行は何よりです。さうし  
て周圍から刺激と親切さを與  
へてやる事です。うつちやつ  
たまゝ、そうしておくばかり  
では、文樂ばかりでなく人間  
でもくさつてしまひます。

□

### 田中煙亭

一 御質問ですが、別に纏  
まつて何も得たものゝてはあ  
りません。唯だ非常に惹つけ  
られて、三の替まで（歌舞伎  
座）毎回樂しみに見物に出か  
けたのです。それは、私が

何よりも義太夫といふ音曲が  
好きである爲め、東京では  
見たり聞いたりするこゝの出  
來ないものゝ爲でせう、こに  
かく、今回の引越興行が待た  
れます。

二 これは難しい問題です  
誰れも具體的に言ひ切れる人  
は恐らく無いかと思はれる  
が、私には難しい題です。時  
世時節です、當分は大丈夫で  
せうが、時勢です。哀れな姿  
では「保存」は無視されて行  
かれるでせうが、盛大にさい  
ふ譯には……私は松竹の方の  
利害を超えたお心掛けに俟つ  
外ないと思ひます。それには  
今度の普及興行なご最も結構  
なお企でありませう。

□

### 富田泰彦

一 今の歌舞伎劇には逆も  
見られぬ——改刪されざる戲

曲のプロットの妙味、その  
忠實なる表現——。

二 世界的に誇るべき唯一  
の郷土藝術として、大阪市が  
保護を加へる事。

□

### 高澤初風

一 人間の演ずる歌舞伎で  
は味ひ得ひ得ない特殊の情調  
ミ、生きた俳優では出し得な  
い繪畫的の形の美を其人形の  
文五郎、榮藏、玉藏あたりに  
於て得られた事ミ、現在の俳優  
優を物色しても求められない  
狂言の人物、例へば津太夫の  
平作、古軼の合邦、土佐のお  
そのなごを得られた事なごで  
すが、それよりも私達が先づ  
必々感じますのは人形芝居  
として世界に類例のない繊細  
巧致は各異の人物を此二つの  
表現者——即ち人形使ひミ太  
夫ミの魂の合同に據つて築き

上げられて行く藝術の尊さで  
あります。

二 一つの國立劇場さへ持  
たない現在の日本に於ては、  
是を國家の保護に俟つ事は到  
底難しいミすれば、其出生地  
たる誇りを有する大阪市が市  
として是を保護して行くべく  
市民が力を盡してもいいでせ  
う、それが聽がて後世大阪市民  
の郷土藝術保護者としての  
更に誇りミなりはしなないでせ  
うか。さうなれば無論其經營  
興行、觀覽法等に種々な議論  
も出ませうが、要するにそれ  
は枝葉に涉る小問題であつて  
此特種の藝術を保存する上か  
らは何でもない事だらうと思  
ひます。

□

### 内海幽水

一 現在我々の周圍からは  
既に奪ひ去られ、失はれ盡し

たもので、想像するだけでもなつかしき、貴さ、美しさの限りなきもの、別の言葉であらせば、我々のたえず求めてゐる詩の情趣を、私は文藝座の藝術に見出す、それを古いから古いとて、生命を既に失ひかけてゐるから古いとて排斥する人は、詩を解しない人である。

二 現在の儘で残すがよいとしてあれを理解し得る人々の爲に、常にあの藝術に親炙しうる機会を與へる事が必要である。保存すべき大切な藝術である事を切實に世間へ教へる事が第一の務急である。

□

田中芳哉園

一 わたくしとしては郷土藝術を語るに就而心強い力、一般としては同じくそれをいつまでも持續する力、あなた

は何を得られましたかこのお問ひに對しては内容は兎に角斯うした誇であるご答へたいと思ひます。

二 これは理屈でゆかず理想でもゆかぬ問題です、要するに松竹自身のやうな營業者が、商賣氣を離れ、藝術家自身は是を藝術そのものゝ風味提供的な氣になり鑑賞家自身がそれでは氣の毒だといふ氣を一致させたならば譯はありませぬ。

□

角田羽仙

一 たゞ辨當だけはうまいですね。

二 興行時間の短縮が第一でせう、ラヂオあり、飛行機のある世の中に午前十時から午後八時迄といふ様な興行時間は時代に遅れてゐます、忙しい人は一日を犠牲にせねば

見物に行けないといふ制度が文藝今日の悲境を招いものご思ひます。

□

新谷誠水

一 人間として俳優の不細工な事を知ります。  
二 中座なんかへ出さずにやつぱり薄暗い御靈はんの中がいゝと思ひます、その方が長續がする様です。

□

岩田鯉喜千

一 傳統的國粹藝術に對し今更事新しく何を得るも得ないもない譯だと思ひます。

一 淨瑠璃趣味の普及、それには御靈文樂座に立籠つてばかり居ず時に普通劇場で、所謂普及興行を試みる事も結構です、形式の文樂座よりも文樂座の精神を尊重せねばなりません、世界に於ける唯一

つの藝術人形淨瑠璃は他に無類の國寶です、この意味から人形遣の養成に國庫補助をさしても然る可きかご信じます

□

秋元柳風

一 減び行かんとする古藝術の高尚な風趣こそその貴い價値。

二 屢々上京させて儲けさせ尚ほ且つ金を與へて名人上手を作り出す獎勵に努むること。

□

京極利行

一 人形の動きからして、歌舞伎劇の義太夫物觀賞の時に於ける多くの手引を教へられて居ります。

二 種々の案を小生一人だけで立てた事もあります。その一つに若手有望の太夫に現在以上に重い語り物をさかして

みるこゝ現在のやうに徒に年齢、顔こゝ、仲間同志の感情問題に原因する内輪揉めを断然改めること。

□

山本柳葉

一 技巧の生む情味、夫れが尊いと思ふ。

二 消極的に保存するこゝへば會員組織の團體でも作るであらうが今の所其所まで突つめて居ると思はれぬ、然し一文樂座にのみ立籠つて居るべき必要もない、今では一大阪の文樂ではない、日本の文樂として廣く行くが好いと思ふ、夫れは劇場に依ては構造上多少の遺憾は生じやうが文樂の味は味へる、今度の普及興行なごも大に賛成である

□

伊藤 熹 朔

一 人形の爲に鋭い趣味

其の上敬顯の念が必要と思つた。

二 國家の保助を望む。

□

中田 捨 松

一 最初に文樂を觀たのは餘程昔です、指の動きかたも足の働きに、何處までも人形らしい美しさをもつた——それでゐて、少しも木偶の芝居だこ一言に云つて了へぬ力強いあるものを得た驚きでした今日漸く「文樂」に於てのみ維持されてゐるこ見て良い。操り人形芝居は劇藝術の美くしさを極度に發揮してゐるものだこは評言の致すこころです、煩はしい世の中からかけ離れて、うつかりこ藝術の國に遊ぶ思ひあらした「文樂」

の人形芝居は床しい傳統をもつ、そして充分に誇り得る日本固有の藝術の第一位に位す

るものこしての愉悅を感じた事です。

二 如何に保存すべきかの問題になるこ、何處までも現代の人間が勝手な理窟や解釋をせずに、人形は人形らしく昔のまゝに動かせばよろしい太夫は末節に拘泥して器用な語り方や、力の無い美音を誇るようではいけません、人形も淨瑠璃も現代のものではありませぬ、その昔のまゝに保存してこそ、そこに日本の藝術としての誇りがあります。

經營者が演劇戦線を他所に見て床しい數百年の傳統を將來までも文樂座に保存して行つて欲しいここです。

□

小林 君 次 郎

一 範圍廣く又、今更文樂の「味覺」を説くのも變な氣がしてお答へに躊躇いたしま

す。

二 文樂が道頓堀に出るこゝは賛成です、ラヂオの放送を断るたごは時代を知らぬ傲慢か怯懦で、こんな態度は面白くありません、文樂の保存を考へる前に先づ執るべきは文樂の味を廣く示すべきであります、あの御靈神社の中の便利の悪い場所に引込んでいづも同じ事ばかり繰返へさすに。

□

小林 延 子

一 舊劇の型を得られる事純舊劇の女型のからだのこなし取分けさはりの時のきまりくゝのかたち及びこなし。

二 傳統的藝術ゆえ一人も多く文樂の眞の理解者を作り今迄通り保存するより外ないと思ひます。

□

本山 萩舟

一 彫琢された藝術、たゞへば堆朱堆黑等に精巧な彫刻を施した寶器といふ感じですが

二 いつまで保存すべく保護の方法としては皆さんから

名案が出ることを存じますが

差當りこの趣味を普及させる

一案として一寸突飛の様かも知れませんが歌舞伎芝居の中

幕までもして所謂竹本劇の代

りにこれを挾んで見たらどう

でせう。

□

吉川 榮藏

二 古典的の藝術には傳統的の文樂座が必要でせう、道

頓堀川越しはあまり感心しま

でぬ、廣くより深味のある愛

好者を求むる事が必要です、

勿論興行の點もありますが、

夫れには太夫の藝術の向上に

人格の向上、つまり太夫以下

を權威あるものたらしむる事

が肝要です、大阪人の文樂に

對する冷淡さを匡正する爲め

に松竹としては努力して欲し

いものです。

□

仁澤 春霞

一 立派な歌舞伎役者の演

じる歌舞伎芝居よりも、情味

の豊かな△△に優つてゐる事

を今更の如くに人形から深く

感得した。斯の傳統的藝術の

難有さを、手摺に於て今年は

一層深く感得しました、それ

と同時に淨瑠璃の手摺に比し

て劣つてゐるのを深く遺憾に

思ひました、無遠慮な言草で

はありますがこれは實際であ

ります。

二 淨瑠璃も尊い藝術には

違ひありませんが人形に離れ

て獨立し得る點を、世人の翫

賞力の大なる點に於て今の

名津太夫、土佐太夫の後繼者

は出来ない事はありますまい

が文五郎其他の如き今の手摺

の格手の後繼者は容易には出

來ますまい、獨立し得ざる斯

の手摺の後繼者の養成に努め

るのが急務だと思ひます。

□

家門 接籛

一 腐らぬ土地名物の藝術

から、現代社會に影を没し行

仁義忠孝の人間精神の尊さを

繰り返し／＼感受した

二 文樂閥を打ち破つて、

雛太夫や錦太夫等を迎ひ入れ

相當の待遇をしてやり、門戸

開放主義に出づる改善も必要

であらう。

□

平山 盧江

一 追々に搔亂されて行く

歌舞伎劇の爲めによき指針で

ある事を今更ながらしみ／＼

感じさせられました。

二 後進の爲めに道をひら

いてやる事が文樂座保存の第

一步ではありますまいか、云

ひかへれば第二流第三流の文

樂をつくつてやる方法を講じ

る事です。

□

正宗得三郎

一 私は種類の興味を妙な

凄みを寧ろ感じました。一つ

二つ短時間の間は面白く思ひ

ましたが、餘り長いので少し

飽きました。

二 私は分りませんが、公

衆にさうかみ考へます、然し

一部の人は好いてゐますで、

毎日でなく月一週間位催す様

にしたらどうでしょう。

□

遠山 靜 雄

一 藝術的興奮と陶醉。

二 是非保存されんことを希望しますけれどもその方法は私にはわかりません。

□

木村 莊 八

一 美術の知識、深く感謝してゐます。

二 極力その係りの諸賢に御考慮御願します。

□

大國 貞 藏

一 太夫の効果は決して見逃がしはしません、文樂の生命は人形にむしろあるのでないでしやうか。人形使ひの洗練された取扱方に依て人形が、形式的の動作の中に魂のデリケートに働いてゐるのを見る時、あの雰圍氣には超現實の獨特の美の世界、詩の國があつて、私もいつしかは

いつてしまつてゐます。

二 簡單には一寸答へられませんが、思ひついた事だけを二ツ二ツ。要するに郷土的であり、傳統のものである以上、あく迄、そのじゆんすいさを少しでも失はない様にありたいものです（時代物でも世話物でも）それは困難な事と思ひますが、慌しい現代の世相を超越して此の意氣を貫かれないものです。（一）當り藝のみを練さず若手の太夫には、素質、特殊に應じて研究的に廣くやつてもらふ事。（二）人形使ひは傳へられた型の美を正確に表現する様訓練ありたき事。（三）新作のものはイタにかけない事。舞臺裝置も新工夫でない事。

□

小村 大 雲

一 筆紙に盡し難き時代趣

味を感得した。

二 保存に付いては廣く一般に宣傳して其藝術的の興味を人々の心の中に植付る事です、此れが第一義です。

□

西澤 留 畝

一 此の面白い藝術がいつまで存続するか云ふ事に一種の悲しみを感しました。

二 保存法は私の胸に浮びません而し何んさかして完全に永續を祈る次第です。

□

小出 楯 重

一 藝事として、一番大切な條件を人形淨瑠璃に見出し、その大切なものが、少しづつ、稀薄になりつゝある事を感じて心細く思つてゐます。

二 すべて藝術家は生きものであるから如何に惜しんでも

死ぬ運命を持つてゐます、又

此の世の中の優れた人材が、此の職業に志してくれればいゝと思ひます、低能兒からは決して名人や天才は生れないのです、次へ次へ生れる名人や天才が文樂座を永久に保存するでせう、又社會は此の淨瑠璃云ふ藝術と藝術家を尊重し保護せねばならぬでせう。

□

小杉 未 醒

一 文樂に於て得べきものは大てい感じ得たやうに思はれます。

二 國寶の古美術の保存すべきが如く文樂の人形芝居も努めて保存すべきです、古美術品の實質を變化し得ざるが如く文樂の人形芝居も變化し得べきではありません「如何にして」云ふ御疑問は實質

に觸れぬ範圍と思ふ。實質を變化するほぎならば滅亡してもよろしい。

田中良

一 演出者の力量次第で如何に無心の人々に藝術的魂を吹込み得られるもので有るか云ふ事を強く感じ俳優並に總て舞臺上の要素を司る人々は演出に對して自己の心の態度を深く研究しなければならぬ云ふ事を思ひます。

二 結局は特別保護物として會員組織にでもして、少くも眞面目に保存するより仕方がありますまい。

橋本關雪

一 過去の大阪情緒に對するある懂がれを以て見ることは出来るが、將來に繋る「力」は無い。云はゞ一種の骨董品

で、吾等が文樂座を見ることは骨董品をいぢくるよろこびである、たま／＼西洋人が來て賞めた云ふようなことはそのまゝ信用することが出来ぬ、かれ等は只好奇な目で見て居る丈けである、それは吾等が立場を換へても考へ合はされることである。

河合卯之助

一 古典に對する夢幻的憧憬さでも云ひ得るかもしれないが、單にそうした表面的なものでない根強い人間生活に即した（それは現代人の胸にも直接に浪うちわなうち）苦惱の各面を、人力の能はない微妙さに表現する人形藝術の立派さであり、其背景即ち文樂座

が持つふさはしいなつかしい歴史である。それはとても小紙面に書き盡せない美しい情

調の旋律である。

二 一興行家の手によつて「如何にして今後の文樂座を保存すべき？」を憂へしむることは大阪の恥辱ではなからうか。大きくいへば日本の恥辱である、世界の何れもの都會が持たない唯一の寶である文樂座を見、人形藝術を考

え、竹本節を味つて見ねばなるまい。國に特建、國寶等の保存機關のある如く大阪は文樂座をみる必要がある、單なる一松竹會社の文樂座ではない。一部階級によつて所謂

「お上品の玩具」である、謠曲や能樂が今日の隆盛を招來した如く、人形藝術や、竹本節を玩弄せよといふのではないが、せめて大阪人が公會堂を誇稱する如く、文樂座を視會社組織にもせよ、合資組織にもせよ、單に一興行家に委

して放任せず、もつゝ大阪唯一の寶である文樂座を如何に存續すべきかを正直に考へてみねばなるまい。文樂座は大阪の文樂座である筈である。興行政策から古典保存を考へてみるべきものではない。

小川千甕

一 明治四十年の前後の頃はしば／＼文樂座を拜見拜聽しました、近來は其疎縁になつてをります。貴文の混沌たる演劇戦線の後方に……かく云ふ様な文字を見るに、驚ろく程の今様に迂遠な私でございます。前望返答お免し願上ます。

二 文樂座は私同様現世に迂遠——即ち超越——なのが本領だ、迂愚の私を俟たずとも、一班に通ずる説き存じます。大阪で年四回、東京



で年一回位、それも五日間位の短期興行で結構です。そして寶もの、様な貴重な文樂座を大切にせなくてはなりません。かゝりの人々には、うんご澤山の金をさし上げて、其生活を裕かにして上げなくてはなりません。

□

小早川秋聲

一 何を得たか——一言にお答へばさてにも候、強ひて云へば浪花情緒の匂ひの漂ふ——言ひ知れぬ嬉しさも可申か。其れはやがて吾々のものを教へられもいたし候。

二 今後の保存に付ては可及昔わずれぬ事に候、生ぢつか今時の人間の微々たるテクニツクは禁物に候、懸命も眞を研究努力するなら何時もフレツシュに光り、時代はいつもレベルを越してゐる事は全

士の藝術上からいなみ難きもの之あり候、温昔知新、米の飯ご澤庵はうまきものに候、然らば保存は自づからに候——愚見罷在候。

□

久保田金僊

一 去る八月久々歌舞伎座へ上場され面白く拜見しました、小生は單に舞臺上の技巧の技巧又は義太夫三味線の好印象のみならず人々についての古き史實又は傳説等を洩聞して一層歴史的保存すべきものであると深く感じたのであります。

二 人形淨瑠璃として文樂座に立て籠りて興行致し居らるれば即ち浪華の一名物として此後敢て衰微することなからんもやはり一年の中春秋二度位ひは地方巡業を試みられさしあたり東京へも年二回位

ひは是非上京を乞ひ願ふ。

□

黒田重太郎

一 傳統に依つて生かされた個性の美であります、私はこの意味を近代日本の藝術界を通じての天才と云つてもいい、故攝津、越路の藝術に味

はひました、また津太夫や、古靱、源太夫等のそれにも味

ひました、そしてつくづくメチエーの尊重と云ふ事に就て大きな教へを得つてあります

二 右に述べた意味で文樂はそんな事があつても保存していただきたい、素人だから興行等の事に就ては一切分りませんが、私の希望を云へば巢林子、出雲等の作品を復活し(廢れた節附等も共に)忠實に演出していただく同時毎興行少くも一つは新作を出して貰へませんでせうか、

殊にこの後の註文はむづかしいでせうが、一幕切のもので構はない、試み出して出している中には現代と交渉のあつる點も見出されるだらうと思ひます(傳統の美と新しい時代に生かせるため)……。

□

織田一麿

一 私が文樂座の人々から得た感銘の最も大なるものは人間の芝居よりも人形の方がはるかにデリケートで有情の世界を現してゐるさゆふ感じです。これには説明を要しますがそれは他日のこゝにします、要するに人形は人間よりも傑れてゐます。

二 文樂座の保存とゆふことは私にはわかりませんが、現在のまゝで餘り新しい設備を加へずに保存出来ればそれで何よりと思つてゐます、經

營の方面は其の道の専門家に一任するより他にないでせう

細木原青起

一 私の小供の時分田舎を擔いで廻る人形芝居といふものがありません。使ひ人の術に依つて愕然として首が動き眉がチカ／＼、口がバク／＼其のギゴチない活動の諧謔に非常に懐みを持つて居ました數年前新富座に文樂座を見て幼時の懐しみを盛り返へしました併し夫れは只人形に對する懐しみで、見る心持ちは全然別でありました。諧謔とか滑稽とかを超越して居るのに驚きました。立派な日本特有の藝術であります。

語り人さ使ひ人さは言はずもがな、場内總ての心境を一致に導きます。是れは獨り文樂座に限つたことではないのですが、文樂座は人形さいふ特有の偶像に入神さす度に特に此の感を深くさせました。これは文樂的にも藝術的にも一つの郷土情調の藝術として永久に保存させたいものです。

二 さて併し其の保存方法としては、何うしたら好いかさいふことまでは考へて居ませんが、先づ可及的多くの人に見せて、其の眞價を知らしめることであります。

大久保春永

一 云ふに云はれぬ心の中の樂しみを得ました。  
二 滿天下同好の士の贊助を得て宜しく基金を募るべきです。

佐竹守一郎

一 人形の面白味。  
二 私には一寸分りかねます。

常盤津文賀大夫

一 ◇藝の上では、いつも學ぶ所が多く敬服して居ります。◇虫干に祖母がかた毒の小袖の匂をかぐ様な……なんざなく……。

二 御靈でなくては聽く機會が少ないさいふのは不自由で（同好者にまつて）他の場所で聽かせて頂きたい、之が一般の希望でもあり又文樂座保存さいふ事の最も大切な點ではないかと思ひます。

芳村伊四郎

一 人形の形式の優美。

二 現代にそう可き者を作曲して在來の形式を益々優美に達する事。

井上弘範

一 あまり古い芝居を見た事のない吾々には誠に結構な御手本だと思ひました。

二 出來得るだけ古い形式を保存していただきたいと思ひます。

大江竹雪

一 仁、義、禮、知、信、五常道の早學問にて忠孝の必要を一層感を深からしむ。

二 曾て故越路太夫氏を先年京都殿村家に出合、座談中藝術の事に及び、人形淨瑠璃さ素淨瑠璃さ語り方の違ふ事承り、左もあるべき事申し居たる次第に有之候。貴座は今後は舊來の藝術を一貫總て

相守り藝法を崩さぬ様希望仕候。然る上先輩先師の形式、語り方に私なく出演者一統御勤めに相成候は素より美なる藝故、將來充分御保存出来得るに確認仕候。

□

梅原龍三郎

一 最もよく保存されたる過去の藝術しかも其大部分に於いて永遠に美し。

二 語り手人形使ひ等を優遇する事。

□

坂東三津五郎

一 勿論歌舞伎と密接な關係はある、文樂から得る所は多くありますが、然しそれは専門的にわたつて詳細に申さねばなりませんから、今は略しませう、只拜見する度の印象を一寸云はして貰へば、實に立派な美しくしい完全な藝だ

と思ひます、

二 文樂は必らず保存すべきものだと思ひ存じます、之れが亡びる事は日本の美術上藝術上の多大な損失だと思ひます。然し保存せんが爲めに形式を替へたり新味を加へたりするこいふ事なら反對です

文樂は昔ながらの文樂であればこそ算ぶ可きであり、保存すべきだと思ひます勿論そんな事はないと思ひ存じますが我々の方の歌舞伎が次第にそうなりつゝあるので、つひそう思ひます。持續方法に付いてはそういふ智識がないので申せません。

□

野澤英一

一 大阪……昔の繪に書いた、話に聞いた大阪が臙氣ながら頭に浮んで來る様で郷土藝術の第一位にあるべきだと思ひます。

思ひます。

二 經營方法、保存方法いふことは、私の様な淺學なものには解りませんが、保守的ではなくもつて廣く一般の民衆に接する方法をこつたら如何と思はれます。

□

市川荒太郎

一 何々を數を申し上げられぬ程、文樂座人形淨瑠璃には數限りなく澤山藝道を覺へました、私しの爲めには一代の恩の神を存じて居ります。

二 文樂座は私の家に取りますしては縁故深き劇場故以前通りに永遠に人形淨瑠璃を文樂座にて演ぜられたし。

□

都築文男

一 何んを謂つたら好いのでせうか、聴く度に古きものに對する限らない懐しみを

ます。

二 正直な處自分自身の營みに汲々たる私なごには是れを云ふまごまつた考への持ち合せはありませんが、名人去つて頃に寂寞を感じる現在の文樂座の状態に於いては、せめて古曲の復活、或は新作の上演をいふ風に愛好者をして

又かこいふ感じを抱かせぬ様狂言の撰擇に深い注意を拂ふこともこの尊重すべき郷土藝術の保存に大切な一法だと思へます。

□

名越仙左衛門

一 永き歲月の柔順な奉仕者として藝術殿堂たる文樂獨自の藝術境は今も尙燦として輝き彼の青錆びた梵鐘の響きの如くに度々私達の限りを醒ませて呉れたごです。

二 たま／＼思ひをめぐら

すに其處に牢こして抜き難い所謂文樂固有の因襲なるもの、潜在を觀取しないではゐられませんが、人材の選擇は勿論のこゝ、新人の拔擢因襲打破等にあらゆる鞭撻苦を経ての新らしき文樂を樹立して頂きたいのです、要は時代意識に覺醒めた新らしき文樂に依る近時觀能になかつた處の衆人渴望の出し物を其處に開陳して頂きたいのです、借越ながらこの愚考を述べてこれが當事者の英斷を希望して止まない次第です。

□ 會我廼家 五郎  
一 美感！それです。

二 大阪のお金持ち達がウンミ力らを入れて下さる事に切に望みます。

武田 正憲

一 本統の藝術の持つて居る、味ひみいふのか、酔心地いふのか！ミにかくそういふものを教へて貰ひました。二十一二から五六までの私はさんなにいそ／＼京町堀の停留所を降りたこゝか——その頃の心持ちを思ひ起すこゝそれだけでも愉快です。

二 國家が若し、藝術團體若しくは企業に保護を與へる場合を想像したら、私は敢然私の一票をこの集團に投じます。當面の問題として論ずれば、如何なる方法を以てしてもこの道場を保存すべしです、しかしそれは年二回位の公演に止め、その餘は「街に出でよ！」です。何故なら大聲俚耳に入らず、大衆的の藝術でなく高踏的である故にです。

柳 永一郎

一 義太夫節いふものなぞには、全然門外漢の私にも、その技術は解りませんけれど、永い傳統がもつてゐる洗練されて美しくさには一たまりもなくまいつてしまふ程心酔してゐる一人です。夢さか幻さかいふものを何時でも見せてくれる所、——そうしたものは私の知つてゐる限りでは文樂を置いて外にはないと思ひます。

二 さて、そうした私共にまつて文樂の保存は是非もなさなければならぬことだと思ひますが、餘りに専門的で、その技術が洗練されすぎていゝいふ長所が、かへつて一般的な觀客を呼び得ない短所となるではないでしょうか。私しの經驗でも、度々見れば見る程、あの私にまつ

ては尊い夢や幻がだん／＼薄いで来るように思ひます。一度いゝものを見るこゝかへつてそれを壊さない爲めに、もう見ない方がいゝなぞと思ふようになりまます。——あまり末端の技巧が目につきすぎてそれに患はされるのがたまりませんから

實川 延 若

一 院本の筋を徹底的に知る事の出來たのを常に文樂座に感謝して居候。

二 あくまで古い形に式によつて行く事をお勧め致します。

栗島 すみ子

一 始めて文樂を見ました時柔かい肉の線でなくても、一つの情緒は得られますことを見ました。泣きも笑ひもしました。

人形の動きが如何に自然に遠くても、人形師の魂が人形に移つて居るこゝを見ました。

二もし、興行的に將來成り立っていかなければ、松竹あたりで人形師に補助して、時々藝術的の公開をしたらさうだらうと思ひます。

だんく／＼かう云ふものが亡くなつて行くのは惜しいと思ひます。

中村魁車

- 一 参考資料が澤山有ります
- 二 皆さんがたで愛するのですね。

市川中車

一 私しは尤も時代劇をおもに演じますれば、下阪の際には必ず拜見に参り其の度毎に數知れず徳を得て居ります

二 先般歌舞伎座にての文樂座は大ぶ我れ／＼同業の若手なごも謹しんで拜見致された様に見受け誠に心嬉しく存じました。今更ら申すまでも無く歌舞伎劇の手本として保存すべきであらうご存じます

音羽兼子

一 人形使ひの鮮やかさチヨボのイキと一分の隙もなく呼吸もつけぬほごの氣合ひ、良辨杉の良辨僧なご人形は思はれぬほご一切の動作又品のよさこれ程の俳優があつたらばと思ひました。

二 東京へ出演の機會が少くないと思ひます。年に三四回は来て頂きたいのです。

中村成太郎

一 舞臺生活を生命としてゐる私等にきりて、院本物の

字引さもし、尙演出上多大の参考とする事限りがありませぬ。

二 郷土藝術として大阪の唯一の誇りです。その意味で現在の文樂座をより以上の向上發展させ、廣く他方面に進展する事。

初瀬浪子

一 舞臺に立つ身として非常によい参考と無上の好手本を得ました。

二 中々六ヶ敷しい問題ですが兩者の(床ご人形)完全なる後繼者を出す事が肝要かと思はれます。

辻野良一

一 憧憬が少ない爲め數多く文樂に接してゐません、だが、我國の有つ唯一の藝術であるご俱に郷土藝術として大

きく育つて行く可能性のあるものだと思ひます。

二 聞くならく道頓堀へ出す出さうですが、已に遅れてゐる位だと思ひます。骨董的に隅ツこへ藏はないで明るい所で打算を捨てた興行の道へ進ませたいと思ひます。

東日出子

一 開演中でしたので残念ながら拜見出来ませんでした今度は是非拜見致しまして意見を申し上げます。

片岡我童

一 洗練された動作に人間以上の感情を表現する人形！それは自分が歌舞伎劇を演じる際の最好の参考資料である

二 文樂座今後の保存！それは文樂座の民衆化！云ふ事はそれで盡きて居ると思ふ、

希くば新進淨瑠璃作家出現も未だ淨化されない古人の作品の上場、自分はそれを望んで居る、

水谷 八重子

一 私らとは異なつた世界のいろんな不思議な貴重な尊敬すべき藝術のインスピレーションを得ました。

二 私しにはわかりませんが、しかしいつまでも保存していただきたいものです。

□

片岡 我十

一 音楽は多く我々に或る啓示を與へてくれます。

二 音楽の保存は一朝に爲すするには餘りに大きな問題です、が單に浪花のみに固定せず、全國的に定期公演も良いでせう、東京でも年二回位の結構だと思ひます、結構だ

しては、餘りに同狂言のみの上演を繰返へさず、例へば近松の「日本振袖始」だとか長谷川千四の「三浦大助紅梅袴」などの古曲を紹介してもらいたいと思ひます。

□

會我廼家 大磯

一 澤山にありましたが、私しは無筆ですから書現す事が出来ません。

二 素人の天狗達が多くなる程音楽へ行く人も多くなると思ひます、そうなれば自然に保存が出来ると思ひます。其の素人のお稽古に附いて文

樂の師匠達、又音楽座へ出勤して居られぬ師匠達に申し上度事も有りますが除白がありませんから、之れで左様なら

□

栗島 狭衣

一 歌舞伎を見ても院本を

見てもてはわからない本當の心持ちを、音楽から得てかへりました。古典的な味は人形三人形使ひ、太夫に絃が、尤もいゝ意味のマンリズムに據るものだと思ひます。

二 保存は凡べて尊重にありませぬ、典型を傷つけないことが第一です、無用の改良とか、進歩とかさういふ侵略をふせぐべきです。新らしくつて安いのは大害を招きます、

舊くつて飽くまで貴いやうに世界的の骨董で充分です。

□

村田 嘉久子

一 私は人形を拜見するのに際して、大阪で座つて見た時、東京で椅子席で見た時、大變感じが違ひました、人形の振りに引付けられたのは座つて拜見した時の方が多うございしました。

二 この問題には今すぐ適當な意見はございません、然し、是非保存して頂きたいものは存じます。問題に對しての御返事が適當であるか無いか分りませんが只思つたまゝを

□

尾上 卯三郎

一 いろいろ重要な教訓を得ました。

二 日本の誇りミして長く残して置きたいと思ひます。

□

會我廼家 辨夫

一 色々得ました。

二 所在を足場のよい所に置く事。もつと安く見せる事

お斷り 締切後頂きました原稿は印刷の都合で次號に廻しました事を御了承願ひます。それから本文中に二箇所△印の入つて居るのは、どうしても字が解らなかつたため、之は何れ御教示を乞ひ次號で補ふ考へです。



淨瑠璃話

# 本朝二十四孝

松長照夫

## (一) 桔梗ヶ原

そこは甲斐越後の國境。名こそ優しい桔梗ヶ原さいふのであつたが、さもするに境の目標にさへ兩國の感情が露骨に出るのでつた。

「俺が主人の領分に踏込んで、草を刈取れば盗人も同然」  
しがな、下郎の分際、馬の飼料に草を刈つたところから言葉争ひも斯うであつた。

「何故の争ひだて……フウ、それですつぱり様子はしれた、國が變れば心まで變る、甲斐の國はすべて盜賊ばかりの噂も嘘でな」

厩の下郎の争ひのさなかへ出て來たは甲斐の執權職高坂彈正の妻唐織、越後の執權越名彈正の妻入江の兩人、入江は下

郎から事情を聞くに唐織に當こそすりをいふ、唐織も黙つてはゐられず、下郎の争ひは家老の妻の争ひに移つて行つた。さうのつまりは目標より踏込んだ甲斐方に退けめがあるため、唐織は口惜しさを堪へて左右に分れて引込む、さ、空虚の舞臺へ悄悄と出て來た一人の男、ちようぎ目標のそばへ捨子をして行く、あさへ通りかゝつたは筑摩の社へ參詣の高坂彈正時綱、捨兒に眼をつけるに家來に命じて調べさせた。小袖の紐にある下札には甲州の住人山本勘助とある。

「捨てたる主こそ芳しい、勘助を味方に入れる信玄公へのよき土産」

邸へ連れ歸らうとした時、高坂殿、しばらくは聲をかけて出て來たは謙信方の執權越名彈正忠政、こゝでまた捨兒の身體が兩國の境目にあつたさういふ言葉争ひになつたが、前に別れた双方の妻が立ち聞いてゐてそこへ出る。境目論は果しがないから、乳をのませて吸ひついた方が受取ることにしてはさ唐織が云ひ出した。それは時に取つてよい思ひつきさ、双方の主人も納得の上で乳をのます、ところが嬰兒は唐織の乳をのんで入江には抱かれもしない。

唐織は前の口惜しさを入江に返上して一同双方に引きわかれた。

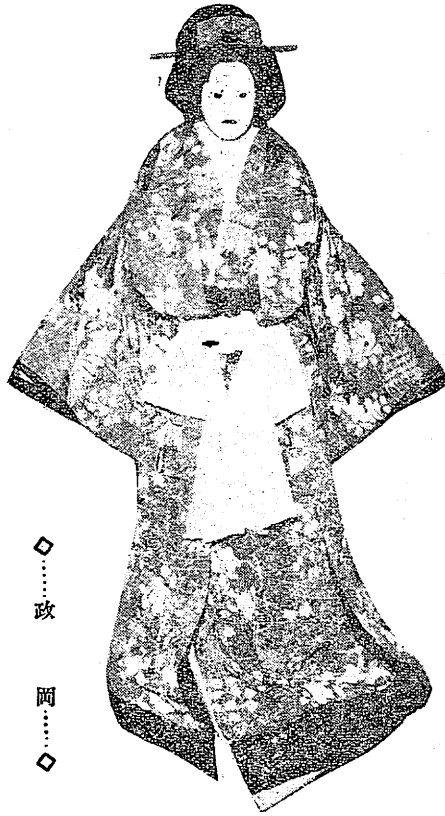
## 勸助住家

信州筑摩郡のほごりは、降り續く雪で野山も家も埋もれるほごだつた。その名一世に響いた軍師山本勸助の未亡人は七十の坂を越へた老齡にも拘らず、横藏、慈悲藏といふ二人の忘形見を傳育して、この深山里に住んでゐた。然るに兄の横藏は村中にも聞けた親不孝者、弟は反對に大の孝行者だつた。今も今もて村の者が慈悲藏の留守に妻のお種を對手に兄弟の噂をしてゐたが、それが歸るご間もなく慈悲藏が歸つて來た。

『母者人はまだ寝みか、おゝ次郎吉も寝入つたの』

『あいの、此子が機嫌よう育つにつけ、氣にかゝるは峰松が』

一子峰松は何國の誰に遣つたかお種は心配顔に訊ねた。



◇……政 岡……◇

『心配するな、この貧家に置かうより、乳母に乳母をつけるやうな結構な家へ養子に遣つた。彼奴は強い果報者、思ひ出さずみんな捨てたと思ふてわや』

慈悲藏は胸中の苦しさを押包んで云つた。そして奥の間を覗くも老母の姿が見えないので奥へ入る。そこへ長尾三郎景勝が家來をつれて訪れて來たが、戸外に佇んで内の様子を窺つた。庭には老母が慈悲藏にたすけられて立つてゐる。慈悲藏は老母の軀をいたはつて大雪に冷るこいふも、母は慈悲藏の取

る手を振拂つて、七十にあまり愚鈍にはなつてもまだ子供に物は教はらぬと邪見に云つた。慈悲藏は母の無理にも逆はず獵して來たものを賞翫してくれ云つたが、母は生きものの命を取る山川の珍物よりは、裏の蔽の筈を取つて來いといふ。



『この寒中に筍が……』

『さアあるもの取つてくるは子供でもする。妾が夫は天下に聞けし軍師、一生主人を取らず過されしが志形見の兄弟の子が器量を見定める迄は、女ながらも夫の名をつけ、山本勘助と名乗る此母、二人の内に勘助といふ名を譲り、父の軍法奥儀の巻を傳へたいは思へども、それでは中々勘助にはなれぬ』

『さアその苗跡を受けたさに、心をつくす此慈悲藏』

それ〱その名が欲しさに孝行、そりや眞實の孝でない』慈悲藏は苗氏を望むも母人の悦び顔を拜みたい故、兄横藏の心〱一つにされては情ない云つた。母は尙更憤つて、兄を不幸といふかと思はず杖をふりあげる、途端に老軀のよろ〱〱きよめく、下駄が飛んで戸外に佇む景勝の前へ落ちた景勝はその下駄を持つて内へ入つて来た。そしてうやく〱〱く母の前へ置き、丁重に頭を下げた。みれば人品骨柄卑しからぬ武士、昔、石公に脊を與へた張良が、佛、奥床しいお方故おちかづきにならうと母は云つて座敷へ招じた。

『黄石公にも劣らぬ軍師、山本氏の御息を召抱へ一方の大將を頼まんだため、長尾謙信が嫡子三郎景勝、これまで参上仕る』

景勝は弟慈悲藏を所望と思ひのほか、兄の横藏を望んだ母はデツミ考へたが、折柄他出の横藏になり代つて母が承諾する云つた。景勝は喜んで、家來に持たせた引出物を差出し、吃言葉を番へた上は、違背はならぬ念を押し歸つた。ミ、入ちがひに横藏が歸宅、母はほや〱〱笑顔で迎へた。慈悲藏は兄の草鞋を取り足の洗はうとするを、母は横合から自分が洗ふといふ。横藏は横藏で、若い女の手觸りはよいが、乾物のやうな母者の手では、三傍若無人な振舞、上へ

あがるミお種に足をもませる。そこへ又、勘助殿に用事あつて大僧正武田信玄参上といふ聲、母ミ横藏は障子を閉めて次の間へ。慈悲藏夫婦が恐入つて待ちかまへるミ、信玄と思ひのほか、唐織が嬰兒を抱いて入つて来た。それは慈悲藏が捨てた峰松だつた。お種は養子先の人が見ねたと思ひ込んで、いかいお世話にミ挨拶をする、唐織はその挨拶口を手で制めて、甲斐の國で養ふからは最早國の世繼ぎ、則ち今日の信玄公、この愛らしい信玄公が慈悲藏を召抱に來たミ、恩惠的にいふが、慈悲藏は空ミぼけた顔で、軍師の師範のミ勿體ない鋤鉄のほか何も存ぜず云つた。唐織は桔梗ヶ原での紛糾を詳しく話して、峰松を前に親子の愛情をかせにさうでも慈悲藏を誘はふした。

障子の内の母は吃した聲で、子供を餌に思を着せ、味方にせんこするやうな信立に奉公しては武士が立つまい、然し苗氏も巻物も要らないなら勝手にするがよいと云つた。慈悲藏は苗跡を繼ぎたさ、峰松を唐織の手に抱かせ、むりに戸外へ突き出した。唐織は去りもならず、門に悄然と佇んでゐる慈悲藏は母に命ぜられた藪の筍を掘るべく、唐織には目もくれず、再び戸外へ出るに、そのまゝ裏董へ入つた。お種は寒ささ餓けに泣く嬰兒の聲に思はず戸外へ走り出て、唐織の手から奪ふやうに我兒を取るに乳房を與へた。それを見た唐織は、慈悲藏はもはや此方の味方と喜んで歸つて行つた。夫に制められた哺乳を、思はず與へたお種は、唐織の後姿を茫然と見送る。そこから飛んで其た手裏劍が峰松を冥府の人にしてみました。お種がハツツ気がつくに、次郎吉を抱へた横藏が奥へ行く姿、さては我子の害になるに横藏の仕業よな、お種は無念の相物度く後を追ふて奥へ入つた。

何處を掘つても寒中の筍はない。然し慈悲藏は鉄持つ手を休めはしなかつた。

『こりや待て慈悲藏、埋んである傳授の一卷、汝にはやらぬ兄が出世のたねに掘出すのぢや』

ソツミ類つてゐた横藏が、今や掘當てた筍ならぬ一つの

箱を、横合から奪らうとする、二人の争ひの手からすべつて箱は傍の池に落ちた。障子をあげた老母は、今こそ母が心に叶ふ慈悲藏、最前そちに云ひつけた通り、裏口四方に氣をつけよと云つた。慈悲藏は喜び勇んで奥へ入る。兄横藏は池中から箱を引上げて母の前へ差出した。

『たゞ、そなたにはわけてよい主を取らする。則ち主人より下されし装束改めさせて』

母が持ち出したのは白臺に無紋の上下白小袖、三寶には九寸五分が乗せてあつた。その仔細いふは斯うであつた。

嘗て信玄と謙信とが、室町の御所で互に我子の首討つて心底をあらはさん契約したことがある。景勝が訪ねて来て、横藏を所望したのは、景勝の顔と横藏の顔が似通つてゐるため、景勝の身替にするに、何故横藏を没義道に貰ひたいかといふに、以前諏訪の森に於て横藏が景勝のために一命を助けられたことがあり、その恩を情を楯に今日身替りに立てやう魂膽であつた。引出物と云つて置き去つた箱の中にはその事情が詳しく記されてあつたから、母は身替の肚を決めてしまつた。此場て切腹をさせるか、首を討たせるか、既に家の周圍は景勝の家來が隙もないほかに取巻いてゐるこいふ絶對絶命の場合だつた。

然し横藏は何も思つたか、隙を見て逃げやうとした。する  
ご、又もや何處からか手裏劍が飛んで横藏の膝口に當つた。  
挫き倒れた横藏は、すばやく三寶の劍を取つて自己の右眼を  
くりぬいた。

『母者人、景勝に似たによつて身替に立ちたがる。小面倒な  
此顔に斯う疵つけて相が變ればもう身替りには立つまい、  
今日只今父が苗氏を受繼いで山本勘助晴茂、軍法奥儀を胸  
に貯へ、三略の巻より大切な此命、やア謙信の家來直  
江山城介種綱それへ出よ』

横藏が聲と共に、一間をあけて慈悲藏が出て來た。衣服も  
長社袴に改め、見違へるばかり凛々しい扮装だ。

『某長尾の家臣たるこそ、深く包んで古郷へ歸りし其仔細  
母人に密に語り、豫て申受けたる兄弟人の命、現在の子を  
捨てたも否應云はさぬ命の無心、さりながら眼をくつて身  
を全ふする大丈夫の魂、あつたら勇士を殺すは残念、此  
上は長く謙信公に仕へ忠勤をつくさるべし』  
だが、横藏はその言葉を嘲笑し去つた。

『謙信づれが家臣には汝等が分相應、まこ山本勘助が崇む  
る主人は、忝なくも足利十三代の公達松壽君、是れへ誘  
ひ申されよ』

聲につれて唐織が、次郎吉實は松壽君に附添ふて奥から徐  
々立ち出る。山城親子は思はずハツミ平伏した。

『やい山城、只今打つたる手裏劍は、先年室町の館にて此公  
達の御母、賤の方を奪ひ、立ち退く折柄景勝めがけて打か  
けたる我が小柄、只今我が手へ鎧に落手』

その後、山本の苗氏を再興すべく軍學に心を凝らす所に、  
武田信玄が姿をかへて只一人、密に庵を訪れて、足利の行末  
覺束なき故、我が力になつて事を謀れいふ名將の一言、心  
魂に徹し、そこで主従の誓ひをした。それからすぐに都へ上  
り、様子を窺つてゐる時しも館の騒動で、茂晴公は敢なき最  
後、懐胎の腹の方をつれてはる々信濃路へ下り、更科に  
近い片山里に蔽まつて置いた。賤の方は産後の惱みであの世  
へ旅立つ、よんごころなく松壽君を我子と偽つて傳育してゐ  
たのであつた。

始終の話に一同は感じ入つた。母は改めて傳授の一卷を横  
藏に與へた。斯くて兄弟は、永久に敵味方にわかれ、勝負を  
争はねばならぬ奇しき運命の下に置かれたのだつた。

### (三) 十 種 香

謙信の館に足利十三代の公達松壽君を迎ゆるさいふので、

武田の息勝頼は花造り義作を僞つて入込んでゐた。それは幼君松壽丸の身上にもしもの事でもあつてはさういふ杞憂からだつた。謙信の娘八重垣姫は許嫁の夫勝頼が切腹したさいふその日を命日に、勝頼の姿を繪像にして毎日回向三昧に入つてゐた。同じく侍女になつて入込んでゐる濡衣は夫義作が勝頼の身替になつて切腹したその日を命日に回向をしてゐる。兩女が勝頼の義作を見て心に迷ひを起すに無理はなかつた。

謙信は義作を濡衣が舉動に早くも疑心を懐いた。果して濡衣は八重垣をそのゝかして諏訪法性の兇を盗み出ささいふ、それが謙信の耳に入るに、謙信は義作に鹽尻までの使者を命じ、あこよりすぐに討手を向けた。八重垣姫は父から、義作は假の名、實は勝頼であるに云はれ、而もその勝頼を討手の人数がくり出されたのを見ては、身も世もあらぬ思ひ、その助命を父に哀願したが、謙信は見向きもせず、素性怪しい濡衣を引立て奥へ入つた。八重垣姫は愛人の身に討手の掛つたことを愛人に報せたいと焦つた。その一念が凝つて諏訪明神の狐が憑つた。諏訪法性の兇さいふは諏訪明神より武田家へ授けられたもの、夫を思ふ念力に神の力の加はる兇、勝頼に返せとある明神の御教を、兇を持つた姫の身はそのまま宙へフワリと浮いた。

謙信の妻手弱女御前、花番人の關兵衛は共に八重垣姫の姿を見たが、神通力でさうにもならない。關兵衛は持つたる鐵砲で覗ひ討ちを構へたが、筒口は八重垣姫でなく手弱女御前であつた。この關兵衛も假の名、實は天下をねらふ齋藤道三三十年來行方をくらましてゐたのを、つひに武田家の軍師山本勘助のために暴露されてしまつた。

『美濃國の住人齋藤入道道三』

大音に云つて出て其たは山本勘助、松壽丸に代つて乗込んで來たのであつた。道三は松壽丸が今日この館へ來るを聞き第一に松壽丸を殺し、續いて謙信、信玄一家をも全滅させ、自らが天下にしやうさいふ大望、それを疾に見ぬいたのは山本勘助、すつかり道三の裏をかいた。

『根強く仕込みし謀叛人、かゝる危き敵の中へ、足利の公達がかうかくと來り給はんや、松壽丸の御入を僞り來つた此勘助、最前鐵砲にて打つた手弱女御前の御死骸、さくさく拜見仕れ』

勘助が道三の眼の前に投げ出した女の首は道三の娘濡衣の首であつた。道三は何も彼も一時に破壊されてしまつた。そしていかにも稀代の謀叛人らしい、英雄的な最後を遂げた。

【をばり】

# 操人形の沿革

## 西野四縁

人の軒の先に小さな人形を操つて、流轉してゆく特殊民は、西洋東洋共にあつて、此のボヘミアンの遊牧の余技が、西洋にあつては伊太利を中心として残るマリオネット劇となり、東洋のそれは我大阪に木偶劇の華を咲いた。御靈の文樂座なる迄の我が木偶劇の傳統沿革は上、遠く王朝時代の傳説に起る實に莫大な複雑の内容を持ち、到底短時日に於て記述し得るものではないが、茲には社會史的見地の深みを捨て、體系も整へず、その概況を叙述しようと思ふ。

傳の時代に於ける我が木偶劇は大江匡房の傀儡子記に散見される。惟ふに此の傀儡子と稱する大和民族と生活の様式を異にする處の遊牧の特殊民は印度の北西部から出たらしいジブシー

の一群で、それが西域地方から支那へ東へ進んで更に南に轉じて朝鮮に入り、わが傀儡子と成つた云ふ想像は、普通行はるゝ處のもので、正確な理由は無いが、殆んゞ斯くあつたであらう。

鎌倉時代に入つて、是等傀儡子は一搬の生活に同化し、そのうちの女性は娼婦となつて、わが花柳史の最初の頁に姿を現はして来る。南北朝には既にもう傀儡師と云ふ専門の職業となり、看聞日記應永二十七年の條、奈良大乘院の永享十二年記と云ふ信ず可き記録に操人形の記事と、錢を與へて舞はしめた事が録されてゐる。

その次に此の傀儡は淨土宗と握手して、生活の安定をつくつた、南都小嶺の遊僧が歌舞の群にも入り、又は寺の行者と成つて神社佛閣の縁起物語を人形の特伎によつて世俗に見せた、是が徳川時代の操芝居の基礎をつくつたもので、徳川初期の操芝居の謂ゆる本地

物と稱する狂言の形式に残されてゐる甚だ色彩の濃厚な影響である。

永録十年四月には辻立興行が立派に行はれ『目も驚かす物なり』と山科言繼をして、その技巧を讃えしめたが、それから二十五年の後である文録及慶長に操芝居の創始があつた。

爰に淨瑠璃が起つて来る。……室町中世に現はれた琵琶を伴奏する淨瑠璃は永録年間の三味線の渡來によつて三味線に伴奏器を替えた澤住と云ふ盲人は、淨瑠璃の祖先と云はれ、更にそれを切磋して平曲を加味した瀧野句當は父と稱せられ、次にその門人等が西宮の傀儡師引田某と相談して、此の母性に産れ出たのが我操芝居であつた、時殆も文録征韓役後の小康に乗じ、急激な勢で頭を上げて來たのであつた、即ち淨瑠璃語りも、三味線弾きも、人形遣ひが茲に三角同盟を起して、地深く操芝居の根をおろして了つたのであつた。

林羅山の隨筆によるこ——當時の劇場は、高さ二丈長さ數丈の幕張りで、雛人形の壇のやうな棚を設け、太夫は棚の下に隠れて語り、人形のみが見物の眼前に技を揮つた、土製もあつたが木造の方が多く用ひられ、男女僧俗、天仙神女武士等種々のものがあり、舞ひ、鼓を打ち、馬に乗り、棒をふり、旗、傘をさしかけ、斬られた者は首こ胸が離れ、狐はその尾から火を放つてみせた。伴奏は鼓に笛があり、時々床板を踏んで掛聲をして調子をこつた。——こ記してある。

剛健から華美へ、人形の衣裳も妍爛こなつて、寛永の有司は政策上之を諷責して太夫を獄に投じたりしたが、是は外部的に操芝居を刺激して、人形を質素にして、その妍爛を技巧の現はして、此の間に異常な發達をなした。併し當時の劇場は矢張り小屋がけで草創の時代からは餘り進歩がなかつた。

愈よ貞享二年、道頓堀の今の松竹座

に近く竹本座が創立された、如上の操人形は銑鍊ミ淨化を経て盛運を迎へ、竹本筑後椽ミ云ふ偉大な語り手ミ近松門左衛門ミ云ふ絶後の院本作者を有するに至つた。次に豊竹座の分離、竹田出雲の人形改善ミ、更に——地歩を固く踏みしめて、遂には民衆娛樂の大地盤を造り上げたのであつた。

黒幕ミ山廉が金襴や張り抜きミなり女人形の紅の表に淺黄裏、摺り箔の模様が、金襴緞子縹子縮緬ミなり。また近松の『源氏烏帽子折』ミ『世繼會我』に立者の人形に足をつけるこゝが竹本座以前に既に實行されてゐた。

自營時代の竹本義太夫は人形や舞臺裝置には餘り意を用ひない程、淨瑠璃中心主義だつたが、幸にして女を使ふ辰松八郎兵衛があり、男を使ふ吉田三郎兵衛があつて、彼の會根崎心中の道行には、見物をうならせたが、此の時一人が一人の人形を使ふのであつて謂ゆる突込手ミ編する人形の裾から兩手を差し込で、使ひ手の姿を隠し出遣

等はほんの僅かな場面に限られてゐた爰へ竹田出雲の人形革命の時代が来る、即ち彼は人形中心主義で竹本座を經營した、彼の劇場經營の手腕は義太夫、近松をして雇れた人の姿のやうにした、お山の辰松、立役の津山助十郎津山金七が好評を博し、國性爺後日合戦には辰松の伴古田文三郎が錦紗を出遣ひして、その片手での天才的至藝は人を驚ろかせた、是が後年操芝居ミして爛熟期に殊勳を樹てた人形遣ひであつた。尤も此の時代もまだ突込手で遣つてゐたのである。

人形の仕掛から云ふミ享保七年には豊竹座で眼玉の動く工夫をし、同十八年には竹本座で指先きの動く仕掛が案出され、その翌年同座で人形の腹の膨れる仕掛が出来、同廿一年に眉毛も動く案出がされた。すつミ遅れて延享の頃に立役人形に屏風手、即ち五本の指を並べて折り届出仕掛が出来たのであつた。

## 白井松次郎

文樂座に就て——こんな課題の下に私が何か書かうとするならば、其處に大きな矛盾を感じて何事も云へない様なデレンマに陥入つて終ひます、つまり經營當事者としての立場、また一箇の藝術愛好者としての立場を考へさせられるが故に……。

先づ經營者の立場として申上げるならば、あの御贖文樂座は私の事業中に於て確實な經濟的バランスのされる仕事としては取扱つてはゐないので。古き浪花情緒の一つ、床しき傳統の國としてあの文樂座のみの持つ日本固有の色彩を私はいつまでも保存させておきたいと思ひます。それは現代のハイカラな人達には云はせればどうでもいゝ事であるかも知れません、ビルディング三七三番の時代に竹豊の人形芝居でもあるまいと思ひます。仰有る新人があるかも知れません、けれど徒らに散文的になりつゝある現代社會の一隅に、この美しい詩的な古典的藝術が棲むだけの餘裕があつてもいゝと思はれます、たゞにそれだけでなく吾が民族性を最もよく發揮した藝術として世界的にむしろいつまでも保存したいと思ひます、さうして私はあらゆる犠牲を拂つても如何なる難關に處しても打續けて來ました。藝術的に——それは餘りに廣言の様ですが——申上げて、近時新作家連が創作される人間味さか戀魔主義さか、また耽美派さか云つて從來の日本道德の立場からは非難さるべき不倫背徳の事件がよく取扱はれてゐます、私はそれが決して非道德ださか非藝術ださか云ふのではありません、さうしたお作が人間本來の姿の表現であるのかも知れませんが、併し私が「忠臣蔵」を嬉ぶ民衆の多いのを見るさいつも斯う感じてゐます、不安定な道義よりもよしそれを非人間的の云はれ様が安定した道德を對照に求める方がより愉快であることを……。

文樂座に上演してゐる臨本に盛られた精神は古臭い一言に貶す人があるかも知れないが、古い日本道德を美化した立派な藝術として、それをいつまでも傳へて行く

現在のやうに三人で使ふのは享保十九年竹本座で芦屋道滿大内鑑を上演した際、與勘平の人形を三人で使ふたのに始まるのである。

頭の名人は篠尾人兵衛さ云ふのが、竹本座創始の頃から、好い頭を打つたが、就中、國性爺、安體神、素盞鳴の三つは名作として名高く、それをいろ／＼と轉用する事を思ひついた、後に竹本豊竹兩座の對抗した時代に男の方では、檢非違使、素盞鳴、文七、由良之助、樋口、天神、實盛、鬼一、蛇羅助、團七、一寸、六郎、釣舟、白太夫正宗、源太、役行者、日蓮。女の方では、娘、女房、傾城、累、御台、老女お福。さ云ふ種類が出来、遣ひ手も分業に成つて、數十人が樂屋に詰めてゐた。

斯くして操人形の爛熟期が來たのである、その遣ふ人形の動作が、歌舞伎役者の伎藝に影響し、その創造的な衣

殿堂として此古き文樂座は殘しておかなければなりません、しかし乍ら時代は流れて行く、成程古き日本の道徳を物語る古典藝術としての價値は認めるが流れ行く時代の人が振返らねば仕様がなないではないかといふお説も出るでせう、だがもつこ考慮して見たい、文樂座が現代の社會に相容れられるべき價値の充分にあることを、そしてもつこ廣く大衆に接して、大衆と共に古典藝術を保護して後世にまで傳へて行きたいと望んでゐます。いざゝか乍ら私の立場として文樂座に對して今こんな事を考へてゐます。

## 東京の地より

大谷竹次郎

大阪の人形淨瑠璃文樂座に對しては、私が何だか幼ない頃に母の脊で見た風物を想ひ起さす様な甘い感觸をそのまゝおぼえます。それほどなつかしみを感ぜさせられる文樂座がたつた一つ大阪のみ存在してゐるこいふ事ははるか東京の地に居て戀しい様な氣がします、大阪の誇り云ふよりも、これはむしろ日本の誇りであつて、いつまでも存続させたいと思ひます、それには多くの人に忘れさせないこいふことが最も肝心なこことです、今、文樂座の運命を考へる時、大阪の片隅御靈神社に押込めておくまゝでは自然と忘れられて行くに違ひありません、そこで地方巡業もドシ／＼やり、私にて東京へはこれからも度々招いて出演させるつもりでゐます、そして廣く普及して一人でも多くの人に忘れさせずにおくこいふこことは取りも直さず文樂座を保存する第一の方法と思考してゐます、日本民族の持つ美しい道徳をよく表現した各種の淨瑠璃はたしかに私たち日本人の心の棲家であると思ひます、そしてこの文樂座の淨瑠璃を聴いてゐる時、人形のぎこちない線を描き出されるのだがクツキリと鮮やかに表現される人情美にウツトリさせられる時、私たちは心の棲家へ歸つた様な氣持にさせられます。

裳の工夫は、同じ狂言を歌舞伎に上演する際に、その修寫さねば見物が承知しないのであつた。此の創造的な案出は初代吉田文三郎がその榮譽を總て負つてゐるのである。例へば忠臣蔵の由良之助の紋所の二つ巴、菅原傳授の梅王松王櫻丸に、これも惣髪で黄色の大郡内緋掛紅の衣裳、等、演出の方では幾ら俳優に教へたかは舉ぐるに頗難な程の數がある。

それから天明の頃に成つて人形操芝居は下り坂を迎へたのであつた。維新明治三世は遷つた、民衆を手をつないで來た操芝居も、何時かはこの眞價を示し得ぬ時勢となつた、餘喘すら保ち得ない骨董品となり了つて、傳統のある此の木偶劇は文樂座と共に國寶云ふ過去に結びつけられた褒め言葉で、その殘燈が護られてゐる。



# 文樂座雜感

西田眞三郎

裏の熊さんも「今頃は半七さん」ミ酒屋のさわりを唸る、隣の八さんも「三つ違ひ……」をやる。熊さん云ひ八さん云ひ何れも師匠に就いて頭を振つたわけでないが兎に角淨瑠璃を知つてゐる。私達がたま／＼旅行をして、何かの機会があるミ淨瑠璃を所望する人が出て来る。「いや迎も」なごミ頭を搔いて不調法をしめすミ、大阪には文樂があるぢやありませんか、大阪の人は皆淨瑠璃がうまいミ云ひますよなご、一かごの藝人扱ひをする。なる程御靈さんに文樂があつたなアミ思ひ出す、攝津大塚、越路太夫……嘗て聞いたこごがあつたミ云ふのも恥かしいやうな覺束ない記憶をたぐる。老松の夜店の晩に豊竹呂昇、竹本東廣なごの看板を見て、老松座の木戸を一する所から薄々ミして盡きない情趣を汲

み出させる。芝居はもごより、長唄、清元常磐津なごミは又別な世界である久し振り東京歌舞伎座への引越興行が非常に受けて、笹川臨風氏其他の先生方が國寶だミか何んだミか云つて諛辭を措しみなく使はれたが、私達にして見れば初て東京へ行つた譯でもなし今更國寶論でもあるまいミは思ふもの、この「また別な世界」の藝術がさうした人々の心を把握する力が、未だ衰へてゐないのだミ見れば、御靈文樂座を有する大阪人ミして甚だ以て嬉しい譯である。

阿東節ミ云ふものを聞いた時、嘗ては江戸を風靡した程の全盛を見た音曲はあんなものだつたのか思ひ半ばにすぎたこごがあつた。肉は落ち、色香も衰へ、骸骨ばかりなつた音曲も少くない。衰微した、悪くなつたミ云はれてゐる文樂が、まだ熊さんや八さんの酔興でくゞつた十數年前、書生時代によく濡れ手拭をさげたまゝ入つた下谷の

五軒町邊りにあつた寄席の女義太夫の白い顔が浮んで来る。さうした時に、私は何故御靈さんを忘れてゐたのかミ自分のう、か、つ、さ加減に呆れるこごがある、道頓堀の芝居は几帳面に見に行くが、さうかするミ文樂座へ御無沙汰勝ちになる。その癖、たま／＼文樂を聴きに行つた翌日なご、會ふ人毎に「文樂へ一度行きなはれ、あんだのやうに忙しい人は、暫らくでも浮世を忘れませ」なごミ文樂の提灯持をやるこごがある。

津太夫がさうの、土佐がさうの、道八の粧が如何だつたミか云ふ理窟は抜きにして、文樂は或る美しいイリュージョンを乾からびた私達の胸に抱かせる。勝頼に對する八重垣姫の殉情的なローマンス、紙治ミおさんミ小春の三角關係、お半長右衛門の道行その他數ある淨曲は、人形ミ太夫の聲ミ三味線ミの融なく、智識階級の人々の心を把握する魅力を持つてゐるこごは心強い

ことである。尤も越路去り、彌太夫逝き、清六、吉三郎を亡つた最近の文樂は質を低下した事は事實である。より以上の研究を修練を経て向上しない限り骸骨への路は塞がれない。本當に今にして文樂座一統の發奮がなされない限り、文樂は救はれないと云ふのも、あながち杞憂ではなからうと思ふ。

◇ ◇

最近、文樂の改善云々が問題になり傍ら内訌云つた風のことか馬鹿々々しい程に大騒ぎされた。前者は嚴密な意味に於ては、現在の太夫、三味線の藝術、若しくは技藝上の價値の向上に文樂の興行的價値から割り出された文樂座移轉の問題だつた。技藝上價値問題は太夫三味線の自覺に依つて萬事解決せられる。興行的價値に就いては客足をより多く引く策を現在の御靈で講ずるか、見物の多く來安い位置に移轉するか、つまり如何にして儲けるかの一事に盡きる問題だ。單に保存して行くこと云ふ事なら大阪名物保存云ふ營

利を抜きにした立派な考から松竹の白井さんが現状を維持して行くに越した事はない。つまり一種の社會奉仕だ、道頓堀でウン儲けるんだから、たかゞ文樂の一つ位と云ふ氣が白井さんに在るんだつたら、客足も今より増へて來るかも知れない。先年恩師坪内博士に文樂でお目にかへつた時、博士は疎らな客席を見て「これぢや困るね、大阪には淨瑠璃通がうんこ居るのだから、さうした人達が同好會と云ふやうなものを作つて、後援すればいいのだが：」と云ふ意味の事を云はれた。或る程大阪には素人淨瑠璃の會の多い事から見れば、之を實際に興味の藝として習つてゐる人々が文樂一日の定員數の何百倍あるか測り知れない、若しこんな後援會が幸ひに出來たら双方の向上にもなるし、第一儲り過ぎるやうな、文樂座の黄金時代が現出される譯だがさうは問屋が卸さないらしい形勢である。尤も今でも何々太夫組見と云ふものがあるのだから、太夫、三味線、人

形の人々が直系の門弟から間接の門弟へ積極的に渡りをつければ幾分興行上の不振は緩和されるやうに思ふが、興行者の側ではこんな陳腐な事は既に考えたことであらうが、實行はされない筈だ。そんな事をしては文樂の權威に拘はると云ふお説があるかも知れないが、私達はよく文樂の權威と云ふ言葉を聞いたり、新聞で見たりする。その權威なるものゝ出所は例の因講である。歴史ある因講である。私達のやうな若僧には因講なるものがさつぱり判らないところがある。道八が文樂へ復歸する時に、いかに由緒ある犯しがたい結社なるかの感じを抱かせられた文樂に何か問題が起る。聞いて見るに箸のこげたやうな小ほげな事である。それを云々してゐるのがいつでも因講である。近代人の目から見れば他愛もないところが、大きく取り扱はれてゐる時代錯誤も甚しいことである。馬鹿々々しいことである。

◇ ◇

前にも云つた通り、文樂は「別な世界」のものである。何んだか凡ての今日の現在から、遠くかけ離れてゐるものやうな氣がする。何かいかめしい殿堂の中に垂れ籠つてゐるものやうな感じがある。因講がすること爲す事が最も其の感を深うせしめる。つまり現在の心は相觸れない何物かであるもつと接近しろと言つても溢面をつつてゐる云つた始末だ。短氣な人間だつたらもう寄りつかない。相手にしない。併し一度相接する機縁があつたものは、後日になつてもそれを懐かしむ。衰微して行く、即ち私達からかけ離れて行く現在の文樂を舊の所へ引き戻すのは出来るだけ多くの人との機縁を結ぶことに外ならない。この意味に於て、文樂が御靈から一步も二歩も外へ歩き出すことは好いことである。單なる好事家の狭い集團に接してゐた小さい心を大きくして民衆の中へ飛び込んで行く可しである。中座への乗りもよい。更らに、辨天、角、浪花座等

へも機會を作つて出る可しである。演し物の如何に拘らず、劇場云ふものは不思議にその座限りの常客を多く有つてゐるものだ。あんな劇場では文樂の權威に拘はるなご云ふ事は全然止めて貰いたい、現存の文樂座は名物云ふ立場から見れば、失くして了ふことはまことに措しい。さり乍ら不便な位置にあるがために文樂座が衰微して行くのを見ながら、その儘にして置け云ふのも無理である。背に腹は替へられない云ふ文句のあるのを幸ひに、娛樂街へ移すのもよい。併し隣り近所のカフェーやバーから蓄音器やラヂオが浸入することだけは防がなくてはならない。

(以上ざりさめもなきことを書き並べました妄言多謝)

## 文樂座の三巨星

### 八木 柳 綠

◇津大夫、土佐大夫、古靱大夫は所

謂文樂座の三巨星である、斯界の盛衰を双肩に荷ひ、斯道の向上、發展の爲めには其中心となつて活躍せなければならぬ立場にある、従つて彼等三巨星の責任は重い、身に餘る重任を感じて常に善戰奮闘する彼等には夫々異つた藝風を持つてゐる。即ち其違つた藝風こそ聽客の興味の中心となり、ソコに渾然たる藝術味が湧いて來るのである、今彼等三巨星の藝風に就て聊か愚見を述べて見やう。

◇津大夫は正々堂々たる其語り振りに絃下らしい貫祿を具へてゐる。難辭ではあるが決して小策を弄せず、地道に語り込んで行く中にはキツト或る何物かを掴んで見せる寫實でもなく、また技巧でもなく知らずくの中にある感激を催さしめる、滋味のある語り振りでもいふのだらう、其滋味、津大夫の生命は熱息と、それから湧き出づる滋味によつて完全に保證さ

れてゐる、今度の「沼津」なき、此人の作品として世話物の中では傑作の一つである、前半よりは後半に於て寧ろ面白味が深いシツクリ、語り込む中に一種の魅力を伴ふのは有繋に斯道の第一人者として感服に値するものがある。

◇土佐太夫は織巧な節廻しや、優婉な咽喉が此人の身上のやうであるが決してさうではない、それよりも此人の勝味は時代物、世話物の區別なく、どんな人物でも器用に語り消化して見せる事、第二は時々用ふる（大抵世話物に於て）寫實味が堪らなく深刻に印象される事なきを此人の長所として推賞したい、世間一般に土佐太夫はいゝ咽喉だといふが全くは地合まじりよりも言葉に於て天稟の才氣が閃めくやうだ、大隅系の人として、純寫實本位の語り口は往々世話物に於て意外の奇功を納める、一方今度の語り物「十種香」なきは高雅に

して優艶、瑠璃盤上に玉を轉ばすが如き圓轉自在な節廻しに聽客を恍惚たらしめるものがある。

◇古鞞太夫は津、土佐と較べて、時代なり修行に於て遙かに後輩である、従つて堂々たる貫祿にも缺ければまた優婉な情味に搔痒の感を覚えぬでもない、けれども着實に一步步を踏み堅めつゝ、細心の注意と努力を拂ひながら終始する此人の語り振りに是一種の威嚴をさへ認められる、咽ぶが如く訴ふるが如き戀々たる情味はなけれども清楚にして鮮かな白蓮の風情は偲ばれる、一寸の隙も與へず、克明に語る中には餘韻こそ残さぬが、決して弛緩は感ぜられぬ、今度の「河庄」なき、治兵衛よりも何よりも孫右衛門の眞實味に生々しい眞剣さが滲んでゐる。

◇津太夫の合三味道八は技巧本位の人である、押へたツボの情味に得もいへぬ妙感を與へる、所謂わざ

師である、足の長い憾みはあるが、此人として一藝風をなしてゐる限り、矢張り名人として立てらるべき人であらう。

◇土佐の合三味吉三郎は四段目物が得意である、此人の音色も憎らしい程やえてゐる、中吟の妙音は蓋し他の追従を許さざるものがある。

◇古鞞の合三味清六は剛健にして織巧先代清六の名を辱かしめざる新進の若手である、霸氣のある撥捌き、快刀亂麻を斷つ怖らしい臂力、古鞞も恰好の戀女房を得たものである。



# 木偶珍説見聞

吉岡鳥平

## 一、親孝行

如何に技神に入るとした所で、元來が非情の木偶を扱ふのだから、争闘などは可成り敏活を缺ぐ。そこで昔あつたと云ふ親孝行の物乞ひのやうに人形の胴体を太夫の前に結びつけ、手だけは太夫自身の手を出して刀や槍を握り、人間と變らぬ烈しい立廻りをやつて見物を驚かした事がある云ふ。そして、六法踏んで花道を引込んだ事も有るさうな。

大阪では久方振りの劇場出だ。二の替にこんな型でも見せたら面白からう。



## 二、竹田奴の向上

『兜軍記』の竹田奴とか軍卒とかは、黒衣の一人遣ひが定法だが、今度の中座では出遣ひになるさうだ。

虐げられたる民衆の権利を擴大して地位を向上せよと云う近代人の叫びと運動とにつれて、我が竹田奴諸氏も中座出演を機として、即ち此所まで権利は擴大され、地位は向上された譯だよく見給へ。あの、苦惱の泣き笑ひを忍びした、おぎけた顔が、民衆のカリカチュエアそのもの、やうな竹田奴諸氏の顔が、思ひなしか心から喜悦に崩れて居るやうではないか。





淨瑠璃話し

伊賀越道中双六

山上貞一

(一) 沼津の驛棒鼻の場

東海道で繁華を競ふ沼津の驛も、宿はづれは矢張り寂しかつた。野面にはかけ箱が、そして松の並木がまばらに街道に添ふて走つてゐた。「一せんめし、御休息所」に筆太に書いたかけ看板のかけに葎子張りの茶店が、まづしい床几を二脚並べて客を待つてゐた。いまでも茶を呑んでゐた百姓達は、遠く聞ゆる在所眼を耳にしつゝ、黒谷の上人様がお十念をお授けになるさいふので殊の外参詣人の多い話をし合つた。然し佛いちりばかりしてゐて七堂伽羅を置いてはつまらんさ笑ひ乍ら家路についた。

浮世渡りはさまざまに草の種かや人眼には荷物もしやんご供廻り泊りを急ぐ二人づれも呉服屋の十兵衛は半合羽に三度

笠、下男の安兵衛に荷物をかつがせて出て来た。旅から旅へミ渡る商人の常、つひ先きを急いでこゝまで来たが、十兵衛は大事の用をさんご忘れたこゝを思ひ出した。そこで安兵衛に太義ながら一走り頼んだ。しかし口上で間違ひがあつてはミ矢立を取り出して白紙にすらくミ用件を認めた。

「わしはそろくミ先へ行く程に、委細は手紙に認めて御座ります。宜しくお頼み申します言ふて来てたも」

「へい、左様なら一走り……」

ミ荷物を擔いだまゝで驅け出そうとするのを十兵衛は止めた。荷物は自分が持つさいふのだ。安兵衛は軽々ミまたの道へミ引返した。十兵衛は茶店に憇ひながら日あしを見あげた八つ半にも間がない。それに今朝から七八里歩いて来たこゝを思ふた。空の雲あひは曇りそうにも見えた。そろく立たうミする眼の前へ、稲むらかげより現れたのは雲助姿の平作である。竹杖を握りしめる手先にも老のわびしさが見ゆる。「もし旦那様、お泊りまで持たして下さりませ」

平作は今朝から一文の錢の顔を見なかつた。お慈悲に持してくれ、賃銀もそちらまかせぢや言ふ。十兵衛はつひ持たす氣になつた。茶店を出て一足歩くと、雲助は息杖して休みながら天氣のよいこゝを喜んだ。二肩いては息をついだ。

舞臺は街道筋へミ移りゆく。松並木の蔭に、辻堂も見ゆる老人の靈助はのろい足にも似ず達者な口を開いた。向ふの立場に鱈の名物があるこさや、その鱈汁のうまさこいつては舌をなめづつた。十兵衛は靈助の氣の毒な足もミに氣が引けたいくつぢやミ聞くミ、もう七十に手がミとくミいふ。

坂下道の爪先上り、木の根につまづきひよろ／＼ミ平作はミつたりミ倒れた。十兵衛は驚いて用意の藥を親指の傷口へミ塗つた。藥は奇妙な程利いた。十兵衛は荷物を自分で擔げながら、老人の手をひかんばんかりにいたはつた。

『いゝ／＼、めつそふな事仰しやりませ』

ミ言ふのを止めて十兵衛は、

『是はまた堅意地な、駄賃はやるだけ進ぜる。おれが氣休めじや。先へ行んせ』

平作は足もミ危げに先へ歩く。後から十兵衛は荷物を擔げつゝ痛々しげに見遣つた。

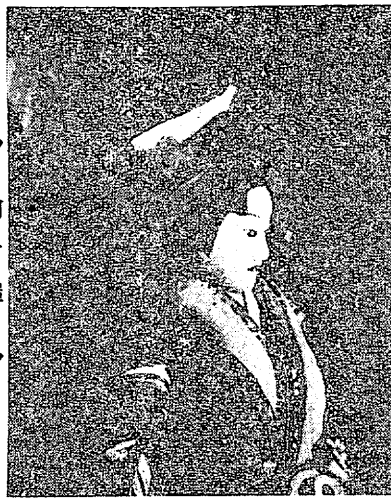
そこへ菊の花の咲き盛つた折枝を持つて、平作の娘お米は出て來た。

『おゝ、ミゝさん』

『お米ぢやないか。わりやきこへいた』

その日は母親の命日であつた。孝行な娘はせめてその花を

佛壇へ捧げやうミいふのである。平作は結構な旦那のお蔭で荷は持たずいかいお世話になるこを告げた。お米は父親に旦那を私しの内で休んで貰つてはミ啼いた。平作はむさくるしい家と思ふて躊躇したが、十兵衛には可憐なお米の姿が目についてゐたので休まして貰ふミ十兵衛から進んで言つた。



◆……阿古屋……◆

『あゝ／＼、

そんなら私

しは内を片

付けて置きせ

う。旦那様

お先へ』

十兵衛は愛

想よく駆けて

ゆくお米の後

姿をうつミり

ミ見惚れてみた。じみな裾から燃ゆるやうな蹴出しが尻ら

／＼ミもつれた。あれはお前の眞實の娘か、母御がさぞ可愛

がるであらう。母が死んだ、そんなら親子さし向ひか。こり

やわらい、ミ十兵衛は手を拍つた。そして家の所在を教へて

貰ふなり、彼は足弱な老人には待ち兼ねて、ミつミ先へ急い



だ。

『申し、旦那様、でもお早いおみあしぢやな』  
平作はあきれながらぼち／＼と足を引づつて行く。

### (三) 平作住家の場

壁は破れてゐた。荒木の釣佛壇にまづしい蠟燭立、竹の花活に菊の花が明るい。半簀戸の門口に杜若が咲いてゐた。一つ籠に土の釜、土瓶の口さへ缺けてゐる。平作とお米の住家である。彼女は不意の客來に頭／＼かつく手拭も軽々し簀籠をもつて掃除をしてゐた。荷物を肩に十兵衛はうか／＼とこその門口を過ぎて行かうとする。後からよぼ／＼とついて來た平作はこれを止めた。そして一寸待つてくれと自分だけ家に這入つた。老人の氣早やで平作は内は掃除してあるか、庭が掃いてないで慌て出した。

『わゝ、靜かにして下さんせ。折角結ふた髪がほこりになるわいな』

お米は美しい腫をきり／＼あげた。十兵衛は招じられるまゝに容きなつた。まづ今日の駄賃に二百文を平作に與へた。そして供のものが尋ねて來るからきて、笠を門口へ釣らして置いた。

『これ親仁様、よい子を持つてごんすの、ほんにまあ美しい……』

こまで言つたがあは門邊の杜若にこをよせてごまかせた。平作は老人の愚痴に初對面の十兵衛を掴まえて、娘が眞仕事をして我が身をかまはず孝行を盡してくれるので、自分もじつ／＼して居られず、せめて三文なりと思つて雲霧を働いて居る／＼語つた。お米は始めてのお方にきたしなめた。平作は先刻の指の怪我を思ひ出して、その藥の奇特なこを今更に驚いてよろこんだ。十兵衛は藥の大切なるものであるこを告げ、金瘡にはいか程の深傷でもその場で治る大妙藥だが、仲々に手に這入らぬこを言つた。お米はふ／＼思ひ當るこがあつた。父親の恩人なれば一日二日止まつてくれと言つた。平作は此のむさくろしいせまい不自由な家に、首を振つたが娘は聞かなかつた。

『不自由するは旅の習ひ、殊に娘御が折角の心ざし、いつこの内でこめて貰ふわいな』

十兵衛は洗足をこつて上へあがつた。戸外では下男の安兵衛が汗たら／＼と後を追つて來てゐた。目印しの笠を見て内へ這入る／＼驚いた。なん／＼いふ穢い家だ。十兵衛は安兵衛の戻つて來たのを喜ばなかつた。空模様も曇つて居れば降らぬ

中に急ぐ安兵衛を主人顔して怒りつけた。安兵衛は仕方なく腰をおろした。そして出された茶を呑む眞似をして、その門口に捨てた。

『あいたく……』

十兵衛は俄かに腹痛を起した。驚く安兵衛を呼びつけて、斯う痛みがひ

びなくてはいけません。足も行かれぬお前は一足先きへ荷を持ち吉原の俵屋で宿をさつてくれ。自分はこゝで今夜は宿る言ふ。安

兵衛は仕方なく荷をかついだ。いつもは一寸休むのにも綺麗な所へ行く主人が今日に限つてこ小首を傾けた。その眼前にお米の美しい姿がうつた。はあ、よめた。安兵衛は微笑しつゝ、街道を吉原へ急いで行つた。

安兵衛が去つた。聞いて十兵衛の腹痛はけろり治つた。



◇…重 忠…◇

處が平作親子には心配が来た。酒を出すにも酒はなかつた。門口でひそひそと見兼ねて十兵衛は酒もいらぬ、白米もいらぬ、有合せの麦飯が大好きちやと言つた。親子はほつこ救はれたが、また難題が外から襲ふて来た。家主の太郎兵衛と古手屋八兵衛と米屋の喜兵衛の三人がごかくご借金を取りに這入つて来たのだ。三人は口々にこ茲に到つてはこ奮慨した。平作はさうぞもう二三日の所をばこ平謝りに詫びたが許されなかつた。はては古手屋の中に家材を賣りつぶさうさいふ。家主は一年八ヶ月の家賃一貫百文を、米屋は八百文を、古手屋は七百文を、夫々に借金の高を主張した。平作お米を門口に突出して、市の始まりと吐鳴つた。十兵衛は驚いた。おまへ方はさうしやうとするのぢと訊いた。金ですむこなら三分金を投げ出した。三人は驚いた。そして喜んだ。言はるゝまゝに家の掃除をするやら、門口に立たしてある平作親子を内部へ連れて這入るやら、打つて變つた愛想まで口々に叩いて去つた。平作は重々の厚意に嬉し涙を淨べた。

『時に親仁さん、こなたの正直を見込んでちこ無心がある』

三十兵衛は娘お米を自分にくれい申入れた。

『見れば凄はづれさいひ利發な娘、商人の嫁には極上々の羽』

二重地、得心して下さるなら、嫁入の拵らへ料もおいて行く。これよい女房、面目ないが眞實、私しやこなさんに惚れました』

處がそれを聞いて娘は怒つた。客をたつた今から去なしてくれと言ふ。平作はそれをなだめて、此の娘は女房さういふてはやれぬ譯があると言つた。では御亭主があるのかと聞かれて、へいと言つた。十兵衛はがつかりした。高い麥飯を喰つたこを後悔した。今から直ぐに立つ立ちかゝつた。親子は必死になつて止めた。では詮方なく敷かれた薄いふさんにもぐり込んだ。枕もこの一枚屏風がまた穢ないものである。

いとしんく／＼と聞ける。お米は一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱することも浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消に残る、佛壇の灯もほそ／＼と嵐にふつと、灯が消わたのである。お米は先刻父親の指の傷が奇妙に癒つた薬のこを思ひ出した。そしてそつと十兵衛の枕もこに忍んで、印籠を握つた。やれ嬉しやと思ふ間もなく、ばつたりと倒れる處を十兵衛に掴まへられた。

『盗人が這入つた。親仁さん／＼』  
平作は竈の埋火を附木にうつして差出して驚いた。盗人は

我が娘である。

『わ、娘おのれはな。何の因果で此のやうな情ない氣になつた。親はその日暮しの雲助でも人様のもの盗むさういふ氣は出さぬ。天魔が身入つたのか、己れには一人の兄があらば、廻り／＼と聞いたら肩身がせばむさ氣がつかぬか』  
さわつさばかりに泣きくづれた。十兵衛は盗つた仔細があらうと娘に優しく聞いた。

『恥しながら聞いて下さりませ、言替した夫の名は申されぬが、私しゆへに騒動が起り、其場へ立合ひ手きづを負ひ……』

一時はよかつたが此頃また痛み出したのでいろ／＼看病をするが旅の空まで印がない。つひ身の廻りの櫛。簪まで賣りつくして了ふた。處が最前金瘡の妙薬のこを聞いてつひ悪心を起して年寄りにまで苦勞をかけたさ、女はよ／＼泣きつゝけた。

『けふや死のうか、明日の夜は我が身の瀬川に身を捨てゝ思ひしこも幾度か』

然し老人に嘆きをかけては、生きのびて來た女の心中を知つては、十兵衛もうなづくこがあつた。

『そんならこなたは、江戸吉原で全盛の松葉屋の瀬川さんち

やな」

瀬川太夫が夫の手疵を癒そうに薬を盗む心は解つても、十兵衛にはさうも仕方がなかつた。その薬こそ他人の預り物であつた。十兵衛は膝を直して、平作に向つた。お米の兄のこまが聞きたいのだ。平作は語つた。お米の上に男の子があつた。二つの年に養子にやつたが、其親の手を放れて今では鎌倉で屋敷方へお出入りのよい商人になつてゐるさういふ。捨てたも同前な子は我が子であつて我が子でない。恰度今年は二十八、鎌倉八幡の氏地の産れ、母はさよ、初名は平三郎。こ書付が守袋に入れてあるさういふ。十兵衛はあつち驚いた。平作こそ實の父親、お米こそ實の妹である。いま貧困な有様を見て自分が金を渡そうとて親子知り子を知つては受取るまい。十兵衛はいろ／＼考へた末、平作に石塔の世話を頼んで大枚な金を渡した。

「娘御、今夜のこまは案じるこまはない。老年の親仁様随分こまに大事にして下さるせ。鎌倉に居る兄御が聞いてごのやうに嬉しいか。随分ごまに氣をつけて、人の命に芭蕉の露ほきはかないものはごんせぬぞ。さらば」

三十兵衛は闇の街道を急いだ。平作親子はほつこした。お米は十兵衛の寢所を片付けて印籠を拾つた。はて見覺わのあ

る模様さよくよく見れば、澤井股五郎の印籠であつた。驚く手先きに金子守袋が燭つた。平作は取上げた。

「何んじや、金三十兩、此書付は慶長九年の誕生、鎌倉八幡氏地の産れ、初名平三郎に母の名はさよ、こりや我が子に付けてやつた此書付……」

◇……岩 永……◇



てゐる兄に委細を聞かうさういふのだ。平作はそれは娘では行かぬ、年こそ寄つてゐるが平作が理を非にまげても聞く、お前はついて聞いて、敵の在家を聞くまでは、木陰に忍んで立聞きせい。三枚橋の濱づたひ拔道をして追つゝくさういふ。  
「父さん、杖ぢや」

こ暫くは寧ろあきれて見入つてゐたがお米は印籠を手に駆け出そうとした。父親は止めた。此の印籠を持つからは敵のありかを知つ

『お、合點ぢや』

平作は老ひの足を踏みしめて急いだ。續くお米は池添孫八に出會つた。お米は仔細を告げた。敵の在家が聞ける歡喜に二人は勇み立つた。そして轉げるやうに平作の後を追つた。

### (三) 千本松原並木の場

白妙の富士の高根は夜眼にもしるく見ゆる。東海道は千本松原の並木だ。提灯を提げて十兵衛は暗い街道を急ぐ。『おい、おい』とそれを追ふて息杖の音も苦しく平作は走つて来た。忘れものを持つて来たと言ふ。

『お立ちなされた後に、印籠に此の金子……』

十兵衛の驚くの見つゝ平作は、其日暮しの雲助にくれるのにも譯があれば、貰ふのにも譯があるが、義利あつて是はお返しをする。その代りに、訊きたいことがあるといふ。十兵衛はうなづいて、一夜泊るも何ぞの約束、その頼みといふのは聞返した。お米と孫八は、木蔭で片唾を吞んで忍んだ。

『此印籠の持ち主の名が知りたいばかりにさまざまの流浪、娘を廓へ出て憂難、是が知れるに本望成就、此上の悦びはございませぬ。おまへ様も親御があらば、子ゆへには愚

痴になるものと思召されて願ひを叶へて下さりませ』

平作は頼んだ。十兵衛は親の心を察しながらも、是ばかりは言はれぬ。其方の人が大切なら又こつちも大切、在家が解つても命がなうては本望は遂げられまい。まづ印籠の奇妙薬で疵養生をするがよいと道理を解いた。それ程お慈悲があれば一層此印籠の持主を言つてくれ平作は聞きすがつた。十兵衛はもし敵の薬で疵が癒つたと思へばまさかの時に切先がにぶる。薬は拾ふたものにして疵養生すればよいと柳に風を受け流した。平作はしほく、歸る言ひ出した。さらばと別れるを見せて、十兵衛の脇差拔取り、老の胸へぐつと突立てた。

『やあ、こりや何ゆへの自害……』

木蔭では娘がいまにも飛び出そうとするを孫八はしつかま掴えた。平作は十兵衛の手にかゝつて死ぬと言ふ。

『こなたとおれは敵同士、志津馬殿に縁のある此親仁を殺したれば頼まれたこなたの男は立つ。此の上は情けには平作が未來の土産に敵の在家を聞かして下され。ふしぎに始めて逢ふた人、さうした縁やら我子のやうに思ふもの、何のこなたにひけをさらすやうな事、此の親が、いや此の親仁が致しませう。是が一生の別れ、一生の頼み、聞かずに

死んでは迷ひます』

「手を合せて平作は十兵衛を拜んだ。子ゆむに迷ふ親子、誠の親に始めて逢ひ名乗りもならぬ子三が義理の仕納めであつた。十兵衛は口を開いた。

「ごに誰が聞いてゐますまいものでもなければ、十兵衛が口からいふは、死んで行くこなさんへはなむけ、今際の耳によふ聞かつしやれ。澤井股五郎が落付く先は九州相良、道中筋は參州の吉田で逢ふた三人の噂。親父さの、ごうぞ

これで勘忍して下され』

平作の颯ひは叶つた。木蔭の二人は確かに聞いた。最早や思ひ残すことはない。早う苦痛を助けてくれさいふ。親子が一世の逢ひ始めでこれが逢ひ納めである。

『親父さの』

『悴かい』

『逢ひたかつた』

『顔が見たいわら』

悲嘆にくるゝ涙をふりはらふて十兵衛は別れ去つた。富士の裾野、千本松原には間もなく黎明の色がほのくゝさしそめた。

—【をわり】—

【大阪中座出演文楽座番組】

轟式三番叟

座員四十二名の總掛合ひ

人形は三番叟 榮三  
文五郎

前 本朝廿四孝

桔梗原より  
狐火まで

景勝下駄屋のどん  
駒 太 夫

勘助物語のどん  
叶 太 夫

十種香のどん  
土 佐 太 夫

人形は  
吉 三 郎

八重垣姫……榮三  
勝 頼……玉治郎

謙 信……辰五郎

中 伊賀越道中双六

沼津里の段  
津 太 夫

道 八 夫

人形は  
平 作……玉藏

重兵衛……榮三

およれ……文五郎

次 心中紙屋治兵衛

北の新地の段  
古 朝 太 夫

人形は  
治兵衛……榮三

小 春……文五郎

孫右衛門……玉藏

切 檀浦兜重記

阿古屋 土 佐 太 夫

重 忠 津 太 夫

岩 永 静 太 夫

榛 澤 古 朝 太 夫

人形は  
阿古屋……文五郎

重 忠……玉藏

岩 永……辰五郎

榛 澤……玉七

# 木偶は語る

鳥江鐵也

——或夜、文樂座のせまい人形部屋の片隅に、一人遣ひの木偶人形が五つ六つゴロ／＼と捨てられたまゝ轉がつてゐました。十六燭のタングステンの光がこの木偶共にあわく照つてゐます揃ひも揃つて粘土を地面へブツつけた瞬間に出来る様な不作用な顔揃ひ、それも鼻のかけた奴や、顔面に小さな穴のある奴や、甚だしいのはづんべらぼうの顔もあるといふ、とても満足なものぢやない、それが寄つての話を私が聞いたんです。彼等は異口同音に云ひました「俺たちはいつまで竹田奴や百姓の仕出しばかりしてゐなければならぬだらうか」。糞生意氣なそんな顔してぜいたくな奴だと思ひ乍らじつ／＼と耳を澄ますと彼等の仲間の一人が怒鳴つた……

「俺は何んでこんな木偶に生れて來

たんだらう……………」

するこまた他の一人が

「本當にいつも／＼下らない役ばかりさせられて、それに同じ人形でも三人四人も掛つて遣はれる人形もあるのに、俺等は一人遣ひでヒョコ／＼出たかと思ふと見物にドツミ哄笑される。本當に何んでくだらない役廻りだらう……………」

「こぼす、みみんなは口にぶつぶつ何か不平を云つてゐる。するこまこからこもなく優しい女の聲がするではありませんか…。木偶共はシーンとしてみんなちよつぱり不揃ひについてゐるほんの形だけの耳をすましました。

「私は今夜も悲しいの……………」

目鼻の美しく備つた上に、顔には光澤もあるがひびく蒼ざめた色をしてゐる阿古屋の遊君が人形部屋の女王の室に立つたまゝ木偶共に聲をかけたのです。木偶共はたゞ黙つて重なり合つたまゝでゐました。

「お前たちさつきからこぼしてゐる

不平を聞きましたが、私の目から見ればお前たちは餘つ程幸福だわ、私は澤山の人間共に手取足取、その上お前たちなら鳥渡ですむ所を長い間手摺に出て泣いたりわめいたり振、それを見て人間のお客様が泣いて御座る、お前たちはお客様を泣かしたりなんかしない、たゞもうお可笑な格好だなぁと哄はれるだけ、それを思へば私の罪の深いのに毎日悲しくさせられますわ」。

この大きな太夫鬚の阿古屋は兩手をだらり／＼垂れたまゝさう云ひました、成程木偶の一人が云ひました。四五人の人間様にかつぎ出されて魂もない手をあげたり首を振つたり、腹の減る肉體の疲れるものごしたら幾等我々の方が氣樂か判らないと判つた奴が云つたのである。それに自分たちは悲哀の對照としてではなく、笑の對照として文樂座でも重大な運命を荷つてゐることを自覺しました。——こいふ風な夢を「劇壇縦横」の編輯に疲れて寝た晩見たのです……………」。

# 人形芝居

## 成瀬無極

世界の人形芝居に就て考證的に記述してあるレエムの書を傍にして蕭々君の譯したシュトルムの「人形つかひ」を讀んでゐるうちに、妙に感傷的な心もちになつて來た。下の座敷では二人の小さい娘が銘々人形を添寢をしてゐる一軒おいて隣りの二階では若い澄んだ聲で何か地唄を歌つてゐる。撥音が冴えて快い旋律が夏の夜を靜に流れる。地唄の三味線は太棹と細棹との間を行つて、一種の寂<sup>ひび</sup>艶<sup>び</sup>を持つてゐる、しめやかな、引き入れられるやうな気分になる。若い美しい盲人なごに相應しい音楽だ。姥櫻と云つた味がある。地唄はさうしても京のものだ。

「人形つかひ」には人形芝居に對する少年の歡びと、はつかに萌へ出た幼い戀と、不思議な再會と、老人形つかひの死と、それと殉死した道化人形「カ

スベル」の最後とが詩人獨特の美しい筆で描かれてゐる。人形を思ふと楽しい少年の春が懐かしく浮び出る。永劫に失はれた樂園だ。萬象を人間化さないではおかない子供にまつて人形は無二の友だ。子供は人々に自分の夢を吹き込み、小さい胸に宿る喜びと悲しみを頷かつ。西洋の人形芝居は大體に於て子供を看客としてゐるやうだ。道化人形カスベル及その眷族が第一の人氣役者となつてゐるのでもそれがわかるゲエテを始め、多くの詩人は幼年時代に於いて人形芝居の熱烈な愛者であつた。「ファウスト」もその搖籠を人形芝居に持つてゐる。

文學の人形芝居はその様式上の特色を別にして、内容が嚴肅であり、主として悲劇的である點でも世界に類の無いものと思はれる。これは淨瑠璃の獨立的な異常な發達に依るものであらうが、之れを人間よりも先づ人形に應用したところに日本人の美意識が現はれると思ふ。自然模倣よりも象徵化、様

式化に赴く傾向が認められる。これは日本の美術、舞踊を始め生花、盆石などの繊細な技術にも現はれてゐる。そして最も渾然として古典的美を成すものは能樂である。

「文學座」の名は今や世界的になつてゐる。歐米の客で趣味と教養を持つ者は「能樂」「人形」を見逃がさないであらう。そして、皆人形の精巧な仕掛と絢爛な衣装と、微妙な律動とを驚嘆し、「秘密裁判の役人めいた覆面の人形つかひを一種神秘的なものに思ふ」「運命」そのものゝ姿のやうに感ずるのでもあらう。然し、これ等の外客の大多數は淨瑠璃の音楽的美を鑑賞することとは出来ない。「感情が高潮に達するときは形容し難い聲で吼え、狂ひ、啼き、叫び、扇子で高價な漆塗りの見臺を無慈悲に叩きつける」太夫と「犬の啼き聲を思はせるやうな」懸聲をする絲子が何を表現してゐるかは到底十分理解することが出来ない。「説明」に依て内容の大體を想像し見ても、曲調の妙味



は感得し難い。従て、彼等は専ら人形を凝視し享樂する。吾々の場合は之に反して淨瑠璃と人形とを二重に鑑賞するこゝが出来る。それは特權であるが然し、前者が獨立的の價値を持つてゐるだけに屢々興味が分裂するこゝがある。丁度西洋の歌劇に於けるやうに聽きに行くのであるか、觀に行くのであるか、心もちの上に統一が失はれ、興味が二元になつて、纏まつたものを掴めない嫌ひが生ずる。人形芝居の方は動くものが人形であるだけに、これを生かす淨瑠璃の方に重味があつて、比較的調和した感じを持つてゐるが、それでもなほ自己の想像が生み出す假象界を舞臺よりも美しいと見る人、または形の世界を第二、第三として専ら音樂的美に酔はうとするものは素淨瑠璃の方を好むであらう。この點では、能樂は役者三地方、囃方との關係が内面的に調和し、後者は從的位置を取つて、歌劇よりも遙かに純一な印象を與へる。これは強ち歌劇に親しみが薄い結果か

らではないと思ふ。

人形芝居の興味が分裂する傾向を持つのは、淨瑠璃と人形とがそれぞれ獨立した高い價値を有する證據でもある前者は、吾々にさへ往々不快を感じさせるやうな誇張した奇怪な騒音を含んではゐるが、情意を奥底から揺り動かし、美しい過去の夢の世界へ引き入れるやうな不思議な魅力を持つてゐる。専ら感能にのみ訴へる氣分本位のものではなく、内容が嚴肅な切實な人生に立脚してゐるだけに、音樂としては不純であるかも知れないが、それだけにまた種々雑多の要素を含蓄し、變化に富み、全人格を動かす力を持つてゐる。又人形は全然受動的で歌曲と人形つかひとに依つて生かされるだけに、生きた人間には困難な動作をもし遂げ、傳習的の美しい型をそのまま保存することも出来る。演劇としては効果が薄いために省略せられた部分なきも、人形芝居に依つて完全に演出せられ、始めて全體の聯絡を知る場合が屢々ある。

何よりも、自然靈化の昔を偲ばせ、素樸古雅の味を持つ點で人形芝居は懐かしく愛らしい。莊重雄渾な能樂が貴族的藝術として尊いやうに、平民的藝術の典型として人形芝居は永く保存せられる價値があると思ふ。この意味に於てわが文樂座の如きは國寶と等しく社會的協力に依つて維持せられ、更に傳統的美を傷けざる範圍に於て大に改善し、擴張せられるべきものだと思ふ。今のまゝでは太夫は鬼も角も人形つかひの後繼者が絶えはしまいかさいふ懸念さへある。常に國寶を迎へるだけの設備が欲しいと思ふ。そして、これは一般民衆の理解と同情とに依る外はないと考へる。獨逸の學都ハイデルベルグにはチンクといふ特志家が居て二十年來人形芝居の復興に盡力してゐることを友人S君から傳聞した。また有名な温泉場バーデン・バーデンの瀟洒な人形舞臺は餘りに近代化した羅馬の人形劇場よりも遙かに雅致があつた。そこでは古傳説に従つた「ファウスト」

なごを演じてゐた。更に伯林ではヴェーデキンドの作を人形芝居として演出する企てがあつた。表現派式の舞臺装飾を用ひたら必ず相當の効果を收めえたらうと思ふ。惜しい事に經費の關係で中止になつたやうだ。獨逸あたりの婦人が人形を愛好するところは想像以上である。私は日本に於ても近代的人形芝居が起るべきだと思ふ。然し、文樂座のそれは全然獨立のものである。こゝは言を俟たない。文樂座の藝術は飽迄傳統的美を維持し、發揮すべきである。その上に私は人形芝居に對する趣味の復活を普及を希望するのである。そして、今丁度さういふ機運に向ひつゝあるやうに私は思ふ。

## 笥堀の事

### 新谷誠水

近頃の大阪では「廿四孝」の横藏が最もすれば忘れられ勝ちになつてゐるが多見藏等が残した名型等も、大阪では

因縁深いものゝ一つであります。然も當然人形仕立の筈の横藏が、近頃の文樂でも、あの籤の鸚鵡の立廻りが粗略すぎる様になつたのは、愈々大阪から横藏を勘當した様になつてしまやしないかと思はれますが、此正月の文樂も大變な略し方でした。通を云ふ様ですが、あの立廻りの型をして、物の本で見たり頭に残つてゐますのを縫合せて見ますと、總てが人形通りの好みで、特に「兄ぢやぞ」から叩き合つて横藏の方が蹴になり、ドッそれを落される、蹴られて尻餅を突く、慈悲藏が打つて来る途端、蹴の先を踏返す其柄がピンと立つ具合などは手順過ぎてゐて人形でないと思はれないと思ひます、それから白旗の件について、箱争ひの素手の撮合、これ等も、人形では總體に無理が利いて、見馴れた型と面白いのですが、この邊なんかは恐ろしく抜いてあつた様に思はれます。文樂の廿四孝で、外に思出した事は、これもこの正月でしたか、確に古報だと思ひますが

信玄とはつきり、しんげんくくしんいつた様ですが、あれ等も、武士言葉しんぶんし訛つた方が眞實の様に思はれます。大體この太夫のは、勢がよすぎた嫌があつて、いかに横藏にも、あの甲州の雪は耐えられぬ所がある筈がこの人のは、寒さがちつとも氣にならない様な所もあつた様に思ひますが、今度の廿四孝には、そうした缺點がきつと正されてゐる事と思ひます。

兎に角廿四孝は、私が一番好きなもので勿論傑作ではありますまいが、院本式の極端といふ所があります。終りに此作の年代紀を調べますと明和三年正月十四日の作で作者は近松半二、三好松洛、竹田平七等の連名で五節十八段になつてゐますが見せ場は十種香に勘助内しがありますまい。

### 人形淨瑠璃

矢澤孝子

うつそ身のうちの奥處おくぐわのもつれさへさやかにひびく糸のしもしさ

# 文樂人形雜感

## 京極利行

×

東京歌舞伎座に今夏出演して豫期以上の成功を見たのが今度の中座出開帳の最大原因をなすものでせう。然し興行者が標望して居る如く大衆文樂座をより以上に接觸させる爲めの一方法として、この中座出開帳が實現したのだとすれば、小生は劇場に中座を選むだ事はまだ徹底した方法ではないと考へます、角座か辨天座、でなければ浪花座等の中座よりは入場が手軽で済む劇場で、値段——今度の中座の觀劇料がどの程度のものかは今日までの所では知られ得ませんが、おそらくは文樂座での時よりは高價でせう——も文樂座よりは安價なものとして、そして大衆に呼びかけてこそ、始めて大衆により多く接觸する爲めの方法として徹底したのではないでせうか。

×

東京では太夫よりも三味線よりも人形が最も好評だつたやうです、今度も多分さうした結果になるを考へますこれは現今の文樂座が太夫、三味線、人形三者を比較した場合、人形が一番に光つても居り又揃つても居る事も一つの原因でせうが、それより以上なさうした結果を生む理由として考へられるのは次ぎの點です。

一體、義太夫を聞いた場合、それを聴き別けるなり、又味つて聴くなり、さもかく太夫の語り口に興味を持つて接する迄には相當の修養——趣味上の豫備智識——でも云ひませうか——が重要なものです、所が人形の動きを見るには義太夫を聴くよりも解り易い場合が多いのです、云ひかへれば義太夫を聴く爲めに持たねばならぬ程の豫備智識が無くとも人形は解るに云ふ事になります、この事實が人形淨瑠璃に接つた場合多くの人が太夫、三味線を賞讃するよりも、先づ人形に拍手を惜し

まない結果を産むのだと考へます。

然し（これは一種の入れ言に過ぎませんが）それ程に解り易い人形の動きも、解り易いのはたゞ食ひつきだけのことで、動きの一つ／＼を又人形の頭の一つ／＼を興味を持つて味ひ、又研究して行くにさなるを、却つて義太夫を味ひ又研究する以上に困難な事のやうです。

×

今の文樂座の人形遣ひには出来るだけ寫實に人形を動かさうとする——早く云へば人間の動作を其儘模して人形に移さうとする——傾向の人の、その反對に人間の動作を其儘に直輸入する事はなるだけ避けて、ごんな動作にする人形だけが見せ得る美を描き出す事を根底に置いて居る——云ひ換へれば人間界だけの判斷を持つてしては随分馬鹿々々しいと思へる動作をして、それで居てちゃんとその場合々々の人形の心持を表して居る——傾向の人の、あります、この兩傾向のいづれを可

も云へません、又見る人の好きにくでその可否も容易に決定は出来兼ねる問題でせう、然し僕だけの好みから云へば後者の方を好みます、現今見る人形の動きの内にも、或はその淨瑠璃が書きおるされた當時には純寫實の動きであつたものも勿論含まれて居る事です、然し當時それが純寫實であつたらう、然し云つて現今でもそれが純寫實は動作である云へないのは言を俟たない事で、又事實はさうした動作を古風な物と考へ、同時にさうした動作が初めて人形に直輸入された時から現在までの長年月に、多數の人形遣ひの手を潜つてその間に人形特有の動きとして完成された點にだけ、その動きの面白さを認めて居ります。

x

現代の時相を描いた新作淨瑠璃でも創作されて人形方面にも一エボックが來たのならさもなく、さうではなくて現今の如く古い作品を繰り返し上演する以外には人形淨瑠璃保存法として

別に良案も浮ばぬ現代にあつては、人形の動きに餘りに無反省に今様の人間の動作を直輸入する事は考へ物ださ考へます、この寫實、非寫實の二方面も人形だけの側から云へば女の人形がこそすれば寫實的な動作に走り易く、男こそに敵役、道化役、荒事役等には古風な動きが、より豊富に残つて居ります。

又、客受けと云ふ點からすれば、寫實味の多い動きの方が受け易いやうで古風な人形獨特の動きから來る味は、一種皮肉な動きとして觀客からも見逃されがちのやうです。

x

能でも、能の面はぎの役所の面にしろ、表情のはつきりせぬもの、なるだけぼつとした感じのものがよいのだと聞いたことがありますが、これは面を被つてしまへばその人物の表情が面の持つ表情一つに固定してしまふものです、所がよしやその人物は大體に於いては憂ひに沈むだ女性、或ひは萬身勇

氣に満ちた武將武神であつたにしても全段中の或るくだりでは憂ひに沈む女性も時に笑ふ場合もあり、武勇の人物でも時には孤影淋しく自分を顧みる場合も有るものです、さうした場合に面の固定した表情が憂ひの女の表情ならその憂ひの、又武將の男の表情ならその勇しさの、いづれにしろさうしたその人物を代表する一だけの表情を餘りに強く表して居るさ、その表情ささうした笑ひ 女の時の)淋しさ(男の時の)の場合の心持さに或る矛盾が生じないさも限らないのです。その矛盾を防がんが爲めに、ひつきうはその方面の目的で能の面があれ程に、無表情の表情でその主人公の大體の心持だけを語るやうに仕上げられたのださ考へます、所が人形の頭に就いても人形遣ひは能の面と同様のこと、頭の眼、口鼻の表情が餘りきつい|||この意味ははつきりして居る事だと思ひますが|||のは悪いと云つて居ます、その理由からするさ、古く出來た頭程優秀な

ものが多いやうで、新らしい頭は表情がさうもはつきりして出来上つて居ります、古い頭の優秀なものに模した頭を現在でも文樂座では、人形師に彫らせて居りますが、これに就いても一人遣ひは新らしいものは眼、口、鼻の、云はゞ顔全體の表情がさうもきつく仕上りがちで、昔物程にぼうつこして居らぬこ語つて居ります。今度中座では沼津の久作、お米、切の阿古屋の阿古屋、重忠等に確かに優秀な頭を使用するこ推察して居ります。八重垣姫、お種も悪い頭ではありません、次ぎに人形の衣裳です、これに就いて文樂座で昔から傳はつた頭ミ衣裳を全部引き取つた松竹の庫には〇い衣裳で珍物や珍品(よゝ意味で)なのが豊富に残つて居るのださうです、僕はまだ實地に見た事はありませんが、然し、さうも古い衣裳は地ミ色ミの關係からか今出来の布よりも重いものが多いので人形遣ひは餘り好むで使用せぬミか聞きましたそしてよく新衣裳を作らせるさうで

す、これも僕の好みから云へば古い物に人形なり又語られる義大夫の年代なりに相應はしい衣裳が多いやうで、今出来の布で新調した物には、時々、柄や色染料の加減等で随分、現代味のかつたものもあります、今春か文樂座で「戻り橋」を出した時に綱の着た衣裳なさは近くで見ると、切れ方がひさいので相當見づらいものでしたが、舞臺で見ると古い味があつて如何にも「戻り橋」ミ云ふ景事淨瑠璃に形の物だつた事を覺へて居ります。

x

次ぎに現今の文樂の人形遣ひでは玉藏、文三、文五郎、榮三、が特筆すべき人でせう。

玉藏は男、女、立役、敵役、道化役の役でも一通り以上に遣へる人ですここに腹一つで持たねばならぬ、動きの少ない人形に絶へず魂が籠つて居てそれで人形を活かす點ではこの人に越すのは一寸無いやうです、「二月堂」の良辨を品の高い僧正ミして遣ひ活かし

たのは今年での傑作でした、勝頼もこの人が遣ふミ十種香の場で、餘り動かずに居るのに、八重垣姫ミ濡衣ミに括まれて絶へず光つて居るから妙です、道化役もこの人の得意の壇上のやうですが、女役は動くこころにはソツはないのですが、立役に上手な事が邪魔するのかが人形にうるほひが不足するやうに思ひます。

x

文三は全く變つた味を持つた人で、主に立役、敵役、道化、老爺等を遣つて居ります、女形や、色若衆へ久我之助、主計之助等)や治兵衛、忠兵衛等の二枚目は絶対にこの人のものではありません、總體に品の少ない頑古の所のある人形ですから「彌作鎌腹」の七太夫、沼津の「平作」ミ云つた範圍の人物に傑作があります、女形では「日向島」の女郎屋の婆が傑作でした、今度もこの人が平作を遣ひでもすれば、面白い平作を見せるものミ期待してよいでせう。

文五郎は女形専門の人です、女らしい色氣ミ艶を豊かに人形に出す點ではこの人の右に出る人はまア無い云つてよろしい、役者の女形の舞臺はおろか、ほんこの女子の物腰にも見出せぬ程の美しさ色氣ミ艶さはこの人の人形に常に見出せる事です、それに「帶屋」のおはん、「日向島」の糸籠等の小娘を遣つた場合、人形に若々しさの出るものも妙です、難云へば色氣がかつので品が乏しくなる點です、その爲めに梅川、小春、阿古屋、お米等は傑作ミ許せても武家のお姫様やお奥方役には品の點で食ひ足らぬものがあります、今度の中座では沼津の、お米ミ阿古屋ミに期待してよいでせう。

榮三は女形を主に、立役を縦に遣つて居る人です、女形には文五郎程の色氣はありませんが不思議この人の人形には品が保て、居ります、今度もし八重垣姫を遣ふしたら、仕事では文五郎程に行かずもお姫様らしい品ミ

色氣ミ艶さでは申し分無し八重垣姫が見られるミ考へます、この人もゆく／＼は玉藏のやうにきの方面の役にも向く遣ひ手になるやうに考へられますが、現今のこの人に、特筆すべきは、忠兵衛、治兵衛、傳兵衛等の二枚目ミ主計之助如き色若衆ミに獨特の色氣のある事です、沼津の重兵衛をこの人が遣ふしたらその軽い町人らしい色氣をミつくり味つてやつてほしいものです。

以上四人の外に若手に簀助、扇太郎ミ云ふ有望なのミ、古老格で辰五郎ミ云ふ腕の確かなのミが居ります、又中堅ミしては玉次郎、政龜、玉七も大切な遣ひ手です。

## 我が劇場

島華水

藝術の流行は正に走馬燈の如く、廻旋復歸して止まぬのである。我々は藝術ミ共に生息し、且つ共に循環して行

くから、少しも變遷の経路を知らずには過ごすが、永遠の距離ある視點から全景を觀測し得たなら、宛も惑星が太陽を廻るミ、略同様の運行を成すこゝが分らう。

人生の一片を拵ぎ取つて、些しの虚飾も無く其の儘に舞臺に上ほさねば、劇の劇たる價値は無いミまで一方に偏倚した寫實主義は、今日凋落の悲運に墜ちて、浪漫的の人形芝居、其の技巧が漸く西土批評家の趣味に投じて來たのも、亦た其の一例ミも見られ得るでは無いカ。

傀儡劇の起原が悠遠な事は今更喋々する迄も無く、東洋殊に印度に於ては數千前の往古頗る進歩した、此種の劇が既に演舞せられた、南京操、瓜哇のウエーヤン、又た我が人形淨瑠璃の如き、各獨特の方面に發展して、精妙なる藝術に向上した事も、茲に記述する要は有るまい。

西洋に於ける人形芝居の趣味は、然らば如何が云ふに、先づ「文藝復興」に前後して同じく伊太利に淵源し終に全歐を席卷するに至つたのである、頑是無い児童や低級な民衆を主な顧客とした結果、社會の水平面に現はれることは少かつたが、實は此の趣味の上に歐洲藝術が建築せられたのでは無いかまでに思われる、夫れ程廣く流行もし夫れ程深く人心に沁入したのであつた。乃で巡業の人形師は至る所の街頭に喝采を博し、郊外には人形の定席も出來た程（時には藝術的な人形芝居も作られたが是は例外としても）である。只に夫のみでは無い感銘し易い児童等は、只に之を觀るに満足し無いで、自ら人形を舞いせて興じたのである。

× ×  
當時の児童等は如何なる方法に因つて、自分の人形芝居を作つたか、第一に必要なのは舞臺に使用すべき一枚の稍や厚き板であるが、之に斜に左右へ下る屋根形の二枚、兩側の壁板、バ

ツクに用ゐる正面奥の木板は是だけ揃へば充分な譯である。舞臺板の左右兩側に三四の圓孔を一行に穿ち、之に風景さか室内の裝飾さか、バツクの畫面に相當した一部分を畫いた、下端を細くした縦長の小板を挿入して、其間に人形の通路を幾つか作れば善い。前面に幕を張る装置が有れば更に完美する譯だ。

此の如く極めて簡単な構造に過ぎ無いから、小器用の人ならば容易に自ら作製することも出來、且つ需要の夥しかつた爲、児童の小遣錢で買得る位の廉價を以て、玩具店で賣捌いたものだ。舞臺のバツク又た兩翼の景色板、人形なども英國の諺に「並は一片色刷二片」云つた通り極めて低廉にものどつたかくて児童等は容易に自分の劇場を作ることが出來、觀覽料徴收の苦心、資本金や當局への懸念も無く、自ら茲に人形を演舞せしめ知らず／＼の内に藝術趣味を涵養せしめて行つたのだ。

× ×

誰しも經驗する所であるが、海外大家の傑作を味ふにも、只に之を推考朗吟するよりも、邦語に翻譯して見る方が、頗る痛切に其の眞義を感得することが出来る。之と同じ道理で只に他人の舞わす人形劇を見るよりも、自ら人形を舞いた方が、何の位適切に登場人物の性格を理解することが出来るか分らぬ。又た活世界の事物は頗る複雑であるので眞相を捕へるに困難を感じるが、人形芝居の如き簡単な舞臺面に抽象して見るに、却て頗る深刻に性格の急所を穿つことが出来る。夫はレンズの中に收める景色の一部分は特に目立つて覺えるに一般で、又たコンラツドの海事小説に見るやうに洋上に孤絶した人物の性情が、他よりも一入は精細に解剖せられ得るからだ。又た顔面の表情を缺如し（若しくは之に乏しい）傀儡をば宛も人の如く働かしめる爲には、演奏者の工夫が數倍も必用になつて、木偶の一舉手一投足にも無限の苦心を要求する結果、人類表情の方

法を指織に觀察する習慣を養成する。加ふるに人形劇の演奏には、多く古曲が伴ふのであるが、後者は人形を舞はずと共に之を朗吟する爲に、自ら律呂の秘密三昧に到達することが出来るのである。

× ×

かくして所謂ゆる藝に遊んで、歐洲の兒童等は其の藝術的良心を満たして居たが、物質文明の勃興に伴ひ寫實主義が跳梁したので、人形芝居なるものは一圖に陋劣な娛樂として排斥せらるゝに至つた。倫敦に散在した數千軒の人形劇用具屋は次第に減少して今日では殆んご全滅して仕舞つた。ウエンスロー氏の研究によれば幸に一軒だけオアシスの如く残つて居る云ふ。乃で同氏は「<sup>エグジビション</sup>各人の劇場」を題する一座を作り、近代の科學を適用して照明も相當に出来る人形芝居の簡單な製作方法を材料、染色、諸般の方面に涉つて極めて平易に面白く叙述した。かくして自ら作つて自ら舞はしむる人形芝居

の流行を促して居る。實際に此の如き「我が劇場」で木偶を遊んだならば、皇上藝術の趣味を味ふことが出来るので、國民の教化に裨益する所は多大であらうと思ふ自分は時節柄廣く此の書物を江湖に薦めたい。

家庭に於ける人形劇の趣味は今日英國には衰へたが、然し倫敦でも公園の綠蔭等で往々、パンチジュデーの人形を見る位であるから、此の民衆藝術は決して滅びだ譯では無い。轉じて大陸諸國を歴遊して見るに、兒童達が之を遊ぶ習慣は英國なみに衰頽しては居らぬ様だ。會てヴェニスの或る古書店で操座の臺帳を十冊程、奮發して手に入れた事がある。十九世紀後年の日附が見えて居るが卷尾に押捺した各市警察の檢印が特に面白く感ぜられた。其の後絶えず此の方面に注意を怠らずに居るに、今日でも此の種の脚本が何百も無く刊行せられて、每冊十錢以内の廉價で博く發賣せられて居ることが分つた。(尙面白い事には寫本の臺帳が數

十種も無く同じ書目内に載つて居る)恐らく伊太利の幸運な兒童等は此等の脚本によつて、古劇や樂曲を歌ひつゝ、人形を舞はして居るのであらう。

序に云ふが人形芝居の舞臺、用品等大小種々あるが、各相當の廉價で發賣せられ、其の人形も多くは木偶で、極めてグロテスクな雅味に作られ、服裝の如き地台は廉木であるが、絢爛たる色彩を添えて鋭敏に視意に訴へる様に出来て居る。勿論此の人形の製造所で前記の臺帳を併せ賣るのである。自分は此の傀儡劇が西洋正劇の發達に多大の影響あるを信じて居るから、舞臺、道具建、人形の數十種を、臺帳と共に取寄せ時々引出しては研究して見て居る。

× ×

外遊中に自分の觸目した傀儡劇は云ふに、大西洋横斷の渡航船、フランス號の人形舞臺で、殆んご毎夜數曲の演奏を見た、事並に以前三菱の紐育支店に居られる本田君の東道でトニー



ザルグの藝術的傀儡を一覽した事等であるが、前者に於ては演奏家が單獨に數個の人形を操りながら、各役の臺詞を調子と變へて歌つた技巧と、後者に於ては人形の高さが西洋には殆ど稀な程で殆ど芝居のにも伯仲するとも思はれ、随つて見る事の出來た動作の鮮明な表情とが、永く記憶に留まつて居る。

× ×

傀儡劇が優れて居るか、正劇が進んだものであるか、其の優劣は、各自に特長が有り又た同時に弱點が有るので一概に判決を下す事は出來まい。ゴルドン、クレীগの逆境に立つたなら、誰しも俳優を棄て、木偶を尊ぶであらうが、是は必しも一般の標準にはなら無い、只だ正劇の性質を究めて其の起原に遡るに、何様しても先づ人形劇の特質を會得せねばならぬ事が明瞭となつて來る、即ち其の研究は必要となつて來る。

殊に日本の正劇は平面的から立体的

に發達して來たらしく、又た人形淨瑠璃との關係は彼此交互的に影響したらしいから、参照すべき他山の石たる西洋人形芝居の研究は決して度外視してはならぬのである。

西洋の正劇は始めは立体的であつたが、後には極端の平面的に傾いて十九世紀に及んだが、此頃では又た、立体的に移らうとする傾向が著しい。藝術の逆轉？、元運の循環？、兎に角甚だ面白い現象である。

## 文樂へのラヴ

### 服部嘉香

わたくしは文樂讚美者の一人である本當の心持をいへば、一つの戀愛關係である。

よく考へてみる、わたくしは文樂が好きなのだらうか、人形芝居が好きなのだらうか、文樂が好きだといふところは人形芝居が好きだといふこゝ

同類項らしい。

精神分析的推論を加へるに、人形芝居が好きだから、人形そのものも好きらしい。従つてまた、人形にシムボライズされる「女」もいふものも好きなのだといふこゝになつてしまひさうだ。

幼年時代には年上の女とよく遊んだ伊豫の松山の鐵砲町で育つたのだが、そこへは人形遣が時々やつて來た。細長い箱を二つ擔いで、町の向ふから歩いて來る姿を見るに、すぐに驅け出したものだ、荷が下ろされる。箱の中から人形が取り出される。子供には理解は出來ないが、何かしらリズムのある口狀を言ひながら、人形遣は二つの人形を二つの箱の上に立て、手ぐらゐを動かしてくる。わたくしは首をかしげて一心に見入つてゐた。人形遣が去つてしまふ。人形の持つ悲しい運命まで去つてしまつたといふやうな淋しさが幼い心に殘される。その女はあの男に殺されてしまふのではないか、こ

やるせない心を抱いたまゝ半月ぐらゐ過ごす。また同じ人形遣がやつて来る。「え、この處は遠州濱松在……」なご語り出して顔なじみの人形を取り出してくれる。「や、あの人形はまだ生きてたぞー」ご、わたしはほつご安心したものだ。

淡路へは、去年ご、をごし二度遊びに行つたが、見たいご思つた源之丞の人形芝居は、折悪しく興行してゐなかつた。文樂のよりは粗悪で原始的らしく想像されるのを、かう東京に落ちついてしまつては、見に行く機會は遂に得られないかも知れん。

◇  
文樂を見に行くご、いつもわたくしは、幼年時代の人形遣を思ひ出す。人形の發祥地である淡路の源之丞にあこがれる。

しかし、完成された藝術としての人形芝居は、勿論文樂以外にはない。人形芝居への戀愛が文樂への戀愛ご同一なるごに少しも不思議はない。

◇

文樂藝術の要素は、太夫、三味線、人形の三つだごいはれる。これは皮相の考だ。文學ごして立派に存立し得る淨瑠璃ご、それを靈活する太夫ご、それに魂を入れる三味線ご、それらによつて動かされる立派な人形ご、人形に生命を注入する人形遣ご、背景ご、建築ご、この七つの要素に分解しなければならん。これらが少しの破綻も見せず、律動的に調和した全體ごしての藝術的表現ごなつて、初めて文樂藝術は完成する。そして、その中心ごなるものは人形そのものである。

いろ／＼の素材が、素材ごしての分立的印象を出来るだけ殺すごころに、文樂の全的靈活が完成される。演劇や能樂ごは違つた持ち味がある。総合的印象徴味である。シムボリズムの極致、表現化藝術の偉大、それを味ふ人ごのみ初めて文樂の價値が解る。この深い鑑賞に味到する人ごのみが初めて文樂を語る資格を持つ。

◇

太夫に名人がないから文樂は滅びるごいふのは、半可通の言である。人形遣の名人の凋落を悲しむのはまだ一理がある。攝津や越路の役後はだん／＼駄目になる、なごいふのは、姫義太夫ご文樂ごを同じやうに見る人の假論だ。東京の明治座で大隅を聞いたごがある。名人の有難味は勿論ある、越路はごう／＼聴く機會を得なかつたが、聲量の出し方、世話にも時代にもあてはまる藝の修練なご、實際尊敬すべきものがあつただらう。しかし、それは大隅なり越路なりを孤立的に考へてのごごで、文樂藝術の一要素ごしては、あまりに圖抜けた名人は却つて文樂の藝術味を偏した方へ導いてしまひはないか。

一體俗衆が、不可通が、また藝術家らしい顔をしたがる人々が、太夫に名人がないなごいふのは潜越な滑稽である。身の程知らずの侮辱である。名人でないなら君達はごうしてやらうごい

ふんだ。

老眼鏡をかけて新聞の相場欄まで見て暮らす人や、カフエで横文字の酒を飲んだり、女給にあたりをつけて得々こしてゐる人や、小器用に顔を作るこいふのでいつぱし藝術家氣取をする人や、藝者から習ひ覺えの清元ぐらゐでやにさがる人々が、文樂には名人がゐない、もう駄目だね、なご言つてるのは寧ろ悲惨だ。太夫の語り口はそれ／＼に獨自の味がある。その味を出すまでの、出してから後の太夫の若心修煉、その眞剣な努力さ、相場記事やカフエを比較しては困る。太夫は藝のために一生懸命だそれだけで絶大の尊敬を拂ふ價値はある。俗衆の御機嫌を取るために名人ならうごはしてゐない。名人にならうごして名人になれない死にもまさる苦心をして俗衆から名人と言つてもらへない、その悲痛な精神に泣いてやることは出来ないのか。名人がないこいふ前に、津太夫や土佐太夫や古靱太夫や、靜太夫や源太夫や

あの完成を完成への努力に對して涙ぐましくなり得ないのか。

津太夫には津太夫の藝術がある。土佐太夫には土佐太夫の藝術がある。古靱太夫には古靱太夫の藝術がある。源太夫や靜太夫も大成を期して自分の持味を出さうとしてゐる。叶太夫も、相生太夫も、越名太夫——美聲に安心してはいけません——も、駒太夫——あなたは可愛い人だ——も、みなしつかり修行を積んでゐる。相場記事に喜悲したり、女給の一顰一笑に苦勞したりする人間さは雲泥の差のある藝術の人々だ。かういふ人々の、孤立的な藝道を批判せずに、人形さの呼吸や意氣さによつての出来榮えを、虚心に讃嘆したいものである。

素淨瑠璃の興行は、これらの人々を藝人扱ひにするものだ。文樂の太夫はいつの時も人形を離してはいけない。淨瑠璃、義太夫だけを味ひたいのならば蓄音機でいゝ。娘義太夫でいゝ。



三味線は、わが國の音曲として實に立派なものだ。音彩、音色、音階、音調の複雑な味は、ピアノなごの比ではない。殊にそれが淨瑠璃そのものゝ基本的階調を爲すものとして、獨得のものである。

わたくしは、この方面は大いに暗いごういふのを、世俗のいはゆる名人にするのか解らないが、人形を見てゐる時は、人形の動きさ太夫の音聲を同時的印象とするが、撥の音は、さかく忘れがちである。時々舞臺から床へ眼を轉じた時に、三味線の努力にちつこ注意をする。團六は何だか淡々さ、すべてから離れてゐるやうに思はせるが道八でも清六でも吉三郎で吉彌でも太夫に活を入れよとしてゐるやうな表情をしてゐる。手を取つて歩かさうとするやうな愛撫、腰を押して登らせようとするやうな心持だ。

旦那いふ者の淨瑠璃に合はしてやつたりお座敷で一席勧めたりするのは恐ろしい破綻さなりはしないか。傭兵

的根性は困る。自分の藝術は、何分の功利的觀念に支配させないといふ意氣藝術の良心を持つてもらひたいものと思ふ。

歌舞伎座で感心したのは、左衛門であつた。まだ若々しく、おぎ／＼したところはあつたが、頭を使つてゐるころは誰にも見えたことと思ふ、友次郎の器用は定評がうるのではないか。十七八の青年だらうか、藝道に没入しようとしてゐる意氣は、悲愴であり、また嬉しい。歌人さか詩人さかいはれて得意になる文學少年なご、この若い二人に對し正に愧死すべきである。

◇

文樂の人形は、文樂座に昔からあるものを使用してゐるのだと、吉野主任から聞いたことがある。構造上の精巧は、今日は大に進んでゐることだらうが、人形師（製作者）なきには、時代が進むと共に名人氣質は薄くなつてゐるのではないか。薄暗い人形部室を通るに、人形が活きて飛びかゝりさうに

思ふこともあらう。魂のこもつた人形それが文樂では必要なのだ。

しかし、人形はごこまでも人形である土を主材としたデクに過ぎない。それに生命を與へるのは、いふまでもなく人形遣である。わたくしは、太夫と三味線に重きが置かれ、人形遣いが軽く見られてゐる従來の習慣を氣の毒に思ふ。輕視されてゐるために、自尊の念も薄く、職人氣質のやうな、なげやり氣分になつてゐる人も多からう。これは大變な誤である。玉藏、文三、榮三、辰五郎、文五郎なきは、さすがに藝術家を以て任じてゐようが、舞臺を離れると着流しの細帯に腰手拭、舞臺を勤めさへすれば、あまはのほほになる人も少くないだらうが、さうぞ人形遣も太夫と同じやうな自覺と精進を持つてもらひたいものだ。文樂の消長は人形芝居の存亡は、一に懸つて諸君の將來に在る。さうです、器用に遣ふでせう——の程度では困る。舞臺を馬鹿にするから、用もない黒ん坊が、のそ

り／＼と愁嘆場に出歩いたりするのはないか。（これは是非やめてもらひたいものだ）。抜いた刀を左手遣の黒ん坊がたらしごぶら下げてゐたり、足遣がこそ／＼話をしかけたり、ふしだらがかなり眼につく。三人がすべて一心となり、微塵の油断もなく、自己を尊敬して懸命に遣つてこれ初めて人形に魂がこもつて来る。文樂藝術の、人形芝居の焦點は、人形遣にも在るこの自覺の下に、日夜の工夫をするぐらゐの藝術的良心を持つてもらひたい。

玉藏、文三は、大味を見せることに於いて立派なものだ。辰五郎は老體のせいもあるが、疲れ切つたやうな表情を見せるので氣が抜ける。文五郎のうまさば天下に定評がある。老巧の上ないところはあつたが、少しあて、氣味のあるのが残念だ、たゞ人形をひたすらに愛撫し、いたはりながら遣つてゐるあの精神は、後進の學ぶべき點だ。天才榮三！さわたくしが書いた時に、土師清二君から叱られたが、わたくしは

榮三に惚れてゐる。性來器用な人でないらしいが、何を遣つても凄いほどの眞剣さで、舞臺一杯に精神を漲らしてゐるあの態度と努力は、必ず大きなものを生み出すに違ひない。器用でない人の良心的努力ほご尊いものはない。わたくしは、將來の文樂が榮三を中心にする時代が來ることを疑はない。

背景は、もつこ正確にいへば、文樂の舞臺裝置は、また文樂獨得のもので簡素なものを自在に變化さして行く手際なごはうまいものだ。舞臺裝置そのものにも象徴的手法を取入れてゐるが面白いのだ。人形に對する可憐味と、舞臺裝置に對する可憐味とが、實に巧みに調和されてゐる。たゞ道具方が、わざとらしく身體を露出し、横着さを見せるのは困つたものだ。遣手と道具方が時々幻滅的の行動をさる、あれを絶対にやめてしまひたい。

建築は現在及び將來に於ては、文樂の一要素でなくなるだらう。それでい

よ。太夫の音聲に對する考慮を加へるこの外には、傳統的な味を捨て、差支ない。見物本位にすることを第一として差支ない。歌舞伎での文樂の成功を考へてみても、建築は決して文樂の價値を動かさしめない。

だらしのないことを、ずぬぶんだらしく書いたものだ。御迷惑かも知れないが、文樂衰亡論について、もう少し書いてみたい。

文樂衰亡論は半可通のいふことだ、さわたくしはいつたが、必ずしもさうでない。一般の人がぼんやり雷同的にさう言つてゐるばかりでなく、學者や識者もさう言つてゐることは事實だ。しかし、これは、文樂を現状のまま、さう考へるからのことで、わたくしは飽くまで文樂發展論を唱へたい。

こし夏、東京歌舞伎座へ、文樂座が引越興行をやるについて、わたくしは『都新聞』に「文樂の藝術」を題する追憶に兼ねての歡喜の文を寄せた。

それに對し、大阪朝日の土師清二君が「文樂は亡びる」を題して、わたくしの文樂講義論を否した文を『都』に出されたので、わたくしは更に「文樂講義」を書いてその所論を駁しておいた。

その衰亡論によつて代表される俗衆の意見は、第一に、文樂には名人が無くなつたから滅びるさういふのである。それが誤つてゐることは前に書いた。

第二には、文樂は藝道物で、太夫。三味線。人形遣。さにも多年の鍛鍊がいる、それに堪へ得る人は追々に無くなる、さういふ意見である。高野斑山博士も『歌舞伎』第四號で、「恐らく將來に出る偉人は、必ず他の新しい劇に向つて邁進して、木偶劇なごは過去のものとして顧みないことであらう」を言いつてゐる。これは有力な意見には違ひないが、しかし單に想像である。さう思ふのである。だから、さうでないかも知れないと言へるのである。

太夫・三味線・人形遣の努力にも拘ら

す、その到達し得る名人境は遙かに遠く、物質的に恵まれることも極めて？少いこともすれば馬鹿々々しくなつてだん／＼やらなくなるだらう。これは一應の道理である。しかしながら、進んで巡查になる人もある。山間のトンネル際の旗振りになる人もある。名人を志して團扉の繪書きで終る人もある。好き好んでこの道に入らうとする人が、將來絶無きは、決して保證し得るここでない。内部の格式もか感情の争ひなきをせず、「後進」の養成に勉めるやうになれば、たしかに前途は有望である。地方巡業を盛にすれば、また地方での希望者も出て来るだらう。見物が、世間が、もつと本當の同情と理解を以て待遇したならば、だん／＼名人も出て来るだらう。わたくしはこの點をあまり悲觀してゐない。

能樂が衰微を極めた時分に、現在の能樂會主池内信嘉氏が、二十年計畫の挽回策を立てた。謠曲は放つておいて

も滅びはしないが、囃方はだん／＼凋落する。能樂振興の第一着手は囃方の養成に在る。いふ點に着眼して、二十餘年前にまづそれから始められた。やがて天才川崎利吉氏の如き人が出た。十年後には能樂は立派に復活した。それにつれて謠曲や仕舞が、二十年後の今日では、一般の家庭にもはいつた。

この見當が必要である。人形芝居は能樂の情を同じうする。淨瑠璃淨瑠璃は放つておいても全然衰亡するところはない。組織的に、三味線と人形遣を二十年後を考慮して養成するところが必要である。

國家の保護を以て保存してもいゝ文樂の人形芝居を、松竹合名社は獨力を以て今日まで支へて來た。松竹は劇界の松竹のやうに言ふ人もある。しかしその松竹が、損をしながら今日まで文樂を持ちこたへて來たことは偉いせねばならぬ。決してそろばん一式では出來ないことだ。大阪の名物を、日本藝術の一精華を尊重すればこそ、か

なりの犠牲を拂つて來たのだらう。表彰に値する。

わたくしの大阪在住六年間、よく文樂を見に行つたが、いつも、もう松竹が投げ出すのではないか、はら／＼したものだ。その翌月に文樂へ行く。まづほつとすする。白井氏に對して、ちよつとちぢりつきたいやうな愛情すら感じたものだ。

地方巡業の成功は、その苦心に對し恵みが來たのである。新しい興行政策を教へられたわけである。劇の宣傳をうまくすればますます發展する。その上で、さうぞ三味線や人形遣の養成にいふことに注意してもらひたいものである。

第三の衰亡論は、文樂に入りが少ないといふのである。なるほごこれも事實だ。しかし、年中同じ文樂座で興行してゐながら半分の入りを、日曜や紋日にはもつと大入を見せてゐるのは、人形芝居に魅力があるからだ、『都』にも

書いたが、鴈次郎の芝居でも年中中座で開演してみたまへそれこそが明きになるだらう文樂はがら明きにならないだけがえらいのだ。しかもここの地方巡業によつて大に得るところがあつた以上、文樂の前途は實に洋々だ。

第四には、淨瑠璃の内容が狭い義理、人情の世界を出ないから、駄目だといふ説がある。これは文樂の一番大きな弱點だ。さうかきいつて、山憲事件や須磨の仇浪事件を新作としてはおちこはしになる。文樂は、あくまで元祿情緒を以て終始しなければならんが、文樂の價値は、わたくしの考をいへば、その内容よりも表現に在る。表現藝術としての象徴味に在るのだ。それを味つてくれる人のある限り、文樂はこの點からいつても決して減びない。

第五には、文樂を見るには、相當の素養、準備が必要だし、娛樂にならぬから駄目だといふのである。これこそ俗衆の俗見で、娛樂のためならば外にいくらでも行くところがあるからそち

へお出でなさいである。文樂を娛樂とする人は文樂を殺すのである。文樂を立派な藝術だき考へるには文樂を活かすのである。散文時代、アメリカニズムの時代である現在では、文樂は減びるさいへば一廉の見識だき俗受けはするだらうが、やがて時代が詩の時代に人間性禮讃の時代に移つた時には、文樂は燦然として光を放つだらう。この點からも、わたくしは決して悲觀しない。

◇

もういよ／＼書きすぎた。委しい意見は、大正十四年七月二十六日、二十八日、三十日、並に八月十九日から二十一日までの六日間の『都新聞』で見て頂きたい。いづれはわたくしの著書に入れるだらうから、それによつて見て頂きたい。

太夫は眞剣だ。三味線も眞剣だ。人形遣も眞剣だ。最高、最善の努力を綜合して、曲線と詩との世界が現出される。情趣の藝術だ。夢幻の藝術だ。力の

の藝術だ。愛の藝術だ。一流の俳優の舞臺を見て、それほどの眞剣さはない『元祿時代の文學はすべて甘いものだが、人形芝居としてされた時代の記録は偉大だ。端的にその時代を示してくれる藝術！ われ／＼はそれを失つてはならぬ』と、わたくしは都に書いた失つてはならぬではない、今や將に再生の機運に棹さしてゐる。わたくしは夢にも文樂を見る。次の東京興行の時までに、學者、文士、詩人を包含する文樂後援會を作つておきたい。松竹よ、白井氏よ、さうぞ文樂を捨てないで下さい。高野博士よ、變なこきは言はないで下さい。京都の藤井紫影博士よ、もつと文樂を愛してやつて下さい。

(一四・九・二三)

矢澤孝子

さびれゆく世にも攪まづかたりつぎ  
語りつぐ子は大和男の子ぞ  
淨瑠璃にこもる涙はうつそ身の  
正しきこゝろの流れなりけり

## 大坂人の義務

三宅周太郎

文樂は何さかして雑持してほしいと思ふよく人は文樂は亡ぶと云ふ。が、それはちよ早合點か、或は、輕蔑からではな。實際、津太夫の紋下披露に語つた「熊谷陣屋」や、昨年六月の「沼津」なら天下獨歩である。いや、名人越路太夫があつた。此二つなら兎に角津太夫に譲つた形であつた。さう云ふ物によつては馬鹿にい、津太夫があ、有望な古朝がある以上、決して文樂は悲觀すべきでないと思ふ。が、恐しいのは大阪では文樂の價値を知らぬ點である。更に文樂が文樂自身を知らぬらしい點である。畢竟、それは大阪が比較的個性のない土地で、あ、云ふ獨立的な性質のものな認める目がないからであらう。が、文樂は文樂として一生懸命にやつてゐるのは間違ひのない話である。そしてもし文樂が一生懸命であるなら、即ち太夫が美太夫に一生懸命であるなら、恐らくこの藝人よりも一生懸命の筈である。それは義太夫位命がけの稽古の入る藝術は外にないさへ云へる位だからである。で、もしさうであるなら文樂こそ、もつと堂々自信を持つてゐてい。昔から云ふ音曲の司だが、それは同事に藝事の司とも云へやうから。立派な「天職」を知つて、本統に今の中に一生懸命に

なつて貰ひたい。そして大阪人は何さかして文樂に絶えず刺激を、情熱を與えてほしい。馳くとも文樂を自身を、諦めさせたり、消極的な引つ込み思案に陥らしてはいけない。もつと具體的に云つて、前途のある古朝太夫を生かすも殺すも大阪人の責任ださへ云ひたい。古朝が越路になれるかなれないかは、單に、周圍があるか、悪い周圍があるかに係るさ云へる位だと思ふもつと強く云ふなら石にかじりついて古朝を越路に仕上げるのが大阪の一部の人の義務ださへ云へると思ふのである。

自分はこのやうに義太夫なるものを尊敬してゐる。芝居は藝術、義太夫は宗教さ云ふのが私の考へである。藝術なき國は寂しい。その意味で大阪の劇壇がよくなつてくれるのは望ましいが、同様、或はそれ以上に宗教なき國は寂しいさ云ふよりもまつくら聞である。信仰なくては弱者は此人生に立つてゐられない。その意味で、宗教さ云へる義太夫は、大阪で一種の「税金」をかけてもいい、から眞剣によくなつてくれるのを望む。

矢澤 孝子

大和なるこれのしらべは日照らす

一つの世までも傳へてしがな

## 民衆と接觸せよ

大江素天

(一)

大阪における卿士藝術としての人形淨瑠璃の歴史的感興を、實際に觀賞する場合、頭のなかへ加味して見るほゞ私にはその道の智識がなく、また癩癩持の私として、滅多にそれほゞのゆゑりを持ち得ないでゐます、そこに私ひざりしてこの第一問に答へ得る面白味がありません、全く他人さはし——公的には交渉のない私ひざりのことですが、何かの参考になるかも知れないから書いて見ませう。

私の父は非常な淨瑠璃好きで、死ぬさきも『淨瑠璃音居士』といふ戒名をこしらへておいて死んだほゞですから、一生貧乏の中にあつても、且つ弾き、且つ語ることを忘れませんでした、その癖さちらも思ひきり下手だつたが二十曲は語り得たでせう。田舎にあつた



時分は四五十人の弟子が互身代りに、野良仕事が済むと押かけてきて、臺所から中の間口の間、奥の間、女部屋まで一ぱいになり、見臺、飯臺、碁盤、將棋盤、足繼、炬燵檣、机、鏡臺、ありとあらゆるものを引張出して見臺にかへ、齒糞だらけの齒をむき、唾をブツ飛ばす、瘦馬の嘔き、狼の遠吠、象の溜息、猿の號泣、とても大變な光景で、茶を汲むのに母が閉口する、勉強するのに私が閉口する、チヨイ／＼袂を引張られるのに妹が閉口する、眠れないのに祖父母赤坊の弟が閉口する。

でも私は閉口しながら好きなところがどこかにあつた。見えて何日か知らず淨瑠璃の文句が耳に泌み頭に泌み、へボな時代小説を書いたり、或年は引張出されて、出來秋の村芝居に『安信晴明倭言葉』の赤染衛門姫になり振の袂をふつて何と黄な聲を出して見たこともあつた。

その頃、父が文樂に對する渴仰は、何と形容してよいか、とにかく大變な

もので。延寄ることの出來ない簾一向ふの貴いあこがれにして、ジリ／＼しながら遠いところから仰いでゐたやうです。そんなところから、私も何か知らそんなものゝやうに思つてゐた、こいふだけでは説明が足りないが、淨瑠璃界の平民さもには近よることのできぬ貴高な階級として尊崇してゐたこいふやうな意味合のものでした。

大阪へ來てから職掌柄、社の玖疏盤君に伴はれて、幸にも何回か文樂を覗き得るやうになつたのですが、初見參の時から、父に對してデント／＼やられる時に抱いてゐたこ同じ不平と不満を綺麗にのけてしまつて、ひたすら純な感激にひたるこができなかつたのは何故でせう。私の觀賞は父のデント／＼以上を出なかつたのであるから肥えてゐたこいふ理屈は立たない。

惟ふに、いつも私たちは世間的に最高藝術を喧傳されるものに對して、殆んど無條件に、絶對價值を持つものこいふ盲目的な信念に支配されながら、

すなほな態度でその門を潛る、そして胸を轟かせながらそのものが眼の前に現はれて來るのを待つ、その時には純淨な自己のある靈感に魂の凡てを支配されてゐるこいつてもよいでせう、こころがいよ／＼眼の前に現はれて來たそのものを見るこ、大抵の場合、想像の「價値」から何パーセントか吃度引下げられたものがそこに出て來てがつかりさせられる、即ち現實暴露こいふやつです。文樂に對しても、私は現實暴露こいふほごではなく、大椽の品格、越路の調子、伊達の涼しい聲、津太夫南部、靱、源、鍛の語り口、どれも成る程エライと思ひ、死んだ父の手下だつたこを痛切に知り、紋の人形、玉の人形、全く入神の妙技であるこウツトリしてしまつたが、でもどこかに満されぬものが重過ぎるほご残つてゐます。

何故だらうと考へて見る、實際つまらないんだらうかと思ふがさうではない、綜合してあれだけの古典的藝術、

どこに眞似手もある譯ではない、だが満たされない心持ちは何度觀賞を重ねて見ても同じである。その度合は濃くもあらず薄くもならず、初見參の時と同じです。

父によつて養はれた、文樂に對する憧憬は、こんな調子で、幸か不幸か、最初から破れてしまつたのであるが、さりさつて嗜好、愛着がそれによつて滅するさういふのではない、好きなことは依然として好きなのである、そして不平不満は同じ程度で持續して行くのです。

全體私たちは現代生活様式の大部分が科學の恩惠による規格の中に否應なしに嵌めこまれてゐる。旅には軌道の上を正しく時間通りに駛る汽車、電車空を仰げば空氣を螺旋形に穿つて進む飛行機、横を向けば養を積み上げたやうな建築物、前を見れば自動車、夜になれば電燈、かうした單調ではある正しい、そして信頼し得る雰圍氣の中に息づいてゐるので、凡てのものに對し

ての觀念が直線的になり易い。それが文樂のやうな古典的郷土藝術のやうに對したさきにも影響するのではあるまいか、恐ろしく不規程な曲線的聲樂機器音の融合されたものを垂直的の標的の中から覗かうとするからハッキリ見えない不平不満ではないか、私は考へ直して見ました、しかしさうもそればかりではないやうです。

## (二)

それならば何うして、さういふやうな不満を感じないやうに(文樂からいへば感じさせないやうに)すればよいか、これが第二問に答へる大切な點に思ひますが、さういふ感じ方が感じる方においてのみ悪いのであれば、感じるものゝ感じ方を直さなければならぬ。盲滅法界に溺惑して、前後不覺の醉拂ひに等しいフワンになり得るなら言ひ分はないが、それでは困る。コレ位のものゝさういふところに満足點をおいてそれから一點でも上へ出たものを歡喜

する、さういふのでは餘りに妥協的であり、無智な見巧者の埒内に入る。

私は思ふ、第一に昔ながらズーツミ長いこゝ文樂を郷土藝術、古典藝術といふ風に誰か知ら無暗に祭りあげてしまつて、一種不可解(或ひは不可侵な因有的の秘密境においたこゝが、現代人の官能享樂に副はず、一番悪いのであつて、さういふこゝでも開放的であつて、これに接した時、前の項にいつた現實暴露のやうな失望(不平を覺えしめずいつも)「それは單にそれだけ」としての親しみを一般に持たしめる方法を考へるこゝではないでせうか。

この開放的さういふこゝをいろ／＼の方面から説いて見るこゝ、いつか放送局で放送の話があつた時、文樂の權威にかゝはるさか何んさかの理由もこゝに交渉が成立せず、ラデオ送話器の前には絶對に立たぬこゝに決したさういふこゝであつたが、私はこれらを以ての外考へ違ひださ思ひます。知らしむべからず頼らしむべくば昔の專制政治家

のやつたこと、藝術であらうと何んであらうと、もうそんな型は古い、開放に理解あり、親しみがあ、同情があり、感興があり、共鳴があり融合統一がある。誇るべき郷土藝術としての文樂座を持つ大阪に、ラヂオで一つその聲が聞かれぬといふ矛盾、ラヂオフワン、文樂のフワンとしての失望よりも憤怒よりも「思想」にして、そこにあまりの古さを知る。

ラヂオを持つほどの家庭なら、大抵は経験してゐることゝ思ひますが、テノールだ、アルトだ、オーゲストラだハモニカだといふ子供から青年、一ぱいになつて喇叭の前に集まつて來るが、長唄、新内、義太夫となることお祖母さんの番だ、お父さんの番だで通けてしまふ。いふまでもなく馴染んでゐないから無理解であり、面白味もなく全くつまらぬからである。今の子供で腹の中からテノールを聞き覺えて「若き燕よ」など謳ひながら飛出して來たんぢやない。

私は只この一つの現象によつて、今文樂の振はぬ所以、凋落に趣く所以をあまり明らかに知り得たと思ひます、折角の牡丹餅も藏つておけば腐る、「文樂」さといふ山緒の誇りにかゝづらはつてゐて、民衆と接觸の方法を講ずることゝを忘れてゐる限り、これで昔に盛り返される道理がない。野球の隆興さゝもに角力は衰頽した、一方は科學的、一方は非科學的、そこに現代人の習慣に養はれた要求に副ふ副はぬの區別がある。文樂固より今の樂譜による樂、器樂に比すれば非科學的のいひ得る、そして高い籐の奥に隠遁してゐるそれが悪い、現代人の氣が短かい、短かくない、凡てのものに對して信仰を持つ持たぬよりも、第一馴染のないもの、知らぬものを好かう様がない、文樂は面白いと思つてゐるのは私たちのやうな古いものだけで、若いものは面白いも面白くないも全く知らぬのである。

その時、なほラヂオの前にも立たぬ

さといふ如き考へ方がどこかにありさすれば、それは藝術そのものよりも思想的に亡びて行く、今度中座へ持出したさといふことは開放の第一歩さといはれるが、まだそれではその居所が高過ぎる。

若い人に新作講談が讀まれてゐる點から考へて、古いものだから現代人に全然趣味を起させぬさは考へられない趣味を起させる方法を考へてこないから、誰も何んさといはなくなつてしまふのです。

私はいかういふ風に結論したいと思ひます。

(編者より 大江素天氏の右の原稿は二十一頁にある本誌の質問にお答へ下さつたものである)

### 文樂川柳

- 丸髻の新妻もまじる文樂座
- 重荷う丁稚の供や文樂座
- 遣ひ手三人形話す時もあり
- 食満さんを人形にした文樂座

# 編輯後記

◇たてよこ云へばまるで近頃流行のクロスワードパズルの様だがあんな窮屈な約束ばかりに縛あげられたら、ものにしたくない、たてよこいふ言葉の持つ自由さとして無盡にあはれ廻りたいといふのが『劇壇縦横』の生れた意義であります。

◇だがいくら縦横に云つても私だけは地に足のつかない暴れ方はいやです。グツミ地上に大きく立つてして小さな事から着々進んで行きたいと思ひます。そこで先づ本誌の創刊に際して最も手近い問題、大阪の郷土藝術、人形浄瑠璃の道頓堀初出演といふ劇界そのものに取つてエポック上の記念すべき問題を捉へ來たつて。

◇私共はこゝに本誌を發刊するの運びに至りました、それに就いて御多忙中御寄稿下さいました諸先輩に深く感謝いたします。尙各方面の名士に對して

文樂座に關する事項の回答をお求めした所、意外にも多数の御高説をお寄せ下さつた段、併せて誌上より御禮申しあげます。

◇尙本誌の創刊の企劃並びに編輯に關し石割松太郎氏富田泰彦氏にも種々御盡力を仰ぎました第二號よりは右兩氏を始め、尙四五の先輩私等相寄り新面目をたよはせた大阪の新雜誌『劇壇縦横』をつづけて行きます。愛讀者諸彦の御期待を得たいと思ひます。(鳥江生)

× ×

◇東京には文藝春秋、不同調なといふ文藝雜誌があるが、劇壇縦横はその何れでもない。又それらに對する對抗でもなければ挑戦でも又他助でもない、劇壇縦横は劇壇縦横それ自身で生命を持つてゐる、前に鳥江さんが云つてられる様に約束も持たないのである。持たない云ふより最初から造らないのである。活字は持つてゐるがどの字がどので縦横に組み合ふかはわからない。軌道を持たない處に劇壇縦横の尊さがある。

◇豫定に近い原稿がどうやら集まつたのは二十五日だつた。二十六日に印刷所へ廻し、活字を拾ひ初めたのが二十七日からで之を一日には、すつかり本に仕上げて店頭に出べやうといふのである。其間正味四日間、従つてかなりの無理もあつた、日數がないと創刊號の事故と云ふ斷り書きは月並だが、しかし矢張り本號だけは目に見て頂きたいと一言お詫を申し上げればならない。その變り、次號からはうんと努力し、御期待に沿ふ覺悟である。いよく月並になつた。……が、これは偽りのない處にある。

◇桐竹紋十郎の言葉にはわざと紋十郎の寫眞迄も御添下さつたのだが、製版が間に合はず爲に乍遺憾共載し得なかつた事は、吳々も残念だつた。次號には掲載する心組みである。川尻清譚氏に深くお詫いたします。

◇編輯に就き、種々御指導、御注意を給つた石割松太郎氏、富田泰彦氏に、乍略儀誌上より厚く感謝いたします。(佐々木生)

定價	送料
一部 參拾錢 一錢	
三ヶ月 九拾參錢 送料共	
半年 壹圓九拾錢 送料共	
一年 參圓七拾錢 送料共	
▽誌代はすべて前金の事△	
▽郵券代用は一割増の事△	
大正十四年九月廿五日印刷	
大正十四年十月一日發行	
大阪市南區久左衛門町八番地	
編輯者 鳥江 鐵也	
印刷人 成山 柱三	
發行人 大阪市南區久左衛門町八番地 (松竹合名社内)	
發行所 劇壇縦横社	
電話 南(一)二四〇番 (六)六八五番	
印刷所 大阪市東區島町二丁目 植田印刷所	
行發日一回一月毎	

喜劇のおん大  
五郎に因んだ  
良味しい頭饅



大阪戎橋南詰  
道頓堀の

五郎頭饅

祝 創 刊



本 紙 每 號 十 頁

神 戸 名 物

て つ ち り

海川魚  
會席料理

自慢の廣島直送りの

かき料理を一度召しあがって御覽

かき

神戸市新開地(やつこ裏溝の側)中町六丁目

美しい酒の色

香りの高い珈琲

お手軽で

お安くて

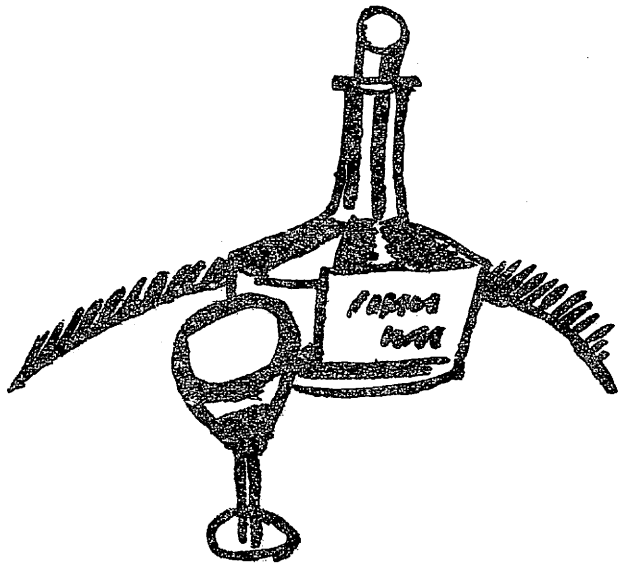
おいしい

御料理

道頓堀の御散歩には

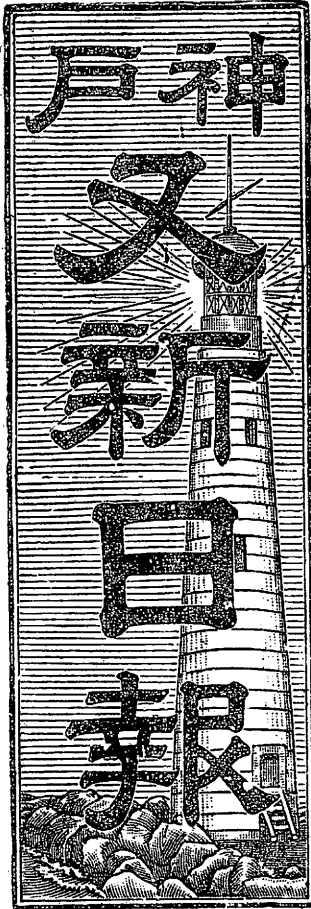
カフェー

ライオンえ





# 祝創刊



頁十號每紙本

年五十二百九十一號明華五十五百五千一元也

振興 廣告 印 脚 戶 第 八 二 五 號	振 興 口 廣 大 版 六 二 五 〇 三 二 〇 〇 〇 〇 〇 〇 〇	元 冠 影 錄 最 廣 六 二 五 〇 三 二 〇 〇 〇 〇 〇 〇	特 指 定 廣 告 刊 例 詳 見 本 報 附 錄 第 一 號	二 日 五 元 一 元 一 角 一 角 一 角 一 角 一 角 一 角 一 角 一 角	廣 告 刊 例 詳 見 本 報 附 錄 第 一 號	新 開 代 印 一 月 一 元 一 月 一 元 一 月 一 元
--	---	--	--	--	---	--

地番一十日丁六町柴市戶神

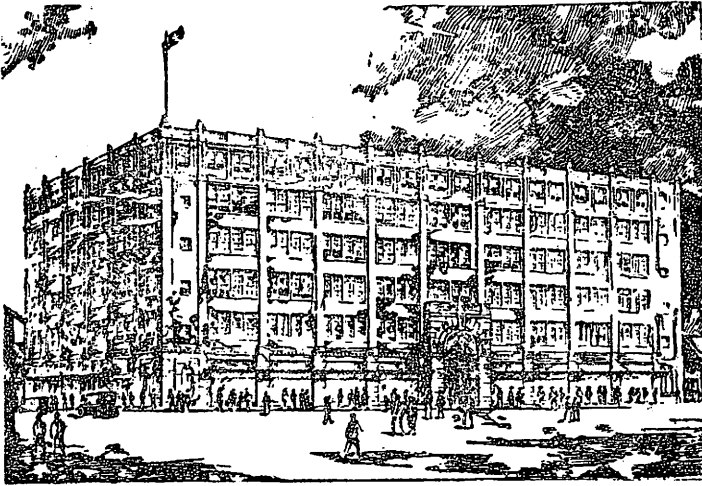
社報日新又戶神

一五本杉人訓印 郎年庚辰久祥人得編發行發

七〇五四山青號報目丁一座康京東

〇五九五北緯電道新田梅區北坂大 局支京東 局支阪大

# 店心中阪大大



## 増築開店

九月十五日

昨秋来店舗工事中の處漸く竣成致し愈増築開店の運び  
 となりました、是偏に平素御眷顧の賜ミ厚く御禮申上  
 げます  
 竣功店舗は舊館の短を補ひ面目を一新し内容外觀共に  
 理想的百貨店として御期待に副ふべく専心奉仕の覺悟  
 に御座いますれば何卒倍舊御引立の程願上ます。

### 一京美會主催

### 染織文化展覽會

九月

### 一餘興四花街名妓舞踊

廿五日ヨリ 五階ニテ  
 十五日ヨリ 六階ニテ  
 廿九日ヨリ ホールニテ  
 廿三日ヨリ

### 一新柄冬服豫約賣出し

廿五日ヨリ 二階ニテ  
 廿七日ヨリ

### 一秋物平常着大安値賣出し

十五日ヨリ 五階ニテ  
 廿三日ヨリ

### 一雜貨合物品大見切賣出し

廿三日ヨリ 五階ニテ  
 十月

### 一兩毛織物展覽會

十一日ヨリ 五階ニテ  
 十二日ヨリ

### 一秋冬呉服雜貨大賣出し

七日ヨリ 五階ニテ  
 九日ヨリ

### 一京都大家新作繪畫大展觀

十四日ヨリ 五階ニテ

## 店服吳丸大



大阪 大心  
 橋 齋

業營間夜  
 業休暇月

大正十四年九月廿五日印刷納本（毎月一回發行）

若く美しく

美しき白さがお肌によく同化して生地そのものを美化し貴女を真に美しく若々しく致します。

若く明るい顔になる

# リート白粉

純無鉛 專賣特許



（錢二料送）錢十三金價定